Honesty

松村順

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒカルと別れて５年ほどが過ぎた初冬のある日，佐為は３度目の降臨を果たします。３人目の宿主は，佐為と同年配（２０代後半）の佐為に似た優雅な容姿の美青年。その青年＝ロミーは自分に似た容姿の佐為に親近感を抱き，自分自身が子供の頃，周囲から「異類」扱いされた経験もあって，幽霊である佐為の存在を受け入れます。そして，佐為に代わってネット碁を打つことを受け入れるだけでなく，リアルの世界でもアマ・プロ混合トーナメントに出場します。

Ｈｏｎｅｓｔｙ ｉｓ ｔｈｅ ｂｅｓｔ ｐｏｌｉｃｙ．『正直は最善の策』を人生の基本戦略とするロミーは，さまざまな誹謗中傷は見越した上で，トーナメントの

優勝者インタビューで佐為の存在を公開しますが，この決断は，ヒカル，アキラ，その他多くの棋士たちに波紋を広げていき，ヒカルとアキラの友情～愛情にも影響を及ぼします。

ＢＬ，ブロマンスがほのかに香りますが，香りだけです。

＊オリ主のロミーは，オリジナル作品『ロミーＶｅｒ．２』ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１９９１３２／のロミーのその後の姿です。もちろん，『ロミーＶｅｒ．２』を読まなくても，ちゃんとストーリーを追えるように叙述しています。

＊これまで投稿した『ヒカルの碁』の二次小説と同様

声に出して語られるせりふは「　」

佐為とロミーの声に出さない会話は《　》

心の中のせりふは〔　〕

で表示しています。

Ｐｉｘｉｖにも投稿しています。

目次

再降臨 ―― 1
顕現 ―― 42
ヒカル ―― 76
ロミー ―― 119
恋心 ―― 162
到達 ―― 206
それから ―― 242

再降臨

Ⅰ　再降臨

本妙寺の墓地。毎年12月中頃にこの墓に詣でる。親戚ではないけど，ボクが心から敬愛し，ボクを深く優しく愛してくれた人，ボクの医学部進学のきっかけにもなった人だから，大学に入学してから毎年，命日に近い休日に墓参する。今年で8回目。医学部に入学し，卒業し，2年間の臨床研修もあと3ヶ月あまりで終わる。その後どうするか，迷いのある気持ちを持て余しながら墓に手を合わせ，しばし考え込み，結局なんの答も見つけられないまま帰途に就いた。日が落ちて間もない墓地，ボクのほかにほとんど人はいない。

時おり落ち葉を踏みしめながら静かに歩くボクの前方に人影が見える。和服，と言っても，小袖とか振袖ではなく，もっと改まった直衣とか狩衣のような衣装に烏帽子らしき帽子を被った，なんとも時代がかった衣装。烏帽子から垂れた髪は艶のある黒髪で肩甲骨のあたりまでまっすぐ流れている。顔立ちは横顔しか見えないけど，端正だ。肌は抜けるほど白い。そして，全体にただようなんとも優雅な，そしていくぶん悲しげな雰囲気。好ましい気持ちを抱き，ボクはその人に近づいた。その人もボクに気づいたらし

く，ボクの方を向いた。その顔を，ボクは思わずじっと見つめてしまった。その人もボクを見つめている。同じことを思っているのだろうか？　似ている。ボクによく似ている。双子のようにとは言わないまでも，兄弟と間違えられそうなくらいには似ている。ただ，アルビノ症で髪にも目にも色素がなく，亜麻色の髪，青い目をしているボクと違い，その人は漆黒の髪に黒い目をしている。肌はボクと同じくらい白い。背はボクより高い。どれくらいそうやって見つめあっていただろ。その人が口を開いた。

「わたしが見えるのですか？」

「えっ？」

　ボクはその問いに驚いた。もちろん，見える。目の前に立っているのだから，見えないはずはない。そんな表情を浮かべたボクに，その人はさらに問いかける。

「わたしの声が聞こえるのですね？」

　ボクはまた驚いた。もちろん，聞こえる。だって，これほど明瞭に発声しているのだから，聞こえないはずはない。ボクは戸惑いながらもゆっくりうなずいた。すると，その人の顔に歓喜の表情が溢れた。

「神よ，感謝いたします。わたしはもう一度この世に戻り，碁を打てる。神の一手を探求できる」

　なんとも奇妙なことを言う人だなと思ったその時，ボクは気づいた。その人の体が透

けていること。その人の体に遮られて見えないはずの墓石や木立が透けて見えることに。〔幽霊?・・・・確かに，「逢魔が時」ではあるけれど・・・・〕こんなことを考えながら，ボクは不思議と恐怖を感じなかった。目の前にいる幽霊があまりに美しく優雅だから?　その顔立ちに兄弟のような親近感を覚えたから?　それとも，驚きが大きすぎて恐怖を感じる余裕がないのか?

「あなたは?」

　とボクはごく自然に問いかけた。

「わたしは藤原佐為（ふじわらのさい）と申します」

「わたしは藤原ヒロミといいます」

　なぜか，幽霊と自然に会話を交わしている。なぜこれほど自然に，何の恐怖心も不信感も抱かずその人と話ができるのか，不思議に思いながらも口が自然に動いていく。

「同じ藤原姓ですね。ひょっとして，ボクのご先祖様でしょうか?　顔立ちもとても似ていますし」

「わたしもそう思って，あなたをじっと見つめてしまいました。失礼いたしました」

「失礼はお互い様です。それより，あなたは，幽霊ですよね。体が透けています」

　その人は手にした扇を口元に広げてフッと笑った。そのしぐさは優雅だけど，扇さえ透けているので，笑う口元が見える。

「そんなにあっさりと受け入れてくださるのですか?」
「だって，目の前にいて，こうして話を交わしているのですから。受け入れるしかないでしょう。ボクはこれまで霊感などなかったし，幽霊とか心霊現象なんて信じてもいなかったけど，こうもありありと目の前に現れたら，その存在を受け入れないわけにはいきません。それをどうやって科学的に説明できるかは，とりあえず不問にするとしても」
「ずいぶんと柔軟というか，心の広いお方ですね。わたしとしてはありがたいです」
幽霊と会話する。なんとも不思議で非日常的なことが，ごく自然にボクの日常に入り込むようだ。
「立ち話もなんでしょう。ここに留まらなければいけない事情がないのなら，一緒に歩きませんか?」
「はい，そういたします。・・・・あなたのことは，ヒロミと呼んでよろしいのでしょうか?」
「もちろん，それでかまいません。わたしはあなたを佐為と呼んでよいのですね?」
「はい。これまでもそう呼ばれていましたから」
「これまでも?」
その人，佐為はゆっくりうなずいた。そのうなずきに誘われるように，ボクは佐為に

語りかけた。
「・・・・いや，ヒロミじゃなくて，ロミーと呼んでください」
「ロミー?」
「はい。子供の頃，親しい人たちからはそう呼ばれていたんです」
「では，ロミーとお呼びいたします・・・それにしても，わたしを『親しい人たち』の仲間に加えてくださるのですか?」
「ええ。なぜか親しみを感じます。たった今お会いしたばかりなのに。まして，あなたは幽霊なのに」
　こう言って佐為の顔を見る。佐為もボクの顔を見る。そして二人してフッと笑顔を見せあった。そしてボクは思い至った。ボクは，この白すぎる肌，亜麻色の髪，青い目のため，子供の頃「ガイジン」と嘲られた。ボクも，そんなふうにボクを嘲る悪ガキたちと付き合おうとしなかった。子供の頃，ボクは「異類」だった。周りはそのような目でボクを見，ボクも自分でそれを受け入れた。その体験が，同じ異類として幽霊を自然に受け入れているのか・・・・。
　墓地を抜けて，それなりに人通りの多い街路を最寄りの駅まで歩きながら，佐為という幽霊がボクにしか見えないこと，ほかの誰もその存在に気付かないことをはっきり理解した。誰も彼の存在を気に留めない。彼はすれ違う人を避けようとするけど，雑踏の

中で避けきれないと，ほかの人の体やキャリーバッグや自転車さえ，彼の体をすり抜ける。だからこそ，彼はボクに「わたしが見えるのですか？」と問うたのだ。それにしても，なぜボクだけ佐為が見え，佐為の声が聞こえるのか？　問いたいけれど，ほかの人がいる中で，ボクにしか見えない，ほかの誰にも見えない幽霊に話しかけるのは憚られた。こんなボクの思いとは別に，佐為は，歩きながら，さらには電車の中で，自身の数奇な運命を語った。

―　わたしは千年も昔，都で帝の碁の指南をしておりました。しかし，御前対局で罠に落ち，都を追い出されて，入水自殺いたしました。恨みと未練を残したわたしの霊は成仏することなく，それから何百年も碁盤に潜んでおりました。わたしは碁盤に近づく人に呼びかけるのですが，わたしの声は誰にも聞こえません。そんな虚しい数百年が過ぎたある日，虎次郎という幼い子供がわたしの声を聞いてくれたのです。その子供は碁を学んでおりました。そして，わたしの願いを聞き届け，以後はわたしに碁を打たせてくれました。・・・ああ，もう分かっておられると思いますが，わたしには体がありません。自分では碁石はおろか塵一つ動かすことさえできません。ですから，わたしが碁を打つためには，虎次郎がわたしの声を聞き，わたしの言うとおりに碁盤に碁石を置いてくれないといけないのです。でもそれは，わたしを見ることのできないほかの人たちの目には虎次郎の碁にしか見えません。

わたしの棋力を宿した虎次郎の碁の名声は高まり，城碁を打つようになり，ついには本因坊家の世嗣に迎えられました。本因坊秀策その人です。秀策の体を借りて，わたしは碁の最善の一手，神の一手を目指しました。ですが，虎次郎は・・・・はやりやまいで３４歳の若さで死んでしまいました。わたしは願いを遂げられぬまま，また碁盤に潜んで時を過ごすことになったのです。

それから百年以上を経て，進藤ヒカルという少年がわたしの声を聞きました。ヒカルは虎次郎と違って，碁にはまったく興味のない子供でした。でも，わたしの願いで碁会所に行き，そこにたまたま居合わせた同じ年頃の子供と対局してくれました。その子は塔矢アキラといって，すぐにでもプロの棋士として通用するほどの腕の持ち主でしたが，わたしは勝ちました。その時の塔矢アキラの真剣な眼差し。ヒカルはそれに感化されて碁に興味を持つようになりました。わたしはもちろん喜んでヒカルに教えました。わたしのすべてをつぎ込むように教えました。そしてヒカルはそれに応えてくれました。乾いた砂が水を吸い込むようにわたしの教えを吸収しました。しかも，ヒカルは塔矢アキラにも勝る素質，才能の持ち主でした。わたしから碁を学び始めて，たった2年でプロ試験に合格しプロの棋士になったのです。だけど，いや当然のことですが，ヒカルは自分の碁を打ちたがりました。

お分かりいただけますか？

さきほども申し上げたとおり，わたしは体を持ちません。自分では碁石を置くことができないのです。わたしが碁を打とうと思えば，ヒカルに打ってもらわないといけないのです。ヒカルが，自分の考えではなく，わたしの言うとおりの場所に碁石を置かないといけません。でも，それは傍目にはヒカルが打っていることになります。その頃，わたしとヒカルの棋力は圧倒的な差がありました。その状態でわたしが打てば，つまり，ヒカルにわたしの碁を打たせれば，ヒカルはあっというまに最強の棋士になってしまいます。そして，ヒカルが自分の碁を打とうとすれば，「手抜き」との非難を浴びることになるでしょう。ヒカルはそんなことを望みませんでした。当たり前です。碁打ちであれば誰しも，自分の碁を打ちたいのです。たとえ，自分で考えるよりわたしの言うままに打つ方が勝てるとしても，それでも，自分の碁を打ちたいと願うのです。それが碁打ちというものです。そして，ヒカルをそのような碁打ちに育てたのは，ほかでもないわたしなのです。こうして，ヒカルが自分の碁を打つためには，わたしに碁を打たせてはいけない，そんな状況になってしまったのです。

そんな中でも，ヒカルは，わたしが碁を打てるよう，できるだけのことをしてくれました。そして，日本棋界の最高峰と言うべき塔矢行洋名人とネット碁で対局する機会さえ作ってくれました。それはわたしにとって最高の対局，最良の思い出です。そして，ヒカルに最善の手を示すことができたと自負しています。この対局を終えて，わたしは

まさにこのために，この最高の対局をヒカルに見せるために，ヒカルのもとによみがえったのだと悟りました。そこでわたしの役目は終わったはずでした。でも，わたしはまだずっとヒカルと一緒にいたかった。そして，わたし自身が碁を打つ機会を得て神の一手を極めたいと願っていました。だけど運命はこんなわたしの願いを聞くこともなく，役目を終えたわたしをヒカルから引き離したのです。

あれから，どれほどの時が過ぎたのでしょうか。今，この電車の窓から見る景色は，ヒカルと別れた日からさほど時を隔てているように見えませんが・・・・　―

それは，進藤ヒカルという少年と別れたのが何年何月のことなのか教えてくれれば，答えられる。そう問いかけようとして，ボクは口をつぐんだ。今は電車の中。ボクたちの周りには多くの人がいる。それどころか，しだいに混み合ってきた車両で，ボクの前に立っている佐為の体に重なるようにほかの人が立っている。こんなところで，ほかの誰にも見えないはずの幽霊に話しかけるわけにはいかない。佐為は，ボクの戸惑いに気づいて語りかけた。

《ロミー，わたしたちは声を出さなくても語り合えます。ロミーがわたしに話そうと思ったことは，声にしなくてもわたしに通じます》

ボクは思わず前を見た。そしてすぐに視線を脇にそらした。佐為を見るボクの視線は，傍目には目の前に立っている人を見ていると思われてしまうから。

《信じられないですか？　では試しに，何でもいいからわたしに話そうと思ってください。思うだけで，声には出さないで》
《ほんとうに，そんなことができるの？》
《ロミー，今「ほんとうに，そんなことができるの？」と言おうとしたでしょう？》
《うん》
《そう。こんなふうに，わたしたちは声を出さないで語り合えます。でも，ご心配なく。決してわたしがロミーの心の中を覗くというわけではありません。ロミーがわたしに話そうと思ったことだけがわたしに通じるのですよ》
《それならいいけど・・・・ところで，佐為はボクの部屋までついてくるの？》
《はい。そうです。そうせざるを得ません。わたしは，虎次郎，ヒカルの次に，ロミーに宿ることになりました。ロミーから離れることはできないのです》
《えっ！》
　ボクは思わず絶句した。佐為はボクの反応を見て申し訳なさそうにしている。
《申し訳ありません。でも，決してご迷惑はかけません。幽霊ですので，飲み食いする必要はないし，着るものもこれだけで十分ですし・・・・ほかに，何が必要ということもありませんから》
《まあ，そうだろうけど・・・・》

　ボクはこれまで誰かと一緒に暮らした経験はある。でも，もう8年ほども一人暮らしをしていて，それにすっかり慣れている。佐為が悪い人でないことは分かる。その美しく優雅な姿形や立ち居振る舞いは心地よいくらいだ。でも，これからずっと一緒にいるというのは・・・・。こんなボクの気持ちを察しているのかいないのか，佐為はボクに尋ねた。

《ロミーのお住まいはどのあたりに?》

《千葉》

《ちば?・・・・ちばというのは，あの一敗地にまみれた頼朝公を数千の軍勢で迎えた千葉常胤（つねたね）にゆかりの千葉でしょうか?》

《ずいぶん詳しいね。まさに，その千葉だよ》

《それは・・・・》

《ちょっと遠いね。でも，もうすぐだよ》

　ここで会話が途切れた。

　やがて電車はボクの最寄りの駅に着き，そこから10分ほど歩いてボクの部屋に帰り着いた。佐為は部屋の中を見回している。

《ずいぶんきれいに片付いてますね》

「うん。いろんなものが乱雑に散らかっている部屋というのは，エレガントじゃないか

ら。余計なものを持たず，少ない持ち物もきちんと片づけているのがエレガントで美しいよね。

〝Simple is elegant. Simple is beautiful.〟」

《申し訳ありません，今の言葉は何という意味でしょうか?》

「あっそうだ。英語には疎いはずだよね。『簡潔は雅。簡素は美』と言えば分かってくれる?」

《ああ，それは確かに。昔から文人墨客が理想としたものです》

「実を言えば，必要ないものを買うお金がないという事情もある」

とボクは笑った。佐為も笑っている。ボクは，部屋に着いたら声を出して話すことにした。声を出さないで語るのは慣れないせいか疲れる。もともと大声ではないから，隣に聞かれる心配はない。ボクは一番知りたいことを尋ねた。

「どうして，佐為はボクに宿ったの? ほかの誰でもなく，このボクに?」

《それは，わたしにも分かりません》

「そうなんだ・・・・じゃあ，なぜ，何のために，佐為はボクに宿ったの? もっと碁を打ちたいから?」

《そうです。もっと碁を打ちたいのです。神の一手を極めるために》

「でも，どうやって？　碁は相手がいないと打てないよ。ボクは相手になってあげられない。ボクの事情はおいおい話すけど，進藤ヒカルさんみたいに碁に興味を持つことはないと思うから」

《それは》

　と言って佐為は机の上のパソコンを指さした。

《これはパソコンともうすものですね。これで碁が打てるはずです。ネット碁といいます》

「ああ，インターネットで碁が打てるんだ・・・・ずいぶん新しいことを知ってるね？」

《ヒカルと一緒の頃，１ヶ月ほど毎日のようにネット碁を打っていましたから》

「なるほど・・・・じゃあ，さっそく打ってみようか」

《よろしいのですか？》

　佐為は跳び上がらんばかりに喜んでいる。その姿を見ると，ちょっとくらいネット碁に付き合ってもいいかと思う。

　パソコンを立ち上げ，インターネットに接続し，ネット碁ができるサイトを探す。幾つかあるけど，まあ適当にＷｏｒｌｄＧｏというサイトにした。まずアカウントを作る。アカウント名は，Ｆｕｊｉｗａｒａｎｏｓａｉでは長すぎるな。ＦＪＷＲｓａｉでいいだろう。パスワードは・・・・ＦＪＷＲｒｏｍｙでいいか。サクサクと作業を進め

たけど，「段位の自己申告」という項目で入力作業の手が止まった。注意書きを読むと，ＷｏｒｌｄＧｏには２０級から８段までの段位があって，最初は自己申告とのこと。ただし，実際に対局を始めて，勝敗から推測される実力が自己申告を下回っていれば，容赦なく段位が下がり，上回っていれば段位が上がる。基本的に自分が対戦を申し込めるのは自分の段より４段上までとのこと。弱い参加者がむやみに強い参加者に対局を申し込むのは，申し込まれる側にとって迷惑だから作られた規定らしい。ボクは佐為に説明する。

《では，８段と申告してください》

「すごい自信だね」

と話しかけると

《本因坊秀策ですから》

と胸を張って答えた。ボクは笑みをこぼした。とても美しくて優雅だけど，どこか無邪気というか子供っぽいところがある人だな。ともかく，アカウント作成が終わり，晴れて対局。同じ８段を名乗っている参加者にさっそく対局を申し込む。最初の２名には拒否されたけど，３人目は受けてくれた。佐為が扇で指示する場所をボクがクリックする。１時間もしないうちにあっさり佐為が勝った。

「ほんとうに強いんだね」

佐為は誇らしげにうなずく。その時，ボクにふとあることが思い浮かんだ。
「ボクは碁のことはほとんど何も知らないけど，本因坊という名前くらいは知っている。それと，とても碁の強い人は，碁を打ってお金を稼げることも知っている」
ボクはここで言葉を切って佐為を見る。思ったとおり，佐為はちょっと顔をしかめている。
「佐為のように純粋に碁を愛する人にとっては，碁でお金儲けする話を聞かせられるのは不愉快だと思うけど，ボクの事情が係わることだから，最後までがまんして聞いてほしい」
佐為はゆっくりうなずいた。
「ボクは，身寄りがないんだ。１２歳の時に両親と姉が事故で死んだ。それからしばらく叔母さんのところに身を寄せていた。１７歳くらいから東京に出てきて生活している。でも勉強は好きで，まあ自分で言うのも何だけど，頭も良かった。それで２０歳で医学部に入学した。お金を出してくれる人がいないから，借金して学校に通った」
《借金？》
「奨学金と言うんだけど，要するに借金だよ。学費と生活費あわせて1年で２００万，6年で１２００万円。要するに今のボクは１２００万の借金を抱えているんだ」
佐為は驚いたように目を見開いている。

「2年前に卒業して，今は研修の2年目。来年3月で研修は終わる。４月から医者になれば，１２００万の借金を返すめどは立つんだけど・・・・」

ここでボクは言いよどむ。

《ロミーは医者になりたくない?》

ボクは言葉を選ぶのにちょっと考え込んだ。

「医学の勉強は好きだった。基礎医学も臨床系も。医者の仕事も嫌いじゃないんだ。内科系も外科系も精神科も。研修ではいろんな科をローテーションする。どの科もそれなりに面白い。でも，医者の仕事はそれなりに面白いけど，医者たちとの付き合いは・・・・。どうしてなんだろうね，医者，一人一人を見れば，悪人ばかりじゃないんだけど，それがたくさん集まって医者の世界を作ると，その世界は何とも・・・・いや，それは重大な問題じゃない。一番の問題じゃない。一番の問題は，ボクが迷っていることなんだ。このまま臨床医になるか，それとも研究者を目指すか」

《リンショウイ?》

「ああ，佐為には分からない言葉だね。臨床医というのは，まあ，普通のお医者さん。患者を診て，治療するお医者さん」

《そのほかに，どんな医者がいるのでしょう?》

「患者を診ないで，研究している人たちもいる」

《なるほど。それで，ロミーは研究者になりたいと思っている》
「そこが，ボクにもはっきり分からないんだ。興味のある分野，好きなテーマはある。比較解剖学とか進化形態学と言われる分野なんだ。子供の頃から好きだった」
《難しい言葉を言われても分かりませんが，子供の頃から好きだったのなら，その道に進めば良いのではないですか？　わたしが碁の道に進んだように》
「そこで迷っているんだよ。確かに子供の頃から好きだったけど，自分の一生の仕事にするほど好きなのかと自問すると，確信がもてない。かといって，こんなあやふやな気持ちで臨床医になって患者を診るのは，患者に失礼だね。そう思って，とりあえず自分の研究への熱意を見極めようと思って，来年の４月から，進化形態学関係の講義を聴講する手続きを進めている。ただ，そうなると，しばらく無収入になるんだ」
　佐為はうなずいた。
《・・・分かりました。事情はおよそ分かりました。そのように迷うのは，それだけ医者の仕事についてまじめに考えているからこそでしょう。医者という仕事について真剣に考えていればこそのことでしょう。いい加減な気持ちで医者になる者たちより，よほど立派ですよ。・・・つまりロミーは，これからしばらくの間は，わたしが碁を打って稼ぐお金で生計を立て，その間に自分の行く末をじっくり考えたい，迷いを振り切るための時間がほしいということですね。よろしいですよ。そういうことなら許せます。

手助けしましょう。それに，むしろうれしいくらいです。わたしはロミーの体を借りないと碁を打てません。ロミーがわたしに代わって碁を打ってくれるのは，わたしにとってこの上なく大きな恩義です。その恩義に報いるために，これからしばらくロミーの生計を支えるのは，ささやかな恩返しですよ》

「佐為，ありがとう」

ボクは深々と頭を下げた。

《ロミー，頭を上げて。そんなに深々と頭を下げないでください。そんなに頭を下げられるほど大それたことをするわけではないのですから》

ボクは頭を上げ，ゆっくり首を振った。

「大きなことなんだよ。生身の人間は，幽霊と違って，飲み食いしないといけないし，たまには服も買わないといけないし，雨露をしのぐ住まいも借りないといけない。そのためのお金を稼がないといけない。その苦労を解消してくれるのは，大きなことなんだよ。ボクが迷うための時間を与えてくれるのは，大きなことなんだ」

佐為はこう語るボクに慈しむような笑みを見せた。

《それにしても，借金してまで勉学に励むとはなんとも見上げた・・・・ヒカルに爪の垢でも煎じて飲ませてあげたい》

「えっ？」

《あっ，いや，何でもありません》

そのあわてぶりに，この場の雰囲気がなごんだ。「ヒカル」という名前を聞いて，ボクはインターネットで「進藤ヒカル」という名前を検索した。同姓同名の人が何人かいるけど，棋士の進藤ヒカルは一人しかいない。日本棋院のサイトに小さな顔写真付きで略歴が記載されている。

「佐為，ヒカルって，この人？」

佐為はパソコンの画面を見て，一瞬驚き，懐かしむような表情になり，そして涙を浮かべた。

《ヒカル・・・・》

それから先は言葉にならないような。ボクは紹介記事を読む。

「１９８６年生まれ。ボクより８歳年下だね。今１９歳だけど，別れた時は何歳だったの？」

《確か，１４歳でした》

「じゃあ，５年前なんだ」

こんなボクの言葉が耳に入っているのかいないのか，佐為は進藤ヒカルの写真をじっと見つめている。

「会いたい？」

佐為はしばらく考え込んだ。

《いえ，会わない方がいいでしょう。ヒカルはこの５年の間に自分の碁を作り上げ，自分の世界を築いているはずだから。わたしが邪魔しない方がいいはずです》

佐為は深く自分の思いに沈んでいる。

「画面を変えるよ」

と声を掛けて，ボクは，アマチュアも参加できて賞金稼ぎのできる碁のイベントをインターネットで調べた。意外なほどあっさりと見つかった。「日本オープン碁トーナメント」。全国を１６の地区に分け，地区大会を行ない，その優勝者１６人とプロなどのシード棋士１６人あわせて３２人で全国大会を行なう。１回戦，２回戦，準々決勝，準決勝，決勝を勝ち抜けば優勝。優勝賞金は３００万円。

「３００万あれば2年暮らせるね」

《そうですか?》

「うん。1年で１５０万，1か月１２万５０００円。それだけで生活する自信はあるよ。１５万なら余裕だね」

こんな冗談を言いながら，ボクはサイトの説明を読んでいく。地区大会は5月から7月にかけて行なわれ，全国大会は9月から１０月にかけて行なわれる。参加申込みはその年の1月から3月末まで。

「来年になったら申し込もう。それまではネット碁で腕を磨こう。佐為の強さはさっきの対局で分かったけど，佐為の目指すのはトーナメント優勝なんて小さな目標ではないからね」

佐為はうれしそうにうなずく。ボクは時計を見る。まだ８時をちょっと回ったくらい。

「今夜は，寝るまでネット碁をやる？」

《よろしいのですか？》

「うん。ご祝儀だよ。生活の不安を取り除いてくれたことへの感謝を込めて」

《わたしこそ，ありがとうございます》

そう言って，ネット碁を始めたら真剣な勝負師の表情になった。１２時近くまで，何局打ったのだろう。よく覚えていない。すべて佐為の勝ち。これが新たなｓａｉ＝ＦＪＷＲｓａｉの不敗神話の始まりだとは，この時のボクには思いも及ばなかった。

翌日，ボクは日傘をさして仕事に出かける。佐為は驚いた。

《冬に日傘をさすのですか？》

「ボクはそうしないといけないんだ」

と言って，ボクは事情を説明した。医学的にはアルビノ症，メラニン色素が合成できない先天異常。直射日光を浴びるとやけどのように肌が赤く腫れあがり，長期的にはガ

ンのリスクが上がる。だから，日中の外出は厳重に制限されている。どうしても日中外出する時は夏でも長袖に長ズボン，日傘をさし日陰を選んで歩く。だからボクは物心つく頃からほとんど外でほかの子たちと遊ばず，家の中で本を読んで過ごした。

《それで，ロミーは物知りなんですね。でも，ほかの子供たちと外で遊べなくて，かわいそうでしたね》

「そんなことはなかったよ。ボクにとってはむしろうれしいことだった。本を読むのが好きだったし，がさつな野蛮人みたいな子供たちと一緒に外で遊びたいなんて一度たりとも思ったことはないから」

《そうですか・・・・》

「それに，夕日が沈む頃には散歩することも許されていたんだ。姉と一緒に散歩して，夕焼けを眺めていた。三日月も。日の光より月の光が好きだけど，とりわけ三日月が好きだよ」

《ああ，蛾眉の三日月。すてきですね》

その姉がヒカルという名前であることは話さなかった。まだ佐為には話せない。進藤ヒカルさんと同じ名前だから，かえってうかつに話せない気がする。

こんな話をしているうちに，研修先の病院に着いた。研修の間，佐為はずっとボクのそばにいる。ボクに宿った幽霊だから当然なのだけど，そばに幽霊の存在を感じながら

仕事をするのは奇妙な感覚だった。でも，それもじきに慣れた。
　仕事を終えて帰る時，外はもうすっかり夜だった。
「初夏の頃は，この時間にちょうど夕焼けなんだけど，今の時季だともうすっかり暗くなっているね。その代わり星が見えるから，それはそれでいいんだけど」
　そう言いながら，ボクは冬の星空を指さした。シリウスはまだ昇っていないけど，オリオン座，牡牛座，御者座は東の空に見える。佐為もボクの指さした方角を見ている。すばるは４等星の集まりだから都会の空では見えにくい。
「『星はすばる』と清少納言が称えているけど，よく見えないね。都会は地上の明かりが多すぎて，夜空が真っ暗にならないから，すばるのような光の弱い星たちは見えにくいんだ」
　そう言って，ボクは牡牛座を構成するＶ字形のヒアデス星団の上の方を指さした。そこにあるはずと思って目をこらせば，何とか見える。佐為も見つけたらしい。
《ああ，そうやって指さされれば見分けられます》
「星も好きだった。星にまつわる神話や物語。それに，星の科学もね。天文学，ニュートン力学，相対論，宇宙物理学，原子物理学，素粒子論・・・・」
　こんな話をしながら帰宅して，軽い夕食を摂り，ボクはその日の研修で気づいたこと，学んだこと，あるいは疑問に思ったことや「こうしておけばよかった」という反省など

をパソコンのノートに記入する。それが終わると，佐為のネット碁に付き合う。だいたい2局。たまに3局。それが終わるとボクの勉強。そして12時前くらいに寝る。これが，佐為がやって来てからのボクの生活パターンになった。当直のある日は，残念ながらネット碁はできない。それは佐為も了解してくれる。その代わりというわけでもないけど，休みの日は，午前と午後と夜に2局ずつくらい対局する。

佐為との生活は静かに淡々と流れていく。年が明けて，ボクはトーナメントに参加を申し込んだ。この頃になるとネット碁の世界で佐為の強さが広く知られるようになったらしい。ログインするとすぐに対局が申し込まれる。それもほとんど8段とか7段といった強い人たちから。佐為は喜んでいる。ボクも，佐為の強さが認められるのはうれしい。ボク以外の誰にも見えない佐為だけど，ネット碁の世界には佐為が確実に存在している。

ネット碁を終えてボクが勉強している間，佐為は静かに過ごしている。打ち終えたばかりの対局の経過をたどりなおして検討しているのだと語る。でも，たまに勉強しているボクを斜め後ろから見守っていることもある。

「退屈しない？」

《そんなことはありません。人が熱心に勉強している姿は見ていて飽きません》

「それならいいけど」

《それに，ロミーが勉強している姿は凛々しいですよ》
「凛々しい？・・・・初めてだよ，そんなこと言われるの」
《勉強しているロミーの凛々しさを分かる者がこれまで一人もいなかったのですか？
それこそ，信じられないですね》
「まあ，ボクは勉強する時は一人だから，考えみるとボクが勉強している姿を目にするのは佐為が初めてかも」
《なるほど，それで納得しました》
ごくたまには，話しかけることがある。「勉強の邪魔になるのなら，相手しなくていいのですが」と断りを言って。勉強の内容に興味があるらしい。ボクは，めったに断らない。ボクにとって無駄なおしゃべりではないし，佐為と語り合うのは，楽しいから。人と語り合うのが楽しい，何年ぶりだろう，この感覚。
／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／
（ここから第三者視点）
ヒカルは「塔矢，いるか？」と声をかけて塔矢邸に上がり込んだ。
最初の出会いから7年あまり。ヒカルは，行洋夫妻がいない日には遠慮なく塔矢邸を訪れ，夜が更けるまで碁を打つ。夜が遅くなると泊まっていくこともある。対局の後の

検討で「子供のけんか」のような激しい言い合いになるのは相変わらずだが，棋界にあって若手の両翼と見なされている二人は互いに良きライバルであり，かけがえのない友でもある。そして，ほかの誰と打つよりも，ヒカルはアキラと打つのが，アキラはヒカルと打つのが楽しいと感じている。その気持ちを相手に伝えるのはできないままであるけど。

その日，いつも碁を打つ座敷で，アキラはパソコンに向かっていた。

「棋譜の整理か？」

とヒカルが声をかけても振り向きもしない。画面を見ると，ネット碁をやっている。

「オマエがネット碁なんて珍しいな。明日は雪でも降るか」などと冗談を言おうとしたヒカルはパソコン画面に繰り広げられる対局に目を奪われ，冗談を言うゆとりなど消え失せた。

「佐為・・・・」

思わず口にしてしまった。はっと思って口を手で押さえたが，幸いアキラは対局に夢中で聞こえなかったようだ。アキラはすぐそばにいるヒカルの存在に気づかないほど，パソコン上の対局に集中している。その傍らで，顔色の変わったヒカルは心の中でつぶやいた〔佐為，いつ戻ってきたんだ？　今どこにいるんだ？　なんで，オレじゃなくて，ほかの人なんだ？・・・・〕アキラが対局に集中しているのがありがたかった。

対局は３０分ほどで終わった。アキラの中押し負け。この間，ヒカルは平静をよそおい，冗談をたたけるほどには落ち着きを取り戻した。
「史上最年少の名人様が中押し負けかよ」
アキラは脇にいるヒカルに顔を向けた。いささかむっとした表情。
「来てたのか」
「３０分くらい前にな」
いつものアキラなら，自分をからかうような冗談に本気で返すのだが，この時は，平静をよそおいながらもヒカルの瞳に浮かんでいる悲しみ，寂しさの色に気づいて，〔進藤は時おり，こんな表情を見せる〕と思いながら，怒りの口調を抑えた。
「相手がｓａｉなら，負けても恥ではないよ」
「本物のｓａｉなのかよ」
「この打ち筋を見て，ｓａｉじゃないと言うか？　どう見ても，ｓａｉだよ。かつて１ケ月だけネット碁に存在し，ボクを打ち負かし，不敗神話を作り上げ，忽然と姿を消し，それから１度だけ現れて父と対局した。あのｓａｉのほかに，誰が考えられる？　ｓａｉが復活したんだよ。５年の時を隔てて。今回はＦＪＷＲｓａｉと名乗っているけど」
もちろん，ヒカルにもそれがｓａｉ＝佐為であることはよく分かっている。
「いつから，いるんだ」

「１ヶ月くらい前，去年の１２月の中頃かららしい」
「もう，何度も打ってるのか？」
「いや，ボクはこれが初めてだ。『今回は』と言うべきかな・・・・キミこそ，まだｓａｉと対局していないのか？」
「あっ・・・・オレは，まだだ・・・・」
　ここでヒカルは黙り込んだ。アキラは考える〔進藤がここにいるということは，ｓａｉは進藤じゃない。でも，かつて，６年前，７年前，確かに進藤の中にｓａｉがいた。そうとしか思えない・・・・〕そしてアキラはヒカルに話しかける。
「相変わらず，ｓａｉは対局の後にいっさい検討をしない。キミ，ｓａｉの立場になって今の対局をボクと検討してくれないか？」
「オレがｓａｉの立場になる？」
　ヒカルは，また内心によみがえりそうな動揺を隠すため，ぶっきらぼうな口調で問う。
「無理かい？」
「無理に決まってるだろう」
「そうか・・・・」
　こうなると，ヒカルをこれ以上問い詰めても仕方ないと，アキラは長年のつきあいから学習している。アキラは碁盤を取り出して二人の間に置いた。

「打とうか」
「ああ」
　ヒカルはアキラに向き合って座る。打ち始めれば，対局にひたりきるのはヒカルもアキラも同じ。雑念や不安が消え去り，ヒカルの心は澄み渡る。〔ああ，オマエと打ってるのが一番楽しい〕
　１局打ち終え，いつものようなけんか腰の検討も終える頃には夜も更けていた。
「泊まっていくか？」
「いや，今日は帰る」
　そう言って，ヒカルは塔矢邸をあとにした。
　ｓａｉ＝佐為の復活に動揺しながらも，ヒカルはもう１４歳の子供ではない。動揺しながらも手合をサボりはしないし，気が散って負けることもない。ｓａｉ＝佐為の復活はヒカルの対局に何の影響も及ぼさない・・・いや，そうではない。それは確かにヒカルの対局に影響した。ヒカルは強くなった。碁を打つことで，対局に没頭することで，内心の動揺を乗り越えようとするかのように，ヒカルはひたすら打った。
「進藤９段，また一段と強くなった」
「一皮むけたみたいだな」
「鬼神のような強さだ」

などと，ささやかれた。ただ，体には負担となった。対局の後にしばらく立ち上がれず，対局の相手から「進藤9段，大丈夫ですか？」と声をかけられることもある。対局を見に来ていたアキラから「進藤，大丈夫か？」と体を揺すられることもある。こんな時，ヒカルはいつもの口調で，

「こんだけの碁を打ったんだ。疲れるのが当たり前だろう」

と切り返す。

折からの本因坊リーグ戦を鬼神の強さで勝ち抜き，挑戦者となった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

／／

（ここからロミー視点）

2月末頃の土曜日の夜だった。ネット碁を終え，勉強を始めた頃から千葉に珍しい雪が降り始めた。車の往来も減り，街のざわめきも雪に吸い取られる静けさの中，佐為が語りかけた。

《もう2か月あまり，わたしはロミーを身近に見ています。医師として仕事をする時も，こうやって自分の部屋で勉強する時も。ロミーはまじめに研鑽を積んでいます。そして，誠実です。もしわたしが病気になったら，ロミーに診てもらいたいと思うほどです。それなのに，どうしてロミーは医者，臨床医になるのをためらうのですか？》

　ボクは佐為の方に向き直った。佐為はボクをまじめなまなざしで見ている。ボクは心の中でつぶやいた〔そうだね。佐為にはきちんと説明しよう。佐為なら分かってくれるかもしれない〕

「どうして医者になるのをためらうのか，それは，ボクには心がないから。心がないかもしれないと恐れているかから」

《心がない？　それはいったいどういう意味ですか？　ロミーに心がないなんて，こんなに優しく気配りのできるロミーに心がないなんて》

「それはね・・・・」

　ボクは佐為を見る。

「佐為，これからの話はかなり長くなる。途中で何か言いたくなるかもしれないけど，とりあえず最後までボクに話させて」

　佐為はしっかりうなずいた。ボクはゆっくり深呼吸して，話し始めた。

「たとえば，誰かを好きになったとする。たいていの人は，男であれ女であれ，相手に告白しようかどうしようか迷い，思い悩むのが普通だけど，ボクはそれを見ていて『さっさと打ち明ければいい』と醒めた気持ちで考えるんだ。そんなことをウジウジ悩んでいるのは時間の無駄，心の無駄遣い。さっさと告白して，相手が受けてくれればもちろんうれしいし，拒否されても，もうそれで相手の気持ちを思い悩む必要はなくなるから，そ

れはそれで悪くない。どうしてこんなふうに割り切れないんだろうと思ってしまう。

たとえば，誰かと付き合っているとする。なぜか分からないけど，相手に嫌われてしまって，もう付き合いたくないと言われたら，もちろんボクだって悲しい。でも，それはそれで仕方ないと割り切って，後に引きずらないと思う。『去る者は追わず』とさらりと割り切る。だから，そんな時に未練がましく思い悩み，悲しみ，傷つく人を見ていると，歯がゆくなるんだ。

たとえば，誰かと付き合っているとして，それでも，毎日２４時間一緒にいるわけじゃない。ボクは，その人がボクと一緒にいる時，ボクに優しくしてくれれば，それでいい。ボクと離れている時，ほかの誰かに優しくしていても，別に何とも思わない。だって，自分のそばにいない人が自分の見えないところで何をしていても，ボクには関係ないことだから。でも，たいていの人はこんな時に嫉妬するんだよね。なぜ，嫉妬なんてするんだろう。自分も幸せにしないし，相手も幸せにしないのに。

昔，ある人にこの話をしたことがある。その人は『ロミーはほんとうの恋をしたことがないのよ』と言った。そう言われた時，ボクの半分は『だったら，人はほんとうの恋なんかしない方が幸せ』と思った。でも，ボクのもう半分は『ひょっとしたら，ボクには，何か決定的に大切なものが欠けているのかもしれない』とも思った」

ボクはここで一息ついた。佐為はじっとボクを見ている。ボクは話を続けた。

「こんなこともある。ボクは好きなものは好き，嫌いなものは嫌い，正しいと思うことは正しい，間違っていると思うことは間違いと，嘘偽りなく言うんだ。その方が人として正しい生き方だというだけでなく，その方が楽だから。自分の気持ちや判断を偽るより，正直である方がずっと楽だから，そうしている。その結果，誰かから嫌われるとしても，それはそれで仕方ないと割り切れる。人に嫌われないために自分の気持ちを偽る方が辛いから，正直に振舞う。でも，たいていの人はこんな風に割り切れないで悩み苦しむんだよね。

　現実の世界もそうだし，物語の世界でもそうだね。たとえば『源氏物語』を読むと，好きを好きと言えない悩み，嫌いを嫌いといえない苦しみ，去って行く人への未練，愛しい人への嫉妬，率直な振る舞いを許されない苦悩とかが描かれている。その気持ちを理解はできる。頭で理解することはできる。でも心で感じること，自分のこととして切実に体感することはできないんだ。そんな悩みや苦しみはボクには縁がないから」

　ボクはここまで話して，佐為に顔を向けた。佐為もボクを見つめる。そして，ボクに語りかけた。

《それは，少しも悪いことではないと思います。そのように何事もさらりと流せて余計な嫉妬もしないのは，むしろ立派なことではないでしょうか？　正直は恥じるべきことではありません。人の機嫌を取るために自分の気持ちを偽る必要はありません。確か

に，恋を知らないのは不幸かもしれません。でも，それを補ってあまりある幸せがあると思います。ロミーの生き方には》

「ボクもそう思う。『君子の交わりの淡きこと水の如し』というのはボクの理想だし，人とそのように付き合える方が幸せだと思う。自分を偽るより自分に正直に生きる方が幸せだと思う。ただ，ボクは普通の人たちの悩みや苦しみが分からないということなんだ。いや，一応は分かると言ってもいい。人はこんな時こんな風に悩むんだろう，こんな風に苦しむんだろう，こんな風に嫉妬に胸を焦がすのだろうと理解はできる。でもその気持ちを自分のこととして切実に感じることはできないんだ。むしろ，そのような感情にとらわれる人たちを冷ややかに見てしまいがちなんだ。ボクが誰とも付き合わず一人で生きていくのなら，人と触れ合うことのない仕事をするのなら，それで構わない。でも，医者というのは，人と触れ合わないではいられない仕事なんだよ。しかも，医者の方が患者より強い立場なんだ。強い立場の方が弱い立場にある人の思いに配慮すべきはずだけど，相手の思いそのものを実感できないとしたら，ボクは知らず知らずのうちに患者を傷つけてしまうんじゃないかと心配なんだよ。多くの人が悩み苦しむことに悩みもしない苦しみもしない人間が医者になっていいのかと迷うんだ。まして，ボクが一番興味のある臨床科目は精神科なんだ。今ちょうど，研修でやってるところだけどね」

佐為はボクをまじまじと見る。そしてフッと息を漏らした。
《ロミーは，ほんとうに誠実な人ですね》
佐為はボクを慈しむように見る。こういう時，ボクは佐為がずっと年上に見える。見た目は同じくらいの年頃なのだけど・・・・。
《それで，ロミーは臨床医の道は選ばず，研究者になるつもりなのですか?》
ボクは，自分の思いから引き戻された。
「それは，この前も説明したけど，その点で迷っているんだ。臨床医の仕事も諦めきれてはいないけど，とりあえず，もうちょっと勉強を続けたい・・・ああ，ちょうどいい機会だ。説明しようか，ボクが興味を持っている比較解剖学，進化形態学のこと。佐為はけっこう知的なことに興味があるみたいだから」
「それはぜひ，お願いします」
佐為の目が輝いている。
佐為の知識はたぶん幕末のレベルで止まっている。進藤ヒカルさんとこの種の話はほとんどしていないだろうから。だから，幕末の人にも分かるように進化論の基礎を説明し，それから動物の体の進化，魚類から哺乳類に至る体の形の進化を説明する。そして，人の体の進化論。もともと魚から進化したヒトという生き物が，遠い昔の魚類や爬虫類から受け継いだ体の構造を，直立歩行という自分の条件にあわせて変化させ，使い

こなした。その結果としての今のヒトの解剖的構造。その構造の部品一つ一つもまた機能にあわせた意味ある形になっている。こんなボクの話を，佐為はまじめに聞いている。真剣な興味を示し，理解している。

「佐為は碁バカじゃないんだね。碁以外のことにも興味を示すんだね。そして，すごく理解力がいいよ」

ボクは素直に褒めたつもりだけど，佐為は気分を害した。

《何をおっしゃいますか。わたしだって，和歌も学びました。笙や琵琶もたしなみます。舞だってちゃんと舞えるんですよ》

まじめに反論する佐為の表情に思わず笑みが漏れそうになる。こういう時の佐為は子供っぽい。

「ごめん，ごめん」

ボクは素直に謝った。それから，ちょっと間をおいて話を続けた。

「最近知ったんだけど，進化形態学のほかに，進化心理学というのもあるらしい。心を進化論的に研究する分野」

「・・・・？」

佐為は何のことだか分からないような表情をしている。無理もない。でも，説明すれば分かってくれるはず。

「佐為，動物に心はあると思う？」
　佐為はちょっと考え込んだ。
《あると思います。犬や猫を見ていて，喜んだり悲しんだりしているように思えます。馬や牛もそうです》
「そうだね。心は直接には見えないから，確実なことは言えないけど，目に見える表情や行動から推測する限り，哺乳動物には心というか，感情，あるいは情動はありそうだね。じゃあ，魚には？」
《魚の心ですか？》
　佐為は返事に詰まった。
「今の段階の研究によれば，魚類や両生類もごく原始的な感情，情動，とりわけ恐怖は持ち合わせていると考えられている。その方が生存に有利だから」
　佐為は首をかしげている。
「ちょっと考えてごらん。蛇を見て反射的に『怖い』と感じて逃げ出すカエルと，蛇を見ても平気でいるカエル，どっちが生き延びやすい？」
《ああ，なるほど，そういうわけですね》
「そういうわけだよ。生存に有利だから恐怖という感情が動物の脳に生まれ，維持された。やがて，爬虫類を経て鳥類になれば，恐怖だけじゃなく喜びや愛着といった感情も

生まれたと推測されている」

《確かに，雛を育てる親鳥を見ていると，そう思えます》

「うん。雛を愛し丹念に育てる親鳥の方がそうでない親鳥より自分の子孫を残しやすいだろう。だから愛着も生存に有利だね。とまあ，こんな具合でいろんな感情が生き物の脳に生まれ，定着していった。そしてボクたちヒトに至る。基本的に，感情は生存に有利だから脳に固定された。生存に不利な感情，そんな感情を持った個体は淘汰されたんだろう。こんな進化論的な観点から動物やヒトの心を研究する分野だよ」

「なんだか，おもしろそうですね」

「うん。だから，この４月から，進化形態学だけでなく進化心理学の講義も聴講することにしてるんだ」

　こんなことを語り合ううちに，窓の外がかすかに明るくなっていた。雪明りだけでない，長い冬の夜が明けかけた，朝の先駆けのかすかな光も空から漏れているようだった。

　臨床研修ローテーションの最後は精神科だった。その日の仕事を終えて病院の廊下を歩いていると，教授が話しかけてきた。

「学生の頃から，キミには目をつけていたんだけどねえ。わたしだけじゃない。たぶんすべての科の教授がキミを自分の医局に迎えたいと思っていただろう。学生の時から群を抜いていたけど，研修に入っても卒業したばかりとは思えない手並みで仕事をこな

している。別に研究の意義を軽んじるわけではないが，なぜ臨床の現場に立とうとしないのだ？　なぜ，その人並み優れた能力を患者のために役立てようとしないのだ？　そもそも，キミを引き付ける研究とは，どんなものなんだ？」

「進化形態学と進化心理学です」

　ボクは簡潔に答えた。

「進化心理学・・・・そんなもの・・・・」

　と言って，さすがにまずいと思ったのか教授はそこで言葉を切った。ふだんのボクなら，そんな言葉はさらりと受け流しただろう。でも，この時，ボクは一言返したかった。

「お言葉ですが，進化心理学は『そんなもの』ではありません」

　ボクは教授をきつい視線で見つめる。教授も，一介の研修医から反論されて不愉快なのだろう，ボクをにらみつけている。ボクはそんな教授に背を向けて歩き始めた。佐為があわててボクに話しかける。

《ロミー，大丈夫なんですか？　教授にあんな口をきいて》

《大丈夫だよ。どうせ3月末でこの病院とは縁が切れるんだ》

《そうかもしれませんが・・・・いつの日かロミーが迷いを吹っ切って医者の仕事をしようと思った時，教授の機嫌を損ねていてはまずいのではありませんか？》

《その心配も不要だよ。・・・・佐為，世界は広いんだ。その広い世界で，たかだか1つ

の大学の医学部の精神科の教授の力が及ぶ範囲なんて，米粒ほどに小さなものだよ。小さな米粒の外には，広くて自由な天地が広がっているんだよ》

ボクは明るい口調で明るい表情で佐為に語りかけた。

《ロミーは見かけによらず豪胆ですね》

《豪胆・・・？　豪胆というのとは違うと思うな。そうじゃなくて，ボクは無意味な恐怖は抱かないんだ。今のボクにとって医学部の精神科の教授を恐れる理由はない，だから恐れない。それだけのことだよ》

《そのようにきっぱり割り切れるのを「豪胆」と言うのですよ。恐れるべき理由のあることさえ恐れないのは「蛮勇」というものです》

《なるほど・・・・》

3月末で臨床研修が終わった。4月になって，ボクは進化形態学や進化心理学に多少なりと関連のある講義を聴講するため，医学部のある亥鼻（いのはな）キャンパスから，理学部や文学部のある西千葉キャンパスのそばに引っ越した。

週にいくつか，学部や大学院の講義を聴き，図書館で文献を探し，借り出せないものは館内で閲覧し，借り出せるものは借りる手続きをする。そばにはいつも佐為がいる。佐為はボクと一緒に興味深げに講義を聴いている。

《今の世にはこのような学問があるんですね。わたしにとって学問といえば，四書五経，

仏教の教学，あるいは『史記』や『漢書』のような歴史書だったのですが》
《秀策の時代には蘭学もあったでしょう》
《ああ，ありました。わたしはあまり深く触れる機会がありませんでしたが》
《おおざっぱに言えば，今の世の学問の多くは蘭学の系譜を引いてるんだよ》
《そうなんですか・・・・》

佐為は美しくて優雅なだけでなく，知性にも恵まれている。その知性を碁だけに使うのはもったいないとボクはつい思ってしまう。一度，それを口にしたことがある。佐為はとても気を悪くした。

《何をおっしゃいますか！　わたしには碁があればそれで十分なんです。わたしにとって碁は，ロミーにとっての医学のようなもの。ひょっとしたらそれ以上のものなんです。「碁だけに打ち込むのはもったいない」とは，何という言いぐさ！・・・・》
《分かった，分かった。佐為，そんなに怒らないで。もう二度とこんなことは言わないから》

ボクは必死で佐為の怒りをなだめた。「地雷を踏む」とは，こういうことなんだな。

こんなふうに佐為を怒らせたこともあったけど，研修が終わってからは自由な時間が増えたので，佐為にたくさんネット碁を打たせてあげられる。だから，基本的に佐為は機嫌がいい。そして5月，トーナメントの予選が始まった。

顕現

▪Ⅱ　顕現

土曜日と日曜日，地区予選の会場になっている千葉市内のビルに出かける。予選は土曜日と日曜日。午前と午後に2局ずつ打たれる。もちろん，1回戦，2回戦は参加者が多いから入れ替え制で，ボクが土日で8局打つわけではない。

1回戦。生まれて初めて碁石なるものを手にするボクは，親指，人差し指，中指の3本の指で石をつまんで碁盤にポトリポトリと置いていく。相手は，人差し指と中指に石を挟んでピシッと小気味よい音をたてて石を置く。相手の顔に侮りの表情が浮かんでいる。確かに，石の持ち方だけ見れば，楽勝と思われても仕方ない。〔でも，違うんです。ボクが打つんじゃないんです。藤原佐為が打つんですよ。かつて帝の碁指南を勤め，幕末の世に本因坊秀策であった人が打つんです〕そしてボクは，圧倒的な強さを見せて中押し勝ちした。相手は〔信じられない〕というような顔つきで終局した碁盤を見ている。対局場を引き上げるボクに佐為が語りかける。

《ロミー，石の持ち方を練習しましょう。ロミーが相手に侮られるのを見るのは，わたしにとっても不愉快です》

《その気持ちはうれしいけど，必要ないよ。ボクは今の打ち方で打ち続ける。その方がいい。いつか，佐為の存在を明かすつもりだから，ボクは碁の初心者である方がいいんだ》

佐為は驚いた表情を見せたが，それ以上のことを問いただしはしなかった。

地区大会を気持ちよく勝ち進む。すべて，圧倒的な強さを見せた中押し勝ち。準決勝の対局の前，地元の新聞の記者からインタビューを申し込まれたけど，断った。そして「全国大会で優勝したら，お話しします」とだけ答えた。相手はびっくりしたような顔でボクを見た。そんな記者を放っておいて歩きながら，ボクは佐為に語りかけた。

《Ｈｏｎｅｓｔｙ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｅｓｔ　ｐｏｌｉｃｙ．『正直は最善の策』がボクのモットー，人生の基本戦略なんだ。嘘をつくべきでないという倫理的な判断だけじゃなくて，その方が結果として楽だし，自分にとってプラスになるからだよ。目先のことを考えて嘘をつくと，その嘘を繕うために新たな嘘をつかないといけない，それをずっと繰り返していくなんて，とてもじゃないけど，やってられないよ。そんなことするより，初めからありのままを率直に語る方がいい。そう思って，そのように生きてきた。この２８年》

ここで佐為の方を見る。佐為は話の続きを促すような表情。

《それに，進藤ヒカルさんと佐為のことを考えた上での選択でもあるんだ。ヒカルさん

は佐為を隠そうとした。それは，幽霊という常識外れの現象に出会った子供のごく自然な反応だったとは思うけど，結局，そのために嘘に嘘を重ね，ヒカルさんも佐為も困った状態に陥ってしまった。そういう事例を知っているから，なおさら，それを避けるためにへたな嘘はつかない，佐為のことを無理に隠し立てはしない。Ｈｏｎｅｓｔｙ ｉｓ ｔｈｅ ｂｅｓｔ ｐｏｌｉｃｙ． を貫こうと思うんだ》

佐為は唇をかんでうつむいている。

《佐為の力なら，地区大会は楽勝だし，全国大会でもすいすい勝ち進んで間違いなく優勝する。そうなればインタビューを受けるよね。この種の大会で優勝する人はたいてい，それまでも碁の大会に参加してそれなりの実績を残しているだろう。それなのに，そんな実績のぜんぜんないボクが突然現れて優勝をさらったら，きっと注目を浴びる。そして，ボクの経歴，碁の学習歴，実戦歴を問われる。その時，ボクは隠し立てはしない。佐為の存在をきちんと話すつもりだよ。かつて平安時代に帝の碁指南を勤め，幕末の世に本因坊秀策として名をはせた藤原佐為の幽霊がボクに宿り，その人の代理人としてボクは碁を打っていると。そしてもちろん，藤原佐為がネット碁のＦＪＷＲｓａｉその人であることも》

佐為は真剣な表情でボクを見る。

《ロミー，本気ですか？》

《もちろん本気だよ》
《幽霊が宿っているなどという話，誰が信じてくれるでしょうか?》
《相手が信じるか信じないかはどうでもいい。ボクは嘘をつかずありのままを話す，それだけだよ》
《そうですが・・・・》
《心配?》
《はい》
《何が心配なの?》
《何が，と問われても・・・・いろんな噂がささやかれるでしょう。あることないこと書き立てられるでしょう・・・・》
《言いたい者には言いたいように言わせておけばいい。書きたい者には書きたいように書かせておけばいい》
　佐為はじっとボクを見つめる。
《もちろん，いろんな状況は想定したよ。でも，どう考えても「幽霊が自分に宿っている」と言ったくらいで，命を狙われることはない》
《まあ，それはそうでしょう》
《暴行を加えられることもないよ》

《それもまた，そうでしょう》

《精神病院に無理やり入院させられることもない。精神保健福祉法の措置入院つまり強制入院は「自傷他害の恐れがある」のが条件なんだ。幽霊の指示通りに碁を打っていると言うだけなら自傷の恐れも他害の恐れもないからね》

《まあ，その辺のことはロミーの専門でしょう・・・・》

《あり得るのは，佐為も言うように，いろんな誹謗中傷を浴びることだね。たとえば，「目立ちたがりで作り話をでっち上げている」とか，「オカルトに入れあげたおかしな人」とか，「経歴を偽らないといけない後ろめたい事情があるんだ」とか。でも，そんなことを言われようと書かれようと，ボクに実害はないんだよ。そんなこと，ボクの勉強や研究の邪魔にならないから。まあ，講義を聴講する教室でひそひそ話されるかもしれないけど，それで何か困るわけじゃない。だから，恐れることはないんだ》

　ここまで聞いて，佐為は微笑んだ。

《そうでした。ロミーは豪胆な人でしたね・・・・見かけによらず》

　そう言ってまた微笑んでから，佐為は真顔に戻った。

《わたしが帝の碁指南をしていたこと，本因坊秀策その人であったことを話すのはかまいませんが，ヒカルのことを話すのは・・・・》

《それは，ボクも考えた。進藤ヒカルさんの名前を出すべきじゃない。それは間違いな

いよ。ただ，碁のトーナメントの取材をするくらいの記者なら，かつてのネット碁のｓａｉを知っていると思う。当然，ｓａｉとＦＪＷＲｓａｉの関連を問いただされるだろう。ボクは，ｓａｉとＦＪＷＲｓａｉはどちらも藤原佐為であること，ただしｓａｉの時にはボクに宿っていたのではないこと，その時宿っていた人の名前は明かせない，なぜなら本人が存命中で勝手に明かすと迷惑をかけるかもしれないから，と話すつもりだよ》

佐為は考え込むようにうつむいた。

こんな会話を交わした翌週の地区大会準決勝に勝ち，その翌週，７月上旬の決勝戦も勝って，順当に優勝。９月からの全国大会への参加資格を得た。同じ頃，日本の棋界にビッグニュースが駆け抜けた。

―　史上最年少の本因坊誕生　―

進藤ヒカルさんが７局の激戦を制して本因坊位を奪取した。棋院のサイトだけでなく一般メディアでも取り上げられている。いずれも歴史に残る名局だけど，とりわけ３勝３敗の後を受けた７局目は，本因坊戦の歴史に残る名勝負だったとのこと。佐為も，棋院のサイトに掲載されている７枚の棋譜を目をこらして見ている。

「ヒカル，ついにやってくれましたね・・・・」

ほかに言葉が出てこない。佐為の目が潤んでいる。

ボクは，棋譜を見てもよく分からない。むしろ，アップで撮影された進藤ヒカルさんのカラーの顔写真が印象的。９月で２０歳になると言うけど，まだ少年の面影を残している顔立ち。特徴的な金色の前髪，青みがかった薄い色の瞳。佐為が本因坊戦の棋譜を一通り見終わった頃，ボクは語りかけた。

「進藤ヒカルさん，前髪は金色なんだね。ボクの髪の色に似ているね」

「そうです。目の色もロミーに似て薄くて青みがかっているんです」

「佐為は，ボクを見ながら，自分に似ているだけじゃなくて，進藤ヒカルさんにも似ていると思うことがあるの？」

佐為はこの問いには答えず，かすかに恥じらうように顔を伏せた。その表情，仕草はそこはかとなく美しく優雅。それがなぜかボクに姉のことを思い出させた。

「ボクがロミーと呼ばれるゆえんをまだ説明していなかったね。これから話すよ」

佐為はけげんな顔つきになった。〔どうして急に，ヒカルと関係ないことを話し出すんだろう〕と言いたげな表情。関係なくはない。ボクの中ではつながっている。

「ロミーは，姉がつけてくれた呼び名なんだ。本名のヒロミから，ロミー。姉はいつもボクのことを『外人のようにきれいだね』と言ってかわいがってくれた。近所の悪ガキたちは自分たちとは違う髪の色，目の色，肌の色をしたボクを『ガイジン』，『ロミー』とはやし立ててボクを馬鹿にしたけど，そんなことぜんぜん気にならなかった。ボクは姉

がいればそれだけで良かった・・・・」
「でも・・・・その優しいお姉様はお亡くなりになった・・・・」
「うん。ボクが１２歳の時。両親と一緒に事故で死んだ」
佐為は慈しみの眼差しでボクを見る。
「その姉の名前が『ヒカル』というんだ」
佐為の表情が驚きに変わる。ボクは笑顔を見せる。
「偶然だね。それとも・・・・何かの必然なのかな」
９月に始まったオープン碁トーナメント全国大会。会場は市ヶ谷にある日本棋院。佐為にとっては懐かしい場所らしい。
「棋院なら，進藤ヒカルさんに会うかもしれないね。その時はどうしよう?」
佐為はちょっと考え込んだ。
「もし，今のヒカルにわたしが見えるなら，ヒカルは周囲の状況も何もかも忘れて，わたしに駆け寄って話しかけるでしょう。そうなれば，もう成り行きに任せるしかありません。わたしたちが今からあれこれ考えても無駄です。でも，ヒカルにわたしが見えないのなら・・・・その時は・・・・素知らぬふりで通り過ぎましょう」
でも，そのように振る舞うことはできなかった。
１回戦の日。ボクは慣れない場所だから早めに棋院に着いて，会場となっている一般

対局室への行き方を受付で説明してもらい，廊下を歩いていた。すると，向こうから見間違えようのない金色の前髪が歩いてきた。お互いに近づく。もし進藤ヒカルさんに佐為が見えるなら，何かの反応があるはず。でも，何の反応もない。

《佐為，どうやら進藤ヒカルさんは佐為が見えないらしいよ》

《そのようですね》

佐為はちょっと寂しそうに答えた。そしてボクたちはそのまま素知らぬふりですれ違おうとした，その時，彼がじっとボクを見つめた。視線はボクの隣の佐為ではなく，しっかりボクに向けられている。その顔に心から驚いたような表情が浮かんだ。

〔そうか。ボクは佐為に似ている。ボクの中に佐為の面影を見つけて驚いているんだ，進藤ヒカルさんは・・・・〕そのように見つめられて，素っ気なくすれ違うわけにもいかず，ボクも相手に顔を向けた。どれくらいそうやって見つめあっていただろう。時間としては長くない。ほんの2～3秒くらい。ボクの脇で佐為が目を潤ませている。驚いて声も出せないような相手に，ボクから声をかけた。

「進藤ヒカルさんですね。本因坊になられて，おめでとうございます」

「・・・・オレのこと知ってるのか？」

彼はやっと口を開いた。

「多少なりとも碁に係わる者なら，あなたのことは誰でも知ってますよ」

「あっ，そうか」
　ちょっと間を置いて，ボクはもう一言踏み込んだ。
「ひょっとして，ボクが進藤ヒカルさんを驚かせましたか？」
「いや，そんなことはない」
　と言いながら，彼はその場に立ち尽くしている。
「それでは，ボクはこれからトーナメントの1回戦なので」
　と言って，ボクは軽く会釈して，その場を去る。あわてず，ゆっくり歩く。佐為は後ろを振り返っている。
《ヒカルがじっとロミーを見ています》
《でも，立ち止まらずに歩こう。進藤ヒカルさんは，今この場でボクと話したくはないんだ》
《そうですね》
　と答える佐為の声が悲しげだ。
　1回戦，2回戦を難なく勝ち進み，準々決勝入りを決めた頃からメディアがボクを注目し始めたけど，インタビューの申込みにはすべて「優勝したら話します」とだけ答えた。ボクの周りから情報を集めている記者，ライターもいたようだけど，トーナメントが終わるまで記事が出ることはなかった。

準々決勝，準決勝，決勝を予定どおり勝って，優勝。対局が終わってから，記者会見。
「優勝，おめでとうございます」
と司会者が決まり文句を述べる。
「ありがとうございます」
とお決まりの返事をしてから，ボクはすぐに本題に入った。
「ここにおいでの方々はみな，ボクのいかにも初心者じみた石の持ち方にあきれておられると思います。ボクのことを多少なりとお調べになった方々はボクがこれまで碁を打った形跡がないことも突き止めておられると思います。そのとおり，ボクは碁を打ったことがありません」
記者会見場は水を打ったように静まりかえっている。ボクは話し続ける。
「地区大会の1回戦から今日の全国大会の決勝戦まで，ボクは碁を打ってません。ただ，言われるままに石を碁盤に置いただけです。ボクに石を置く位置を指示したのは，藤原佐為という人，いや人ではなく幽霊です。ボクだけに見え，ボクだけがその声を聞き取れる幽霊です」
ここで記者会見場がどよめいた。ボクは構わず話し続ける。
「藤原佐為とは，平安時代に帝の囲碁指南をしていた貴族です。ゆえあって入水自殺をしたのですが，神の一手を極めたいという宿願をいだいて霊となり，碁盤に取り憑いて

いました。江戸時代，桑原虎次郎という少年がその霊の声を聞き，佐為の碁の力を認め，佐為に成り代わって碁を打つようになりました。後の本因坊秀策その人です。しかし秀策は３４歳の若さで亡くなり，佐為は『神の一手を極める』という望みを果たせないまま，また碁盤に取り憑いて時を待つことになりました。そして，７年ほど前に一人の少年が佐為の声を聞き，その願いを叶えるために協力してくれることになりましたが，ゆえあってその少年とは2年で別れざるを得ませんでした。そして，昨年の１２月，３人目としてわたしに宿ったのです。ちなみに，ネット碁で不敗を誇るＦＪＷＲｓａｉはまさにこの藤原佐為です。見る人が見れば，このトーナメントでボクが佐為の言う通りに石を置いた棋譜は，ネット碁のＦＪＷＲｓａｉの棋譜と同一人物の手になることがお分かりいただけるでしょう」

　ボクはここまで一気に話し終えた。記者席は騒然としている。「幽霊，何をバカなことを言ってる」とか「気が狂ってるのか」とか「受け狙いか」といった言葉が飛び交っている一方で，真剣に考え込んでいる記者もいる。壇上の司会者もどうすればいいのか戸惑っている。ようやく1人の記者が立ち上がって

「とても信じがたい話ですが」

　と問いかけた。

「そう思われるのは，理解できます。ボクも，実際に幽霊が自分に宿るという体験をしな

ければ，こんな話は信じられないでしょう。ただ，ボクとしてはこの場で嘘はつけません。どれほど信じがたいことであっても，事実を語るほかはありません」

ボクは想定どおりの回答をする。やがて記者席のざわめきは徐々に鎮まり，奇妙な沈黙がただよっている。その沈黙を破ってさっきとは別の記者が立ち上がった。

「その藤原佐為という幽霊の存在を証明することはできますか?」

「幽霊の存在は証明しようがありません」

記者席からかすかに笑いが漏れる。

「敢えて証明と言われるなら，ボクがこのトーナメントで優勝したことが佐為の存在証明です。碁は，未経験者が偶然とまぐれで勝てるゲームでないことは，皆さんもご存知でしょう。これまで碁を打ったことのないボクがトーナメントで優勝するには，誰かの力を借りないといけません。だけど，皆さんもご覧の通り，ボクのそばに誰もいません。遠くにいる誰かと通信する手段もありません。であるなら，皆さんには見えない存在の力を借りているという推測も一考の余地があるのではないでしょうか」

《ロミーは弁が立ちますねえ》

佐為が感心して話しかける。ボクは笑みを漏らした。そうしているうちに別の質問が出された。

「藤原ヒロミさんはお医者様とのことですが，医者として幽霊の存在を説明できますか

？」
「できません。現代の医学，というか科学で幽霊は説明不可能です」
「科学的に説明できないものの存在を主張なさるのですか？」
「現代の科学で説明できない現象はたくさんあります。あって当然です。科学は完璧ではあり得ないから。むしろ，もし科学ですべての現象が説明できてしまったら，その時点で科学は発展を止めるでしょう。今の理論で説明できないものを説明しようという努力の中から，新たな理論が生まれ，科学が発展するのです。相対論も量子力学もそのようにして生まれました。ですから，現時点の科学で説明できないということは，その存在を否定する理由にはなりません」
「説明は一応納得できるのですが，それにしても幽霊がほんとうに存在するとか，藤原ヒロミさんが幽霊の力を借りてトーナメントに優勝したとか，そう簡単に信じられません」
「それは，先ほどもお答えしたとおり，信じられないというのが自然な反応だろうとボクも思います。ただ，ボクとしては，嘘はつけないから事実をお答えしているだけです」
　記者たちは腕組みをして考え込んでいる。攻めあぐねているのかな？　すると，また佐為が話しかけてきた。
《ロミーは弁が立つだけでなく，これだけ大勢の記者を前にしてステージに立たされて，

ぜんぜん動じませんね》
《実は，ステージで注目を浴びるのには慣れているんだよ》
佐為はびっくりしたようにボクを見る。
《ロミーは，ほんとうに不思議な人ですね》
ボクは冗談めかした口調でやり返した。
《あなたにそれを言われたくない》
佐為はちょっと考えてボクの言葉の意味を理解し，笑い出した。声を出して笑った。ふだんは笑う時も上品に扇で口元を隠してそっと笑うのに，この時は声を出して笑った。もちろんその声はボクにしか聞こえないけど。
《確かに，幽霊から「不思議な人」なんて，言われたくありませんね》
こんな，記者たちに聞こえない会話が終わった頃，新たな質問が寄せられた。
「これまでの方々とはぜんぜん違う角度から質問いたします。とりあえず藤原佐為という幽霊がいて，藤原ヒロミさんだけはそれが見えるということにしましょう。どんな姿形をした幽霊でしょうか？　背丈，顔立ち，服装など教えてください。この質問には答えていただけるでしょう。何か答えていただかないと記事が書けないものですから」
記者席から笑いが漏れた。ボクも笑った。佐為も笑っている。
「背丈はボクより１０センチかもうちょっとくらい高いです。まあ，ボクが小柄で華奢

なのですが」

　ここで話を区切ると，思ったとおり記者席から笑いが起こった。

「顔立ちは，ボクに似ています。双子のようにとまでは言いませんが，兄弟と言えるくらいには似ています。年齢も同じくらいです。ただし，髪はボクと違って漆黒で，くせのないストレートの黒髪が肩甲骨のあたりまで伸びています。目の色も黒です。肌は透き通るように白いです。平安時代の人らしく，狩衣を着て烏帽子をかぶっています。こんな描写でよろしいですか？」

「はい。ありがとうございました」

　ここで質問は一段落したと思ったら，本命というべき質問が出された。

「藤原佐為はネット碁のＦＪＷＲｓａｉとのことですが，碁に多少なりと係わる者であればよく知っているとおり，ＦＪＷＲｓａｉは６～７年前にネット碁で不敗を誇り，塔矢行洋と歴史的な名勝負を演じたｓａｉの再来と噂されています。つまり，かつてのｓａｉも藤原佐為のしわざだったのですね？」

「はい。そうです」

「その時も，藤原ヒロミさんが佐為に成り代わってネット碁を打っていた？」

「いえ，違います。その時，佐為は別の人に宿っていました。その人の名をこの場で明かすわけにはいきません。存命なのでご本人に迷惑がかかるかもしれないので」

こう説明すると，さすがにそれ以上追及はしなかったが，別の方向から攻めてきた。
「かつてｓａｉであり，今はＦＪＷＲｓａｉである藤原佐為がぜひとも対局したい相手はいますか？」
ボクは佐為を見る。佐為は
《ヒカルと行洋殿です。でも・・・・》
《名前は出さない方がいいね》
「２人いるそうです。ただ，先ほどと同じ理由で名前は明かせません」
「そのうちの１人は塔矢行洋元名人ですね？」
「繰り返しますが，名前は明かせません」
その記者はボクを睨みつけるようにして着席した。それと入れ替わるように，碁の取材会場には珍しい女性記者が質問に立つ。
「先ほどから藤原佐為の存在が問題とされていますが，いると想定しましょう。ただ，そうなると，実際にトーナメントで優勝したのは藤原ヒロミさんではなくて藤原佐為であります。優勝賞金は藤原ヒロミさんではなく藤原佐為に支払われるべきではないでしょうか？　藤原佐為に支払われるべき賞金を藤原ヒロミさんが受け取るのは，厳しい言い方をすれば違法行為，不正取得に当たらないでしょうか？」
「その可能性はボクも考えています。もし，トーナメントの運営に当たる日本棋院がそ

のように認定するのでしたら，その判断に従います。ただ，そう判断なさるからには日本棋院は藤原佐為の存在を認めているということになります。存在しない者を優勝者と認定することはできないはずですから。であれば，その点を公式に表明してほしい。藤原佐為は確かに存在すると明快に表明するよう求めます。藤原佐為の存在が認められるのはボクの願いでもあります，ぜひそうしてほしいです。それと，優勝賞金をきちんと藤原佐為に届けることを求めます。優勝者と認定された者に優勝賞金を届けるのは運営者の当然の義務のはずですから」

記者席から笑いがこぼれた。どこかから「お見事！」という声がかかった。佐為も笑っている。今度は，いつものように扇で口元を隠して上品に笑っている。

それからもいくつか質問は出されたけれど，さほど際どいものではない。やがて，予定時間をかなりオーバーして優勝者記者会見は終わった。

記者会見場を出て，棋院の廊下を歩き，外に出て，通りを駅に向かって歩く。この間，ボクは佐為に話しかけた。

《今日の記者会見で答えながら思い浮かんだことがあるんだ。佐為が虎次郎に宿ったのは秀策の名を碁の歴史に刻むためだった。進藤ヒカルさんに宿ったのは，進藤ヒカルという才能豊かな棋士を世界に送り出すためだった。そして3回目，ボクに宿ったのは，ほかの誰でもない藤原佐為の名前を碁の歴史にしっかり刻み込むためなんだよ。きっ

と》

《ロミー・・・・》

　佐為はそれだけ言って，ボクを見つめている。その目が心なしか潤んでいるかも・・・・・。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

（ここから第三者視点）

ヒカルは，佐為に似た人が廊下の角を曲がり，姿が見えなくなってからもしばらく立ち尽くしていた。〔佐為なのか？　佐為が生身の人間になって生まれ変わったのか？　それとも偶然似ているだけなのか？　トーナメントというのは今日からここで行なわれるオープン碁トーナメントのことだろう。それに出るということは，碁が打てる，地区予選を勝ち抜く程度の腕はあるということか？・・・・・〕

　オープン碁トーナメントは準々決勝から対局がネット配信される。北斗杯のスポンサーである北斗通信社が手がけている。北斗杯を主催して，囲碁の意外な宣伝効果を認識し，北斗通信社は今やインターネットによる囲碁ビジネスのトップランナーになっている。これまでプロアマ混合戦など見向きもしなかったヒカルだが，この年は熱心に観戦した。

あの人はすぐに見つかった。藤原ヒロミという名前。藤原？　佐為と同じ名字。やっぱり関係あるのか？　その対局を見ている間に，ヒカルの混乱は深まった。碁石を３本の指でつまむ手つきはまるで素人だが，石の流れは佐為そのものだ。だけど，姿形は佐為とは違う。あの時は似ているのにびっくりしたけど，よく見ると，髪と目は色が薄い。背丈も佐為より低いし，全体として華奢だ。佐為は顔こそ女のようだけど，体つきはそれなりにしっかりしている。このヒロミという人は体つきも女のようだ。後ろから見たらぜったい女と思われる。前から見ても女と思われそうだ。しかしその華奢な体，優しい顔をして，対局相手を次々に一刀両断に切り捨て，あっさり優勝した。

優勝者インタビューなど，見るだけ時間の無駄と思ったが，ヒカルはヒロミから目が離せなくて，そのまま見続けた。そしてさらに衝撃を受けた。インタビューで堂々と佐為の存在を明かしている。どんな質問にもひるむことなく対応している。その姿は凛々しいほど。〔そうだよ。オレも堂々と佐為の存在を宣言すればよかったんだ。こそこそ嘘ついて隠したりしないで。そうすれば，佐為は思う存分打てたんだ。人の目なんか気にして，幽霊なんて話をしたら馬鹿にされると思って，隠したりしないで・・・・〕

ヒカルの中で，アキラの部屋でＦＪＷＲｓａｉの碁を見てから張り詰めていたものが，切れた。その１週間後の十段戦でヒカルは惨敗した。相手が倉田だから負けること自体は想定内のこと。しかしその負け方が無残だった。倉田からは「どうしたんだ？」

と心配そうに問いかけられ，対局を見たアキラからは「ふざけてるのか！」と怒鳴られた。心配されても，怒鳴られても，ヒカルは黙ってうつむいているだけだった。

藤原佐為という名の幽霊の話は世間のメディアを賑わすだけでなく，棋院でも話題になっている。「ばかばかしい」，「どうせ目立ちたがり屋なだけさ」と反応する棋士もいるが，まじめに考える棋士もいる。さらには，ぜひ藤原佐為と対局したいと願う棋士もいる。ネット碁でＦＪＷＲｓａｉと対局すればよさそうなものだが，碁盤を挟んでじかに対局したいと語る。

藤原佐為は海外でも話題になっている。「ｓａｉがついに正体を現わした」とあちこちで，とりわけ中国と韓国で話題になっている。韓国では高永夏（ホ・ヨンハ）が佐為との対局に名乗りを上げ，韓国棋院も積極的に乗り出しているらしい。中国では，何と言っても塔矢行洋が所属する中国リーグの北京チームが騒がしい。優勝者インタビューで佐為が対局を望んでいると語られた２人のうちの１人は間違いなく塔矢行洋だと断定し，対局の舞台作りに動いている。

日本棋院はむしろ出遅れ気味だったが，北斗通信社が，恒例の北斗杯とは別に，「北斗通信スペシャル」として，日本のタイトルホルダーと佐為との対局という企画を持ちかけたことから，一気に話が進んだ。北斗通信社はお手のものネット配信だけでなく民放テレビ局と組んでテレビ放送も行なうとのこと。その企画が伝えられるとすぐに２

人のタイトルホルダーが名乗りを上げた。塔矢アキラ名人と緒方精次棋聖。もちろん，藤原佐為つまり藤原ヒロミにもすぐに話は伝えられ，受諾された。ただし，藤原ヒロミから1つの条件が提示された。最初，提示された条件に戸惑った主催者は，ちょっと考えて，「それはグッドアイデア」というように納得して了解した。こうして，塔矢行洋よりも高永夏よりも先に，その年のうちに，まず塔矢アキラ，その翌週に緒方精次が佐為と対局することになった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

（ここからロミー視点）

トーナメントの優勝者インタビューで佐為の幽霊の話をしてから，予想どおりいろんな話がボクに舞い込んだ。テレビの芸能番組への出演依頼はすべて断った。オカルト科学，心霊科学の研究団体からも誘いが山のように押し寄せた。それらの組織への対応は前もって決めておいた。

「貴所が発行，出版した書籍，論文のうち最良と認めるものを1冊ないし1本，送ってください」

中には厚かましく2冊，3冊ときには5冊，6冊も送りつける組織もあるけど，そういう時は適当に1冊だけ選んだ。ほとんどは読む価値もないものだけど，一応は斜め読

みでも目を通した。予想どおり，ボクの目から見て「まとも」と思えるものは1冊もなかった。予想どおりだけど，ちょっと寂しい。

ボクが待ち受けるのは碁の対局の申込み。それも，「神の一手を目指す」という佐為の宿願に役立ちそうな強者との対局の申込み。それもやって来た。まず，中国リーグの北京チームから塔矢行洋との対局。そして韓国棋院から高永夏というトッププロとの対局。ただ，どちらもスケジュール調整に手間取るようで，実現は来年になる。そうしているうちに，日本のタイトルホルダーとの対局がスピーディーに実現することになった。相手は塔矢アキラと緒方精次という2人。それぞれ名人，棋聖のタイトルを持っている。

「塔矢アキラはヒカルさんの生涯のライバルだよね。緒方精次って，どんな人？」

《ああ，緒方さんですね。いろいろヒカルにからんできた人ですよ。主にわたしが原因ですけど》

「佐為が原因でヒカルさんにからんだの？」

《つまり，なんとしてもわたしと，つまりｓａｉと対局したいと願って，ｓａｉとヒカルのつながりを推定してヒカルにかまってきたんです。1回だけ対局したことがあります。ただし，彼はかなりひどく酔っていたから，相手がわたしだと気づかなかったでしょう。てっきり，ヒカルと打っていると思っていたはずですよ》

「ふーん，そんな因縁があるから，佐為と打てると聞いて，真っ先に手を上げたんだ。まあ，実際に対局するのは塔矢アキラの方が先だけど」

主催者とはメールで話を詰めたけど，最終的に担当者と会うことになった。相川という，ボクと同年配かちょっと年上くらいの女性。第1回北斗杯の担当になって，それ以来ずっとこの会社の囲碁関係のイベントや企画を担当しているらしい。自ら碁を打つようにもなった。面談のほとんどは，メールでやりとりした内容の確認で済んでいたけど，1つだけその場でボクが思いついた条件を提示した。その瞬間，彼女は驚いたようだけど，「それはおもしろい」と手を打った。それから出演契約に署名捺印して実務は終わり。その後ちょっとの間，くつろいだ雰囲気で雑談していて，相川さんが「それにしても棋士って美形が多いですね」と口にして，あわてて「あっ，でも，それで碁を始めたわけじゃないんです」と言い訳をし，それから「でも，それも理由の一部であることは否定できないな」と言い添えて，笑った。

12月，佐為と出会って1年が過ぎる頃，ボクは「北斗通信スペシャル」の1回目の対局のため，都内のホテルの小パーティールームにいる。碁盤を挟んで椅子が2つ置かれているけど，もう1つ，2つの椅子の間，四角い碁盤の第3の辺に沿って置かれた椅子にボクは座って，塔矢アキラ名人を待っている。対局の配信，放送のためのスタッフや，時計係，解説などの担当者も揃っている。やがて，開始の15分ほど前に塔矢アキ

ラが部屋に入ってきた。２つ空いている椅子のどちらに座るべきか戸惑っているようなので，ボクは，
「どうぞ，こちらの椅子に掛けてください」
　と声を掛けた。
「佐為はもう，向かいの椅子に座って塔矢さんを待っています。対局者どうしが向き合うのが筋だと思うので，このようにしていただきました。戸惑われるかもしれませんが，向かいの椅子に座っている佐為の気配なり気迫なりを感じていただけると，ありがたいです」
　ボクの言葉に促されて，塔矢アキラは佐為に向き合う椅子に座り，正面をじっと見据えている。その視線を受け止めて佐為は微笑みながら話しかけた。
《お久しぶりですね。またこうして碁盤を挟んで対局できて，とてもうれしいですよ。・・・・ロミー，この言葉はぜひアキラに伝えてください》
　ボクはうなずいた。
「塔矢さん。向かいに座っている佐為が微笑みながら『お久しぶりですね。またこうして碁盤を挟んで対局できて，とてもうれしいですよ』と言ってます」
　この言葉に，塔矢アキラは驚きの表情を浮かべながら考え込んだ。そして，
「つまり，佐為は以前ボクと対局したことがあるのですね。ひょっとしてそれは・・・・」

ボクは塔矢アキラに目くばせした。それ以上話されると，その時の相手の名前を彼が口にしそうだったから。彼はボクの意図を理解してくれた。それ以上のことは話さず，ゆっくり深呼吸して，向かいに座っているはずの佐為をもう一度見つめ，それから視線を碁盤に落とした。静かに時間が過ぎ，定刻になった。名人のタイトルホルダーに敬意を表して，佐為が先番を取る。ボクは，佐為の扇が示す位置に1手目の黒石を置いた。

対局が進んでいく。序盤の攻防を終え，中盤にさしかかる。ボクは碁のことは分からない。だからといって退屈ではない。ボクは時おり佐為の顔を見る。対局に集中すると佐為は表情が冴えわたる。ふだんから美しいその顔がさらに美しくなる。そして時おり見せる微笑み。うまい手を思いついたのか，それとも相手の手を読み切ったのか，そんな時に見せる透徹した凍えるような微笑み『氷の微笑み』。思わず見とれそうになる。だからボクは，佐為の指示どおりに石を置くだけでも退屈はしない。

やがて，戦いは終盤を迎えた。塔矢アキラが向かいの空座に話しかける。

「ボクの負けは読めているのだけど，勉強のために最後まで打ち切ってください」

佐為は微笑んでうなずいた。

「はい，佐為は了解しました。微笑んでうなずいてます」

とボクは伝える。そのまま両者ともあまり時間を掛けずに打ち合うけど，10手ほど進んだところで，佐為がアキラの石に応じてすぐに扇で自分の打つ位置を示しかけて，

さっと扇を引っ込め，ゆっくり考え始めた。しばらくして，塔矢アキラが尋ねる。
「佐為の手が止まったようだけど」
「はい，佐為は今考えています」
「考えている？」
塔矢アキラは怪訝な顔をして，盤面を見つめる。そして，意外なことを発見したかのように「ハッ」というような表情になった。ボクは事情が分からない。
《佐為，もし考えの邪魔にならないなら，状況を説明して。今，どうなっているの？》
佐為はボクの方を向いて不敵な笑みを見せる。
《アキラは負けが分かった上でほぼ必然のような流れで自分の石を置いていました。そうやって打った今の石，アキラとしては仕方なしにと言うかほかに選択の余地がないから打った石なのです。わたしも最初はそう思って，それに応じようとしました。だけど，よく考えると，たった今アキラが打った石は，この後の打ち回し方によっては形勢を挽回できるかもしれないような効果を秘めているのです。わたしはそれに気づいて，そうさせない打ち回しを考えています。そして，わたしがこのように長考していることが，アキラに気づかせたのです。自分が打った石が秘めていた効果，それまでアキラ自身は気づいていなかった効果。わたしが長考することで，アキラに気づかせてしまいました。でも，ここまでです。その効果を発揮させない石を打ち込みますから》

そう言って佐為は碁盤の1点を扇で指し，ボクはそこに石を置いた。その瞬間，塔矢アキラの顔に落胆が広がった。たった1手のやりとりに，こんなドラマが展開する。初めて目にする光景だった。ネット碁でもトーナメントの対局でも経験しなかった。塔矢アキラほどの強者を相手に，対面して打ち合うからこそ生まれるドラマなのかな・・・こんなことをボクが考えているうちに，終局した。

「黒73目，白62目，コミを入れて黒の4目半の勝ちです」

とアナウンスされる。それを聞いて佐為が驚いた。

《5目半の勝ちだと思いますが・・・・》

《でも，佐為の勝ちは勝ちなんでしょう?》

《まあ，そうですが》

ボクと佐為がこんな会話を交わしている間，塔矢アキラは終局した盤面をじっと見つめている。そして，

「検討をお願いしてもいいですか?」

と尋ねた。佐為はうなずく。

「はい。いいですよ」

解説者も交えて検討が始まった。序盤から中盤，そして終盤にかけて，勝負どころと思われる打ち手について，「ここで，こう打っていれば・・・・」という話が盛り上がる。

そして，最後にあの一手。

「自分が打った石の意味を相手に教えてもらうなんて，めったにない経験です」

《あなただから，ですよ。あなただから，ヒカルの生涯のライバル，塔矢アキラだから，自分でも意識しないであの場で最善の一手を打てたんです》

ボクは，「ヒカルの生涯のライバル」という部分を省略して，佐為の言葉を塔矢アキラに伝える。彼は向かいの空座に頭を下げた。

「藤原佐為，あなたとこうやって打ちあえて，ほんとうに良かった」

しばし沈黙が流れた。

「佐為の気配くらいは感じていただけましたか？」

「はい・・・・気迫さえ感じましたよ」

こう言って，塔矢アキラは佐為とボクに会釈して席から立ち上がった。ボクも席を立った。今日の対局はこれで終了。

小パーティールームを出て，ほかの人たちから離れたところで，塔矢アキラはボクに小声で話しかけた。

「実は，ちょっとお話ししたいことというか，お尋ねしたいことがあるのですが，ちょっと時間をとっていただけますか？」

この展開は予想していた。ボクはうなずいた。

「では，このホテルのラウンジに，パーティションで仕切られた個室のようなコーナーがあるので，そこで」

そう言って，彼はボクたちをラウンジに案内した。廊下を歩きながら佐為がボクに語りかける。

《アキラは，ヒカルのことを尋ねるつもりです。ロミーの前にわたしが宿っていたのはヒカルだったのかと》

《「はい」と答えて，いいよね？》

《もちろん，かまいません。アキラは，ほかの人たちに言いふらすようなことはしないはずです》

ラウンジの個室。ウェイターが注文を取り終えて立ち去ると，塔矢アキラはすぐにボクに話しかけた。

「余計なことは言わず，単刀直入にお尋ねします。藤原さんは，トーナメントの優勝者インタビューで，自分の前に佐為が別の人に宿っていた。その人は今も存命だと話しておられますね。その人とは，ひょっとして，進藤でしょうか？」

ボクはゆっくりうなずいた。

「やっぱりそうでしたか」

こう言って，塔矢アキラはしばし自分の考えに浸っている。

「碁会所で初めて進藤と打った時，佐為が石を置く場所を指示していたんですね？」
　ボクはうなずく。
「２回目の時も，そうですね？」
　ボクはまたうなずく。
「ああ，謎が解けていく。ボクは間違っていなかったんだ。『進藤は二人いる』と感じたボクは，間違っていなかった」
　彼は斜め上を向くように顔を上げ，静かにつぶやいた。
「その年の夏，ｓａｉの名のもとにパソコンを操作したのも，父とのネット碁対局でパソコンを操作したのも，進藤なんだ」
　ボクはもう，うなずくことをしない。うなずく必要はないから。塔矢アキラは眼差しをボクの方に戻した。
「もう１つ教えてください。佐為はいつ進藤から離れたんですか？」
「進藤ヒカルさんがプロになった年の５月５日です」
「あの年の５月５日・・・・」
　彼は，その頃のことを思い起こすように考え込んでいる。
「・・・・そういうことだったのか。最後の謎が解けました。進藤にまつわる最後の謎が解けました」

彼は晴れやかな顔でボクにこう語った後，顔を伏せてつぶやいた。
「それにしても，進藤にとって佐為はそれほど重要な，大切な，かけがえのない人だったのか。佐為と別れたためにしばらく碁が打てなくなるほどに・・・・」
それを聞いて，佐為が驚いた。
《本当ですか？　わたしが消えてから，ヒカルが碁を打たなくなった・・・・》
「塔矢さん，進藤ヒカルさんが碁を打たなかったというのは・・・・」
「はい。あの年の5月から8月頃まで進藤はいっさいの手合に出てこなかった。みんな心配してました。ボクも会いに行ったけど，何も話してくれなかった」
《そうだったのですか・・・・》
佐為は茫然としている。ボクは，そんな佐為にかまう前に，塔矢アキラに話しておかないといけないことがある。
「塔矢さん，このことは他言無用です。分かっていると思いますが」
「もちろん，ぜったいほかの人には話しません。藤原さんの進藤への配慮はよく分かっています。そして，進藤への配慮なら，ボクも藤原さんに負けませんから」
塔矢アキラは勝ち気な表情でボクを見る。そんな彼にボクはさらに語りかける。
「それともう一つ，ぜったいお願いしたいことがあります」
ボクは塔矢アキラをしっかり見つめる。

「ぜったいに，進藤ヒカルさんを責めないでください。彼が佐為のことを隠していたこと，そのためにいろんな嘘を重ねたこと，それを決して責めないでください。彼の立場ではやむを得ないことなんです。佐為が彼に宿ったのは１２歳の時のことです。１２歳の子供が，先々のことを見通して，『ここでは正直に佐為の存在を明かす方がいい』と判断できなくても，それは仕方のないことです。幽霊が自分に宿るという，思ってもいない事態に遭遇して，思わずそれを隠そうとするのは，ごく自然な反応です。そして，いったん隠してしまったら，後になって存在を明かすのはとても難しいことです。そのために重ねた嘘を今になって責めないでください。この点，約束してくれますか？」

「はい」

「ぜったいに約束ですよ」

「はい」

塔矢アキラはしっかりうなずいた。それを見て，ボクはそれまでの緊張が解けた。

「緊張なさってましたか？」

「それは，まあ・・・・」

ボクの返事に彼は微笑んだ。

「それにしても，藤原さんはとても優しい人ですね」

「優しい？」

　ボクは意外な思いだった。そんなボクの反応を見て
「優しいと言われて，ご不満ですか?」
「いや，不満なわけはないのですが・・・自分では優しい人間だと思っていないので。ボクの場合，優しいと言うより，相手の状況，今の話であれば進藤ヒカルさんの状況を理性で分析，推測して，『そういう状況にある人にはこのように対応するのがいいだろう』と判断して，判断の通りに行動しているだけだと思うのですが」
「おもしろいことをおっしゃいますね。でも，それがまさに『優しい』ということでしょう」
「そうですか・・・・」

ヒカル

■Ⅲ　ヒカル

（ここから第三者視点）

佐為との対局の2日後，アキラは，その日用事で棋院に来ていたヒカルをつかまえて話しかけた。

「ボクと佐為の対局，見てくれたかい？」

ヒカルは黙ってうなずく。

「一緒に検討したいんだ。ほかにも，いろいろ話したいこともある。このところ，すれ違いが多いからね」

実際は，すれ違っているのではなく，倉田に無残な敗北を喫した後，ヒカルがアキラを避けている。アキラもそれに気づいているが，敢えて責めないような言葉遣いをした。

「これから用事がないのなら，久しぶりにうちに来ないか？」

「オマエんちか？」

ヒカルはためらっている。塔矢邸でアキラと二人になればどんな話が出されるか，想

像できる。そんなヒカルの気持ちを察して，アキラはヒカルに顔を寄せ小声でつぶやいた。

「決して，キミを責めるようなことは話さないから」

それを聞いて，ヒカルはちょっとびっくりした。そして，なんだかおかしくなった。

「オマエがオレを責めないなんて，そんなことこれまで一度でもあったかよ」

アキラはムッとしかけたが，ここは抑えた。

「たまには，そんなこともある」

いつもらしくないアキラにヒカルはまたおかしさがこみ上げた。それが，ヒカルの心に少しばかり余裕を与えた。アキラと二人になればどんな話題になるかは容易に想像できるけど，それもいいかと思う。いつか話そうと思っていた，それを話すよい機会かもしれない。

「まあいいか。名人様のたってのお願いとあっては」

塔矢邸。いつもヒカルとアキラが碁を打つ座敷。アキラが佐為との対局の石を並べていく。まぎれもない佐為の手筋を見て，ヒカルはどうしても目頭が熱くなる。「とうとう佐為が，自分の名を名乗ってアキラと対局したんだ」検討は終盤のアキラの一手に至った。

「自慢じゃないけど，オレ，テレビで見ていて，オマエが気づく前に分かったぜ。オマエ

の手に秘められていた意味。オマエの手を見て佐為が考えたこと」
「そうか」
「佐為の考えることは，オレにはよく分かる」
　思わず口をついて出てきた言葉。言ってしまって，ヒカルはうつむいた。そして，アキラの顔を見ないまま，話しかけた。
「対局の後，いろいろ話したんだろう？」
「ああ，いろいろ話してくれた」
「オレのことも」
「うん」
　ヒカルは顔をあげてアキラを見つめる。その表情に安堵がにじんでいる。でも，悔いと落胆とわずかばかり怒りも混じっている。
「先に話されてしまったな。いつかオマエには話すつもりでいたけど，オレが話す前に話されてしまったな」
「ボクが無理に聞き出したんだ。藤原さんは，なるべくキミの名前を出したくなかったんだ。優勝者インタビューで記者にそう対応していただろう」
「だけど，オマエは無理に聞き出した」
　アキラはむっとした気持ちになったが，我慢した。〔今日は，どんなことがあっても，

ボクは進藤に対して怒らない」
「どうしても知りたかったから。それで，キミのことを話してもらう代わりに，ボクは2つの約束をさせられた。1つは他言無用ということ。もう1つは，キミをぜったい責めないということ」
「責めない？」
「そう。キミが，佐為が宿っていた頃のキミが佐為の存在を隠そうとしたことも，そのために嘘を重ねたことも，その頃のキミにとっては仕方ないことだったんだから，それを決して責めないようにと」
「そんなこと，言われたのか？」
「そうだよ。くれぐれも念を押された。どんなことをしてでも，キミを傷つけるのを避けたいようだった」
　ヒカルはフッと息を吐いた。
「優しい人だね。そこまでオレのことを考えてくれてるんだ」
「そうだよ」
　ヒカルはちょっと皮肉っぽい表情をした。
「どうりで，オマエが優しいわけだ。ふだんなら，オレの顔を見るなり『ふざけんな！』と怒鳴りそうじゃないか」

アキラは苦笑いした。
「進藤，どうやらいつもの進藤が戻ってきたみたいだな。そんな憎まれ口をたたくとは」
二人は顔を見合わせて笑った。ヒカルの笑みには，まだ寂しさが残っているが。そんなヒカルに，アキラはまじめな顔に戻って語りかける。
「進藤，なるべく早く藤原さんに会いに行くといい。藤原ヒロミさんだけじゃなく，藤原佐為にも。今のキミには，それが必要だよ。二人とも，ぜったいキミを歓迎してくれる」
「『二人とも』・・・藤原ヒロミさんはオレを歓迎してくれるかな?」
「あたりまえじゃないか。そうでないことなんか，あり得ないだろう。でなきゃ，なぜこれほど細やかな心遣いをするんだ。あの人が，キミに」
「・・・・塔矢・・・・ありがとう」
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／

(ここからロミー視点)
塔矢アキラとの対局から3日後，ヒカルさんから連絡があった。塔矢アキラにボクのメールアドレスを教えていた，そのアドレスにメールが届いた。ぜひ会いたいということと，そして，わがままを聞いてもらえるなら，実家の自分の部屋で会いたいということ。
「わたしがヒカルと一緒に過ごした部屋です。ヒカルは今は実家を出て一人暮らしして

いるらしいですが，やはりあの部屋は思い出深いのでしょう」
「とりわけ，佐為の思い出がしみついている部屋なんだろうね」
　簡単なメールのやりとりをして，その3日後，つまり緒方精次との対局の前日に会うことにした。その日はそのまま対局会場となっているホテルに泊まる。
　最寄りの駅に約束の時間に着くと，もうヒカルさんが待っていた。お互い，印象的な容姿をしているので，すぐに見分けられた。
「お待たせしました」
「いや，オレもたった今来たばかりだ」
　と言ってあいさつを交わす間もなく，ヒカルさんはボクに尋ねた。
「佐為，いるんだよね?」
「はい，ボクの左にいます」
「そうか・・・・」
　ヒカルさんは肩を落とす。今のヒカルさんに佐為が見えないことはすでに分かっていたはずだけど，改めて現実を突きつけられて落胆している様子。そんなヒカルさんの様子を見て，佐為も悲しげな表情になった。ヒカルさんは，気を取り直すように「こっちだよ」と言って歩き始めた。年末で賑わう夕暮れ時の商店街を抜けると，意外なほど閑静な住宅地になり，じきにヒカルさんの実家に着いた。

玄関を開けるとお母さんらしき人が出迎えてくれた。
「ヒカルのお友達って，この方?」
彼女は怪訝（けげん）そうな顔でボクを見る。
「そうだよ・・・・あっ，ゆっくり話したいから，お茶とか要らないから」
「まあ，そんな失礼な。お茶くらいもって上がりますよ。お友達は緑茶と紅茶，どっちが好きなのかしら」
お母様がボクを見る。
「では，紅茶をお願いします」
「じゃあ，お菓子はおせんべいよりケーキがいいかしら」
「・・・・あっ，はい。その方が・・・・」
こんな問答を無視して，ヒカルさんは
「さあ，上がろう」
と言って2階に上がる階段を昇る。ボクもついて行った。ヒカルさんの部屋に入ると，真ん中に置かれている碁盤が目に入った。途中まで石が並べられている。それを見て佐為はハッと息をのんでいるけど，ヒカルさんには佐為の様子は分からない。ボクも，ごくありふれた碁盤と碁石を見て佐為が息をのむ理由が分からない。
「この碁盤は・・・・」

「ああ，それはオレがじいちゃんから買ってもらった碁盤。これで毎日，夜遅くまでいやっちゅうほど打ってた。なあ，佐為」

ヒカルさんはボクの左隣の空間に話しかける。佐為の表情がちょっとばかり明るくなった。ヒカルさんは碁盤の片側に座る。佐為はその対面に座り，自然にボクはその間に座った。

「この碁石は?」

「それは・・・・」

《それは・・・・》

ヒカルさんと佐為がほとんど同時に声を発した。ヒカルさんは目が潤んでいる。佐為も。それに続く言葉を待っている時，部屋の外から

「入ってもいいかしら」

と声がして，返事を待たずにお母様が紅茶とケーキを持って入ってきた。ボクたちの脇に紅茶とケーキを置いて，

「じゃあ，ごゆっくり・・・お友達は晩ご飯はどうなさるの？　うちで食べていかれますか?」

「えっ?」

突然，そんなことを言われて，ボクはびっくりした。

「ああ，藤原さん，この後なにも用事はないんだろう。ゆっくりしていくといいよ。オレもいろいろ話したいこと，聞きたいことがあるし。晩ご飯うちで食べなよ」
「じゃあ・・・・『藤原さん』とおっしゃるの？・・・・お友達の分も用意しておきますね」
「あっ，ありがとうございます。ただ・・・・」
「ただ？」
「今の時間にケーキを食べると，夕食はあまり入らないかも」
　というボクの言葉に，ヒカルさんとお母様の視線がボクに集中した。
「えっ？　何か変なこと言いました？」
「・・・・あの・・・・ケーキを食べると晩ご飯は要らないの？」
「要らないわけじゃないのですが，あまり入らないということで・・・・」
「・・・・はあ・・・・まあ，分かりました。無理強いはしませんから，食べれるだけ食べてください」
　そう言って，彼女は部屋を出て行った。ヒカルさんは相変わらずボクをじっと見ている。
「すげー小食なんだ」
「そうですか？」

「そうだよ。ケーキなんて，別腹だろう」
「そんなこと言っても，ケーキ１個で３００カロリーか４００カロリーくらいあるんですから」
「一々そんな計算をしてるのか？」
　またびっくりされた。
「いや，まあ，自然に・・・・」
　なんだか，さっきのしんみりした雰囲気をボクが壊してしまったみたいで，気が引ける。それで，話題を戻した。
「この碁盤に並べてある石・・・・」
「ああ，この石は・・・・」
　と言いかけてヒカルさんが苦笑いした。
「さっきは泣き出しそうになってたけど，そんな気分，ケーキの話でぶっ飛んじまったなあ」
「すみません」
「いいんだよ。謝らなくて。むしろ，その方が良かった」
　と言いながら，ヒカルさんはまじめな表情に戻り，向かいに座っているはずの佐為に
「佐為，オレが話す」

と言って，説明を始めてくれた。5月5日の朝，ヒカルさんと佐為は碁を打っていたけど，前日のイベントの疲れでヒカルさんは途中で居眠りをしてしまい，その間に佐為が消えてしまったこと。目を覚ましたら，佐為の影も形もなく，ただ打ち掛けの石が並んでいただけだったこと。その未完成の棋譜はヒカルさんの記憶にしっかり刻まれていること。それが，今ここに並べてあること。

「佐為，続きを打ってくれるな。オマエの番だぞ。オレが寝てる間にしっかり考えていたんだろう」

佐為は笑みを浮かべて扇で碁盤の1点を指す。ボクは佐為の脇の碁笥から白石をつまんで碁盤に置く。すかさずヒカルさんが黒石を打ち返し，それに佐為が応酬する・・・お互いあまり長考しない。二人とも相手の考え，思考のパターンが見えているからかな？　終局したら，ヒカルさんの4目半負け。つまり，ヒカルさんは塔矢アキラと同じくらいの強さということ？

「やっぱり佐為は強いな」

というヒカルさんの言葉に佐為は反応せず，碁盤をじっと見ている。

「佐為，どうしたの？」

《4目半ではなくて，3目半の差でないですか？　白のわたしが65目，コミを入れて70目半，黒のヒカルが67目，3目半の差でしょう》

　ボクは，コミという意味不明の言葉が混じっていることは気にせず，とりあえず佐為の言葉をそのままヒカルさんに伝える。
「何言ってんだ。オマエが６５目だから，コミ入れれば７１目半だろう。４目半の差であってるよ」
　と言ってから，ヒカルさんはハッとした。
「そうか，オマエ，まだコミが５目半だと思ってるんだ。あれからルールが変わって，今ではコミは６目半になってるんだ」
　この説明に，佐為は納得した。
《そういうことでしたか。コミが６目半になっていたんですね。それで，アキラとの対局が４目半の勝ちだったことも分かりました》
　ボクには難しくてよく分からない。そんなボクの様子を見て，佐為は
《コミについては，後で説明してあげますよ》
　と言ってくれた。ヒカルさんはそんなボクたちの会話が聞こえるはずもなく，
「それにしても，オマエ，これまでコミのルールが変わったことを知らずに打ってたのか？」
《ええ，まあ，これまではほとんど中押し勝ちでしたから。最後まで打った時もコミの１目の違いが響くような勝負ではなかったから》

この言葉はきちんとヒカルさんに伝えた。それを聞いてヒカルさんは苦笑いした。
「1目の違いくらいはどうでもいいってか。ほんとうにぶっちぎりに強いよな」
《ヒカルも強くなりました。本因坊の名に恥じません》
「佐為が，ヒカルさんも強くなった，本因坊の名に恥じませんと言ってます」
ヒカルさんはうれしそうに笑みを浮かべ，それからちょっと視線を落とした。
「ありがとう。ここしばらく，名を汚すような碁を打ってたけど・・・・もう大丈夫だ・・・・たぶん」
ヒカルさんはボクの方に向き直る。
「佐為と話したいことはいっぱいあるんだけど，その前にオレは藤原さんにお礼を言わないといけない」
ここでヒカルさんは息を継ぐ。
「佐為の名前を出して，ありがとう。うれしいよ。碁を打つ人がみな佐為の名前を知っている。オレが願っても，叶えられなかったことなんだ。だって，オレは幽霊の話なんて誰も信じてもらえないと思い込んで，佐為を隠し通したから。いろんな嘘をついて。藤原さんの優勝者インタビューを聞いてて，よく分かったよ。何もこそこそ隠し立てしなくてよかったんだ。堂々と，佐為のことを話せばよかったんだ」
ヒカルさんの目から涙がこぼれている。

「ヒカルさん，そんなに自分を責めないでください」
「ありがとう。塔矢にもそう言ってくれたんだよな。佐為を隠すために嘘をついていたオレを『責めるな』って言ってくれた。責められても仕方ないのにな」
「そんなことはありません」
　ボクは反論した。
「ボクが佐為の存在を隠し立てせず堂々と明かすという選択をしたのは，ヒカルさんの経験に学んだ部分もあるのです」
「オレの経験に学んだ?」
「そうです。佐為はヒカルさんと一緒にいた頃のことをたくさん話してくれました。ヒカルさんが佐為の存在を隠し通そうとしたために，お二人がとても困った状況に追い込まれてしまったことも話してくれました。それを知っていたからボクは，佐為の存在を隠さずありのままを語るという選択に自信が持てたんです」
　ヒカルさんはボクをまじまじと見つめる。
「オレの失敗が役に立ったんだ」
「失敗と決めつけなくていいんです。幽霊という常識外れの現象に出会った１２歳の少年の精一杯の選択なんです。それを後から振り返って，後出しジャンケンのように，失敗だとかなんだとか批判すべきではありません。それに，仮に失敗だとしても，かまわ

ないじゃないですか。神様じゃない人間なんだから，失敗するのは当たり前です。たとえ失敗だったとしても，自分で『これがいい，こうしよう』と思ってやったことなら，それでいいでしょう。自分の人生なんだから」

「自分の人生？」

「そう，自分の人生です。自分の人生なんだから，自分の判断で自由に生きていいんです」

「だけど，その判断が間違っていたら・・・・」

「その時は，その失敗から学べばいいんです。次に同じ失敗をしないよう」

「そんなふうにスカッと割り切れるといいけどな・・・・」

「じゃあ，スカッと割り切れるようになりましょう」

「ずいぶんあっさり言うなあ・・・・まあ，オレもがんばるよ。でも・・・・それでも，佐為のことは割り切れない。ほかの失敗は割り切れても，佐為のことは・・・・」

　ヒカルさんは寂しそうにうつむく。そんなヒカルさんに佐為が語りかける。

《ヒカル，失敗だなんて言わないで。わたしはヒカルと一緒にいてとても楽しかった。とても幸せでした。それを失敗だなんて言わないで》

「ヒカルさん，佐為も言ってます。佐為はヒカルさんと一緒にいてとても楽しかった，幸せだったって。それを失敗だなんて言わないで，と」

「ほんとうにそう思ってくれるか？　オレと一緒にいて幸せだったと，ほんとうに思ってくれるのか？　だって，オレは，佐為を隠そうとして，碁を打ちたいと言う佐為を邪魔に思ってしまったことさえあるんだ・・・・」

佐為は深くうなずいて，

《あの状況でヒカルがそのように思ってしまっても，それは仕方のないことです。そんなこと，気にしてませんよ。そんなこと，気にしないで。いろんなことはあったけど，わたしはヒカルと一緒にいて幸せだったんです》

と語る。ボクはそれをヒカルさんに伝える。

「そうか，オレと一緒にいて幸せと思ってくれてたのか・・・・よかった」

ヒカルさんはほっとしたように息をついた。それを見て，佐為が語りかける。

《わたしはこれをヒカルに伝えたかったんです。わたしはヒカルと一緒にいて幸せだったと。それをどうしても伝えたかった》

「佐為はこのことを，ヒカルさんと一緒にいて幸せだったことをどうしても伝えたかったと言ってます。だから，後悔なんかしないでください。ヒカルさんは佐為と一緒にいて，佐為を幸せにしたんですよ」

「ありがとう」

ヒカルさんは潤んだ目でボクを見，それから左隣にいるはずの佐為を見，そしてまた

ボクを見た。
《ヒカル，今宵はいやっちゅうほど打ちましょう》
「佐為が，今宵はいやっちゅうほど打ちましょうと言ってます」
「ああ，そうしよう」
そう言ってヒカルさんが碁盤に並んだ碁石を碁笥に片づけている時，下から声がした。
「そろそろ晩ご飯にしない？」
「はい」
とボクが返事した。ヒカルさんが笑っている。
お父様は帰りが遅いとのことで，3人で囲んだ夕食の卓。ヒカルさんは旺盛な食欲を見せている。
「藤原さん，ほんとうにそれだけでいいの？」
「はい。お気遣いなく」
「そうか・・・・」
ヒカルさんは不思議そうというか，拍子抜けしたというか，なんとも表現しにくい表情を浮かべている。
「ヒカルが食べ過ぎなくらいなんですよ」

「うるさいんだよ，お母さんは」
　こんな会話も微笑ましい。
　夕食が済むと，すぐに2階に戻って「いやっちゅうほど」碁を打った。ボクは，
「佐為もヒカルさんも，碁を打つだけでいいの？　いろいろ話したいことがあるなじゃない？」
　と問うたら，二人同時に
「いいんだよ」
《いいんです》
　と返事が返ってきた。佐為はさらに説明を加えてくれた。
《碁の対局は「石による対話」とも言われます。お互い言葉を交わさなくても，石を打ち合うだけで，心が通い合うんです。だから，こうやって対局するのが何よりもヒカルと心を通じ合うやり方なんです》
　そうなのか。碁を打たないボクには分からない心境だな。でも，二人が満足なら，それでいい。それに，石を打ち合う二人の表情を見ているのもおもしろい。佐為の表情もおもしろいけど，ヒカルさんの表情も見ていて飽きない。真剣なことはもちろん真剣なのだけど，それに加えて，碁を打つ歓びとでも形容したい表情が浮かんでいる。これまでインターネットで見たことがあるヒカルさんの対局で，こんな表情は見たことがな

い。佐為が相手だからなのだろう。そんな2人を見ていて，ボクも時のたつのを忘れた。そんなボクたちに時間を知らせてくれたのは，またしてもお母様。
「ヒカル！もう11時よ。いくら何でも，藤原さんも帰らないといけない時間でしょう」
ヒカルさんは時計を見る。
「あっ，やべー。佐為は明日，緒方さんと対局なんだよな。この1局で終わりにしよう」
「まあ，対局は午後からですから・・・・」
「それでも，対局の前の日はちゃんと寝ないといけない・・・・と，いつも佐為がオレに説教した」
佐為が笑っている。ボクも笑った。
その1局が終わって，ヒカルさんは車でホテルまで送ってくれた。ボクは，まだ電車が動いている時間だからと遠慮したけど，
「藤原さんみたいなきれいな人をこの時間に駅まで一人歩きさせるのは心配だ」
と言って送ってくれた。親切はありがたく受け取った。
車は30分ほどでホテルに着いた。ドアを開けて外に出ようとしたボクにヒカルさんが声をかけた。
「藤原さん，あんたと会って話せてよかったよ。オレ，最初は，あんたはオレに聞こえない佐為の声を伝えてくれればそれでいいと思ってた。でも，それってとても失礼なこと

だったな。佐為だけじゃなくて，あんたも・・・・なんて言えばいいかな，オレにとってありがたい人だよ」

「ありがとう」

　ヒカルさんの素直な言葉に，ボクも素直に礼を返した。ヒカルさんがそう思ってくれるのはうれしかった。ヒカルさんは，ボクと，ボクの隣にいるはずの佐為に笑顔を見せ，それから前に向きなおして車を発進させた。走り去る車を見ながら，ボクはヒカルさんがボクを「あんた」と呼んだことに気づいた。

　ホテルの部屋に入って，佐為がボクに話しかけた。

《ロミー，今日はほんとうにありがとう。わたしも，そしてヒカルも・・・・》

　ここから先，言葉が出てこない。

《ヒカルはこのところ調子を崩していたようですが，きっと明日から調子を取り戻しますよ》

「そうだね。きっとそうだよね」

　ここで，この幸せな雰囲気のまま，会話を終わりにするのが良いのかもしれない。でも，ボクは自分の考えを話しておきたい，佐為には。

「以前から思っていたことだけど，今日，ヒカルさんに会って，ヒカルさんと話して，佐為とヒカルさんの交流を間近に見て確信したことがあるんだ。5年前，いやもう6年前

になるのかな，別れは佐為にとってもヒカルさんにとっても辛く悲しかったと思うけど，それでも，あの時点で別れるのが二人にとって一番良かったんだと思うよ。あの時点で別れていたからこそ，今，あの2年間を幸せな日々として振り返られるんじゃないのかな」

佐為は〔なぜ?〕というような表情を見せる。

「過去の思い出は美化されがちだけど，冷静に思い返してごらん。別れる直前の日々，何週間か何ヶ月かの日々，二人とも苦しんでいたんでしょう。佐為は，自分が碁を打てないことを，そして自分が碁を打ちたいと願うのがヒカルさんを追い詰めてしまうことを，さらには自分に碁を打たせないヒカルさんを恨みそうになることを。ヒカルさんは，佐為に碁を打たせてあげられないことを，そして碁を打ちたいと願う佐為を邪魔に思ってしまうことを。その関係が，あれからずっと，1年，2年，3年，さらに5年，10年と続いていたら，二人はどうなったと思う?　幸せでいられた?・・・・ボクは，もしそうなっていたら，大きな不幸か悲劇が待ち受けていたんじゃないかと思うんだ」

佐為はじっと考え込んでいる。そして，深くため息をついた。

《ロミーの言うことは思い当たる節があります。そうだったかもしれないと思います。ただ，それでも，せめて別れの言葉を告げたかった。何も言葉をかける暇もなく分かれてしまったのは，心から悲しいです》

「確かに言葉をかけることもできずに引き離されてしまったのは，悲しかったと思う。でも・・・・別れを告げたら，きっとヒカルさんは引き留めたよ。その時，引き留めるヒカルさんを佐為は振り切ることができた？」

佐為はボクの言葉を聞いて顔を伏せ，唇をかみしめている。そして，顔を上げ，ボクを見る。

《きっとそうだったのでしょう。ロミーの言うことは正しい。でも，その正しさがわたしを傷つけます》

今度は，ボクが顔を伏せ，唇をかみしめる。

「・・・・そうなんだ。だから，ボクは医者になるのをためらうんだ。医者になって，患者にこんなことを言ってしまうんじゃないかと」

しばらく顔を伏せていて，ボクは顔を上げた。佐為がボクを見ている。悲しさと，慈しみの混じった眼差し。その眼差しを受け止めるのは辛かった。ボクは，視線をそらしかけて，視線を戻した。

「でも，一番話したかったのは，これから話すことなんだ。つまり・・・・だからこそ3度目があったのかもしれない。ヒカルさんとの最初の出会いをリセットして，もう一度，佐為を隠さなくていい状況でヒカルさんと出会うために，この3度目があるのかもしれないということ」

《ロミー・・・・》

佐為の表情が微妙に変化する。

「もちろん，それだけが3度目の目的ではないと思うよ。もしそれだけが目的なら，ヒカルさんとの再会を果たした佐為はもうじき消えてしまうかもしれない。でも，それは寂しいから。『去る者は追わず』であるにしても，それでも，親しい人が去るのは寂しいからね」

《もちろん，すぐに消えたりしませんよ。わたしだって，ロミーと別れるのは寂しいです》

「佐為，ありがとう」

《わたしこそ，ありがとうございます》

ボクたちは笑みを交わした。

「明日は緒方さんとの対局だよ。もう寝よう」

《そうですね》

翌日の昼過ぎ，対局用にしつらえられた小パーティールームに入ると，もう緒方棋聖が席についていた。解説者席には塔矢アキラともう一人，ボクの知らない棋士が座っている。まだ対局開始時間前のはずだけど，タイトルホルダーを待たせて失礼なことをしたと思い，あわてて座った。自分の正面ではなく，自分と正面の間に座ったボクに笑み

を見せて，緒方精次棋聖は話しかける。
「対局相手が空座というのも，奇妙なものだな」
「佐為の気配でも感じていただければと思います」
「オレは，見れも触れもしないものは信じない主義なんだ」
「ボクも以前はそうでした。ただ，現実に佐為という存在に出会ってしまうと，そうとも言ってられなくなりました。もっとも，ボクにしても佐為を見ることはできますが，触ることはできません。触ろうとすると通り抜けるので」
「通り抜ける?」
「はい。たとえば，ボクが佐為の手を握ると，佐為の手を通り抜けて自分の手でこぶしを握るだけなんです」
「それは何とも奇妙だな」
「まあそうなのですが，碁石を置く場所を佐為が扇で示すのは見えますし，その指示の通りに石を置いていけばこれまで全戦全勝なのもご存じの通りです。ボクとしては，佐為の存在を信じないわけにはいきません」
　緒方棋聖はまた笑みを浮かべる。
「インタビューの時と同じ，弁舌さわやかだな。まあ，そんなことはどうでもいい。オレは不敗を誇る佐為と対局できればそれでいい」

「もちろん，ボクも佐為の代理人として緒方棋聖との対局をお手伝いできれば，それでいいのです」

ふと，解説者席の塔矢アキラを見ると，このやりとりを見て笑っていた。

まだ対局開始までちょっと間がある。それでまた，緒方さんがボクに話しかけてきた。

「失礼な質問かもしれないが，藤原ヒロミさん，その容貌でその体型だと，女に間違われないか？」

この質問には慣れている。子供の頃から何百回，何千回も聞かされた。でも，まさか対局の場で聞かされるとは思わなかった。

「それは，しょっちゅうですよ」

「間違えられるのは腹立たしいだろう」

「別に，そんなことありませんよ」

「そうかい？」

「ボクはエレガントで美しいものが好きです。人がそのように振る舞うのを見るのが好きだし，自分の立ち居振る舞いや服装も，ふだんからエレガントで美しくを心掛けています。そして日本では，日本に限らず世界のどこでもそうかもしれませんが，エレガンスや美は女らしい資質と見なされているから，そのように振る舞うボクが女に間違われ

るのはごく自然なことです。自然な現象にいちいち腹を立てるのは心の無駄遣いですよ」

ボクはふだんから思っていることを説明した。緒方さんはあっけにとられたような顔をしている。それを見て佐為が笑う。

《ロミー，緒方さんの盤外戦をみごとにかわしましたね》

《バンガイセン?》

《ああ，ロミーは盤外戦という言葉を知らないのですね。後で説明してあげます》

と言って，佐為はまた笑った。解説者席を見ると塔矢アキラが笑いをこらえていた。

やがて時間となり，対局が始まった。前回同様，タイトルホルダーに敬意を表して佐為が先番を取る。

序盤から中盤へと対局は進む。ボクは盤面を見ても状勢は分からない。ただ，対局相手の表情が少しずつ厳しくなっていくことから，佐為が優勢になっていると判断できる。今日もそうだ。初めのうちはポーカーフェイスだった緒方棋聖が，中盤を過ぎるあたりから，少しずつ厳しい表情になっていく。そして佐為は時おり例の「氷の微笑み」を見せる。ボクが一番好きな瞬間。やがて終盤に入り，しばらく進んだところで，前回の塔矢アキラと同じせりふを緒方棋聖が口にした。

「オレの負けは分かっているが，最後まで打ち切らせてくれ」

ボクはうなずいた。今回は前回のようなハプニングはなく，穏やかに必然の一本道を進んで終局した。佐為が5目半の勝ち。

《塔矢アキラは4目半の差だったね。緒方さんの方が1目分弱いの？》

《そんなことはありません。1目，2目くらいはその時の状況でどうにでも変動します。1目の違いでどちらが強いとか弱いとか言えませんよ》

《ふーん・・・・》

こんな佐為とボクの沈黙の会話は緒方さんの

「検討を始めていいかな？」

という声で中断された。

「はい。もちろん」

そして，前回と同じように解説者も交えた検討が行なわれた。塔矢アキラが積極的に意見を述べる。それを，緒方さんはちょっと煙たそうな顔で見ている。

《アキラさんと緒方さんは仲が悪いの？》

《そんなことはありません。ただ，緒方さんは塔矢行洋の一番弟子。アキラは弟弟子にあたるから，弟弟子からいろいろ言われるのが癪に障るのでしょう》

「空座に座っていると藤原さんが主張する人・・・・いや幽霊か・・・・ともかく空座の主とＦＪＷＲｓａｉが同一であることは認めざるを得ないな」

「認めてくださって，ありがとうございます。空座の主の名前は藤原佐為です」
　ボクはしっかりアピールする。ちょっと子供っぽいかな。でも，ボクは藤原佐為の名前を囲碁の歴史に刻みつけたいんだ。
　こうして検討も終わり，ボクたちは対局室を出た。ゆっくり歩くボクに緒方さんが小声で話しかける。
「この後，二人だけでちょっと話したいことがあるんだが」
　と言って
「二人だけと言っても，口説こうってわけじゃないから，安心してくれ」
　と冗談めかして付け加えた。ボクが
「口説いてもかまいませんよ。ボクは拒絶するだけのことですから」
　と答えると，すぐ後から笑い声が響いた。塔矢アキラの笑い声。いつの間にかそばにいて，今のやりとりを聞いていたらしい。対局が終われば遠慮することもないという感じで，ほがらかに笑っている。緒方さんは塔矢アキラをにらみつけているけど，塔矢アキラはそんな兄弟子の視線に臆する気配はない。ボクは，二人の間に交わされる火花を無視して話を続ける。
「じゃあ，ほかの人に話を聞かれない場所に行きましょう。緒方さん，どこにするか当てはあるんですね？」

「・・・ああ，このホテルのラウンジに仕切りのある部屋があるので，そこを予約している」

「この前と同じですね。たぶん，お話の内容もこの前と同じなんでしょうね」

その通り。この前と同じラウンジの一角で，緒方さんは塔矢アキラと同じことを尋ね，ボクは同じように答えた。ボクの前に佐為が宿っていたのは進藤ヒカルであること。そして，このことは他言無用であること。そしてまた，進藤ヒカルが佐為のことを隠し，そのためにいろんな嘘を重ねたことを決して責めてはいけないということ。

「もちろん，オレを信用して話してくれたんだ。信義は守るよ。オレだって，別に進藤を困らせたいわけじゃないし，進藤を責めるつもりもない」

「人の噂も七十五日」とはよく言ったものだと思う。この年も終わりかける頃，トーナメント決勝戦から７５日，２ヶ月半が過ぎようとしていた。あれほどたくさん押し寄せていたメディアからの取材の申込みやＴＶ局からの出演依頼，オカルト科学研究組織からの招請もめっきり減っていく。それでもぽつぽつとやって来る郵便やメールはほとんど無視しているけど，１つだけ，おもしろそうな企画があった。佐為の似顔絵を作って雑誌に載せるという企画。具体的な方法は，まず，「兄弟くらいには似ている」というボクの写真をパソコンに収め，髪と目の色を黒に変える。コンピューターグラフィックスの技術なら，それくらい訳ないことだろう。それから，ボクが「目尻はちょっと上が

り気味」とか「髪は肩甲骨の下辺あたりまで」とか説明し，それを聞いてデザイナーが修正を加えて佐為の顔に近づけていくというもの。承諾を得られれば年明けに作業を始めたいとのこと。ボクはおおいに乗り気だった。以前から，佐為の棋力だけでなく，その端正な美貌も世間の人たちに知ってほしいと思っていたから。でも，佐為は猛反対した。

《ロミー，何をバカなことを言うんですか。わたしの顔を雑誌に載せるなんて・・・・》

「別に，バカなことじゃないでしょう。美しいものを多くの人に知ってほしいというのは，ごく自然な発想じゃない」

《それはそうかもしれませんが，なぜわたしの顔なんですか?》

「それは，佐為が類い希な美貌だからだよ」

　正面切ってこう言われると，佐為も反論に困ったようだ。それで，ヒカルさんを引き合いに出した。

《ヒカルの意見も聞くべきです。ロミーの一存で決めてはいけません》

「確かに，それはそうだね。でも，ヒカルさんだって賛成すると思うよ。ヒカルさんは佐為を多くの人に知ってほしいんだから」

《そんなことはありません。ヒカルはぜったい，こんなバカな話は拒否します》

　ボクはヒカルさんに電話した。事情を話すと，ヒカルさんはちょっと驚いたような，

戸惑ったような口ぶりになった。そして，
「じゃあ，オレがそっちに行くよ。今日の十段戦の棋譜を佐為に見せたいんだ。会心の対局だったから。その時，一緒にその話もしよう」
「千葉まで来てくれるんですか？」
「高速とばせば，すぐだよ」
　その感覚は，車を使わないボクには分からない。ともあれ，それから1時間もしないで，待ち合わせ場所にしていた千葉大正門前に着いたと電話があった。すぐに迎えに行き，近くの駐車場に車を置いて，部屋まで歩く。ヒカルさんはボクの部屋に入るなり，
「今日の棋譜だ。十段戦。相手は芹澤9段」
　と言って1枚の紙を見せた。それを見た瞬間，佐為の顔いっぱいに笑みが広がった。
《すばらしい・・・・》
「佐為，喜んでるだろう。何となく気配で分かる」
「はい。満面の笑みを浮かべています」
「オレも，今年で一番の対局だと思う・・・・藤原さん，あんたのおかげだよ」
「別に，ボクのおかげとか，そんな・・・・ヒカルさんが実力を発揮しただけです」
「実力を発揮させてくれたのは，あんたなんだ。ああ，もちろん佐為も」
　と言ってヒカルさんはボクの左隣を見る。佐為はヒカルさんの視線を受け止めて微

笑んでいる。それから，二人は紙をはさんで検討を始めた。３０分くらいで検討が終わると，ヒカルさんが，ちょっと気まずそうに

「例の話なんだけど」

と，佐為の似顔絵のことを話題にした。

「オレとしては，断ってほしい」

「えっ？・・・・・」

ボクは意外な返事に驚いた。隣で佐為がはしゃいでいる。

《ほら，ごらんなさい。ヒカルはちゃんと断ったでしょう。わたしの顔を出すなんて，そんなバカな話に乗るはずはないんです》

「・・・・でも，ヒカルさんは佐為のことをみんなに知ってほしいんじゃないの？」

佐為のはしゃぎぶりとは対照的に，ヒカルさんは気詰まりというか申し訳なさそうな顔をしている。

「そりゃあ，そうだよ・・・・佐為の碁はみんなに知ってほしいけど，でも・・・・」

「似顔絵はだめ？」

「なんと言えばいいのかなあ・・・・」

ヒカルさんは説明に困っている。ボクはヒカルさんの次の言葉を待った。

「たとえばさあ，恋人の写真を自分だけが持っていてそれをみんなに見せるのはいいけ

ど，アイドルみたいに雑誌に載るのはいやだろう？　雑誌に載るのは・・・・自分の手から離れてみんなのアイドルになるみたいで・・・・恋人の写真は自分だけのものにしておきたいだろう？」

ヒカルさんの口調は冗談っぽいけど，目は真剣だ。本気で話してるんだと分かる。

「佐為はヒカルさんの恋人なの？」

「いや，そんなことは・・・・」

ヒカルさんはあわてて否定する。

「ごめん，茶化したわけじゃないんだ。つまり，ヒカルさんにとって佐為は，恋人以上の存在，なみの恋人なんかよりずっと大切な存在なんだよね・・・・ヒカルさんは佐為を独り占めにしたい？　自分だけのものにしておきたいの？」

ヒカルさんはじっとうつむいている。目から涙がこぼれている？　そして，ボクを見ないままボクに語りかける。まるで言い訳をするような口ぶりで。

「ごめん。そんなこと考えちゃいけないってことは分かっているよ。今，オレは佐為を独り占めなんかできないんだ。オレじゃなくて藤原さんと一緒にいるんだから。佐為と一緒にいるのはオレじゃなくて藤原さんなんだ。よく，分かっているよ・・・・」

「ヒカルさん，ボクに謝らなくてもいいんだよ。ヒカルさんが佐為にどれほどの愛着を抱いているか，分かってるよ。その佐為の姿も見えず，声も聞こえないのが辛いだろう

ということも分かっているよ」
「そんなことじゃないんだ」
「そんなことじゃない？」
「オレ，藤原さんに嫉妬してるんだ。いつも佐為と一緒にいられる藤原さんに嫉妬してるんだ」
「嫉妬？」
　ヒカルさんはがっくりとうなだれた。
「馬鹿みたいだな。自分でも情けないよ。藤原さんは恩人なのに。佐為の名前をみんなに広めてくれた恩人なのに，それなのに，そんな人に嫉妬して・・・・」
　嫉妬？・・・・確かに，ヒカルさんから見れば，ボクは嫉妬される立場なのかもしれない。それは理解できる。でも，理解できたとして，ボクは何もしてあげられない。
「ヒカルさんの気持ちは理解できるよ。ヒカルさんと佐為の絆は，ボクと佐為との絆よりずっと深かった。できることなら，佐為をヒカルさんのところに返してあげたい。でも，できないんだよ。それはボクにはできないんだよ。佐為が3度目はヒカルさんじゃなくてボクに宿ったのは，ボクの力ではどうしようもない運命だから」
　その時，ヒカルさんは顔を上げ，ボクを見つめる。泣き出しそうな顔。
「藤原さん，どうしてそんなに優しいんだ・・・怒ってもいいんだよ。怒鳴ってもいい

んだよ。オレ，どうしようもない身勝手なことを言ってるんだよ。なのに，なんでそんなに優しいんだ？」
「優しい，とは違うんだ」
「違わないよ。藤原さんは天使みたいに優しい人だよ」
　ああ，この問答，塔矢アキラともやった。
「怒るとか怒鳴るとか，そんな粗暴な振る舞いはしたくないんです。エレガントじゃないから。ボクの美意識に反するから，そんなことしたくないんです。優しいから，じゃないんです」
　ヒカルさんは茫然とした目でボクを見ている。それまでヒカルさんとボクのやりとりを切なそうな顔で見つめていた佐為がボクに話しかける。
《ロミー，どのような理由であれ，そのように怒りを抑え，相手の立場に思いやれるというのは，「優しい」ということなのですよ》
《そうなの？》
　佐為とのやりとりが聞こえないヒカルさんは相変わらずボクを見つめている。小さな部屋で，こんなふうに雰囲気が煮詰まるのは，よくない。
「ヒカルさん，寒さがとても苦手ではないなら，大学の中を散歩しない？　ボクはもうこの時間帯なら外を出歩いて大丈夫だし，大学の中は意外に木立が多いんです。部屋にこ

もっているより，歩きながら話しませんか？」
「ああ，オレはかまわないよ」
　と答えるヒカルさんの表情はちょっとばかり落ち着いてきたなかな？
　・・・・ボクたちは，学期も終わり人気の少ないキャンパスの中を並んで歩く。ボクの左に佐為，その左にヒカルさん。ヒカルさんは佐為が見えないはずなのに，佐為と触れあわない，でも離れすぎもしない，絶妙な間隔を置いて歩いている。部屋を出て，大学の門を抜けて，キャンパスの中に入るまで，ボクは佐為と語り合った。
《ボクが千葉に住んでいるのは，何かと不便だね。ヒカルさんだって，しょっちゅうは来れないし。佐為も，できれば毎日でもヒカルさんに会いたいでしょう》
《・・・・えっ，それは，そうなのですが。でも，千葉から引っ越すとロミーの勉強が・・・・》
《それについては，考えがある》
　ボクたちは，キャンパスの中の小さな公園のような木立の間を歩いていく。葉を落とした落葉樹の間に常緑樹が交じっている。ボクはヒカルさんに話しかけた。
「ヒカルさんから嫉妬されるのは辛いです。ヒカルさんだって辛いでしょう。佐為も，辛いと思う」
「オレのせいなんだ・・・・オレが，こんなくだらない嫉妬なんか感じないようにすればいいんだ」

ヒカルさんはまたうなだれている。
「そうかもしれないけど，気持ちの問題だと言うだけでは解決が難しいでしょう。環境整備も重要ですよ」
「環境整備?」
「うん。ヒカルさんと佐為の距離を縮めるためにできることを考えているんです。たとえば，ボクが東京に引っ越して，もっとひんぱんに会えるようになれば，ヒカルさんの気持ちも今より落ち着いくんじゃないかと」
「えっ，でも，オレのためにわざわざ引っ越してもらうなんて」
「ヒカルさんのためだけではないんです。ボクのためでもあるんです。この1年，千葉大で興味のある分野の講義は学部も大学院も含めてあらかた聴講しました。来年も，同じ科目の講義はあります。今年とまったく同じ内容ではないはずだけど，基本的に，同じ研究者が担当するんだから，似たような内容でしょう。だったら，来年は別の大学の講義を聴講するのも悪くない。たとえば東大の聴講生になってもいいんです」
「藤原さん，東大に受かったのか?!」
「いや，学生として入学するわけではないんです。聴講生としていくつかの講義を聴くだけです」
「はあ・・・・」

　ヒカルさんはこの辺の話はよく分からないようだ。まあ，それはいい。
「地図で調べたんだけど，たとえば駒込あたりに住むと，東大に行くにも便利だし，ヒカルさんの実家にも行きやすい。それに市ヶ谷の日本棋院にも簡単に行けるんですね」
「オレは，そうしてくれるとありがたいけど・・・・」
「さっきも話したように，ヒカルさんのためだけではないんです。ボクのためでもあるんです。ヒカルさんのためにもなり，ボクのためにもなることなら，しない理由はないでしょう？　ついでに言えば，佐為のためでもあります。佐為はヒカルさんに会いたがっていますから。ねえ，佐為」
　突然話を振られて，佐為は一瞬戸惑ったけど，すぐに明るい声で答えた。
《もちろんですよ。ヒカルにしょっちゅう会えるようになるのはうれしいです》
「藤原さんは，それでいいのか？」
「もちろん。たった今話したでしょう。千葉から東京に引っ越しても勉強はできます。むしろその方が便利なくらいです」
「そうじゃなくって・・・・」
　ヒカルさんは考え込んでいる。
「つまり，オレがしょっちゅう佐為に会うようになると・・・・」
「ああ，ヒカルさんと佐為の間の通訳をするのでボクの時間が取られるということです

ね。まあ，それは，お互いが妥協できるところを探せばいいんじゃないの？」
「いや，それでもないんだ・・・・つまり・・・・藤原さんにとっても佐為は大切な人なんだろう？　オレがしょっちゅう会うようになって・・・・つまり，いやじゃないかい？　大切な友達を取られるみたいで・・・・」
　ボクは意表を突かれた。そんなこと，考えてもみなかった。
「そんな・・・・ヒカルさんと佐為が会うのをいやだなんて・・・・考えもしなかった」
「そう？・・・・・」
　今度はヒカルさんが驚いている。
「藤原さん，嫉妬とか，しないのか？」
「嫉妬はしない」
「ずいぶん，あっさり言い切るなあ」
「だって，エレガントじゃないから」
「エレガントじゃない？」
「うん。嫉妬って，エレガントじゃないよ」
　ヒカルさんは，珍しい生き物を見るようにボクを見る。
「エレガントという言葉がヒカルさんの心に響かないのなら，独占欲や嫉妬は，自分も含めて誰も幸せにしない，と言ってもいいです」

「それは確かにそうだけど・・・・」
　こんな話をしているうちにボクたちは小公園の木立を抜けて，校舎の間の並木道を歩いている。ケヤキはすっかり葉を落としている。会話はちょっと途切れている。ボクは，ちょうど良い機会だと思って，もう1つの話を切り出した。
「ヒカルさん，まだ佐為の2番目の宿主として名乗り出る決心はつきませんか?」
　突然この話を切り出されて，ヒカルさんは驚いている。ボクを見て，それから上に視線を向けた。葉を落としたケヤキの枝の透き間から星がいくつかまたたき始めている。
「いつかは，そうしないといけないとは分かってるんだ・・・・」
「そうすれば・・・今は佐為との係わりでボクだけが注目されているけど，そうすれば，ヒカルさんも注目される。ヒカルさんも佐為への思いを堂々と語れるようになる。その方が，気持ちが楽になるんじゃないのかな」
　ヒカルさんは黙って聞いている。
「それに，安心できるでしょう」
「安心?」
「つまり・・・・さっき，ヒカルさんは佐為を恋人にたとえましたよね。世間に公表すれば，いうなれば公認の恋人になるわけでしょう?」
　このたとえ話に，ヒカルさんは思わず吹き出した。

「まじめに話してるつもりですけど」
「いや，藤原さんがオレのことをまじめに考えてくれてることは分かる・・・・」
　後の言葉が続かないけど，ヒカルさんの表情に笑みが漏れていることは分かる。少しは気持ちがほぐれたかな・・・・。それっきり，ヒカルさんは黙り込んだ。ボクたちは黙って並木道を歩き，正門を出たところで，ボクは空を見上げた。月の出ていない夜。都会にしては星がたくさん見える。ボクは空の星を指さす。オリオン座，牡牛座，御者座・・・・。去年の今頃，亥鼻（いのはな）の大学病院を出て，こんなふうに佐為に星を指さしたことがあった。
「星は，何億年，何十億年という宇宙の歴史を経て生まれて，何億年，何十億年の間光り輝いて，やがて消えていく。そんな星がこの宇宙にはそれこそ数え切れないくらいあるんだ。太陽よりも大きな星も，地球よりずっと小さな星も。そんな宇宙のことを考えていると，人間世界のちっぽけなことに心を悩ませるのが馬鹿馬鹿しくならない？」
　ヒカルさんはまたちょっと笑みを浮かべた。さっきよりはずいぶん落ち着いたみたい。
「蝸牛角上何事か争わん　石火光中この身を寄す」
　とつぶやいたら，佐為が
《富に隨い貧に随いしばらく歓楽せよ　口を開けて笑わざるはこれ痴人》

と，後を続けた。
「なんて意味？」
「カタツムリの角の上のような狭い場所で何を争うのだ？　火打ち石の火花のような短い人生なのに，という意味」
「オレは，まだそんな悟りを開けないなあ」
と，ヒカルさんは笑った。自嘲の笑いでも苦笑いでもない，素直な笑い。
街路をしばらく歩いた。ハンバーガーショップが目に留まる。
「ヒカルさん，おなかすいてない？」
「実は，すいてる。宇宙のことより，こっちの方が今はずっと大事だよ」
ヒカルさんの声に元気が戻った。
「じゃあ，ここに入る？　ハンバーガーも好きなんですよね。ラーメンの次に好きなのかな。佐為が話してくれました」
と言って，ボクたちは中に入った。カウンターでヒカルさんは「ダブルチーズバーガーにポテトのLサイズにコーラのMサイズ」と注文して，相変わらず旺盛な食欲を見せている。ボクはハンバーガーにカフェオレSサイズを注文した。できあがった商品を持って席に着くと
「藤原さん，それだけでいいの？　相変わらず小食だなあ」

とヒカルさんが感心したように言う。

《ヒカルが食べ過ぎなくらいなんです》

という佐為の言葉は伝えなかった。ポテトを口に放り込みながらヒカルさんが話しかけた。

「あのさ，藤原さんが東京に引っ越したら，部屋に碁盤と碁石を揃えてくれないか？せっかく佐為がそばにいても碁が打てないとつまんないんだ」

「ああ，そうですね。そうすれば，碁を打ちながら語り合えるんですよね」

ロミー

Ⅳ　ロミー

こうして，何かと多事多端だった年が暮れ，新しい年が明けた。年が明けてすぐ，ボクは東大に聴講生の願書を出した。

そして，1月中旬，塔矢行洋との対局。塔矢行洋は日本の棋界を引退して日本棋院には所属していないから，主催は中国リーグ。北京での開催を打診されたけど，ボクは東京を希望し，塔矢行洋も「この機会にわたしも日本に帰りたい」と言って後押ししてくれた。北斗通信スペシャルは午後から対局開始だったけど，今日は午前10時から始まる。

《今回は，持ち時間が3時間。二人分で6時間。それに，持ち時間がなくなってからの早碁の時間を加えれば，7時間か8時間くらいになります。この時間から始めないと今日のうちに終わらないんです》

と，佐為が説明してくれた。解説は，日本の棋士2名と中国の棋士2名。そのうちの1名は塔矢アキラ。ほかに，日本棋院と中国リーグの関係者が10人ずつくらい来ている。その中にヒカルさんの顔も見えた。

《なんだか，北斗通信スペシャルの時より大がかりだね》
《はっきり言って，アキラや緒方さんより，行洋殿の方が格が上ですから》
《そんなにすごい人なの？》
佐為はゆっくりうなずく。
佐為とこんなことを話しながら会場を歩いていると，相川さんにばったり出くわした。
「おや，北斗通信社もこのイベントにからんでるんですか？」
「残念ながら，からめなかったの。今日は〝ｓａｉ　ｖｓ　ｔｏｙａ　ｋｏｙｏ〟の第2ラウンドに興味があるから見に来たんです」
「それは・・・・ずいぶん熱心ですね」
「実は，業務として来てるんです」
「業務？」
「まあ，敵情視察というか，今後の当社の企画の参考にするためというか」
「なるほど」
「それと，藤原さんにお会いしてお礼を言うためもあります」
「ボクにお礼？」
「はい。おかげさまで『北斗通信スペシャル』は好評で，碁番組にしては視聴率も高く，

営業的に『儲かった』企画なんです。できれば，今後ともお付き合い願いたいと・・・・」
「それはもちろん・・・・佐為がトップレベルの棋士と対局できるのなら，大歓迎です・・・・ひょっとして，何か具体的な企画が持ち上がってるんですか？」
「まだ正式決定ではありませんが，たぶん通ると思われる企画を検討しています。藤原さんの期待，佐為の期待を裏切らない企画だと思いますよ」
「それは，楽しみにお待ちしています」
　脇を見ると，佐為が心からうれしそうな笑顔を見せている。こういう時，佐為はほんとうに単純素朴だな。
「ところで今回も，北斗通信スペシャルの時のように，対局者の椅子には藤原ヒロミさんではなくて，藤原佐為が座るんですか？」
「そのようにお願いしてあります」
「うん。あれはいいよ。わたしも藤原さんから提案された時，一瞬『えっ？』と思ったけど，よく考えてみるとおもしろいと思いました。実際，あの対局の場面を見て，『これ，最高』と思ったんです。空の椅子に，藤原さんに似て，でも髪も目も黒で，狩衣を着て烏帽子をかぶった青年貴族が座ってるのを想像すると，どきどきします。藤原さんに似てるんだから美形ですよね」
「佐為は，碁を打つ時はもっときれいになりますよ。そのように想像していてください」

こう言ってボクは相川さんと別れ，対局の準備の整ったステージに上がった。
相川さんに話したように，塔矢行洋に向き合う席は佐為が座るよう空座になっている。その空座をじっと見つめて，塔矢行洋は
「確かに，あの時と同じ気迫を感じる」
と語る。佐為は「我が意を得たり」というようにうなずく。
「あの時？」
とボクは尋ねた。
「ああ，佐為とネット碁で対局した時のことだよ。6年前になるのか。それから・・・・」
と塔矢行洋が言いかけたのを見て，佐為が気遣わしげな表情を見せる。塔矢行洋は，そんな佐為の表情が見えるはずはないのに，
「いや，何でもない」
と言って話を打ち切った。ボクは，ヒカルさんの新初段戦のことを話そうとして，やめたのだと想像した。確かに，この場で，ほかに多くの人がいる場で，あの話をされては困る。
塔矢行洋は目を閉じた。瞑想しているかのように。佐為は目を開いて，正面を見据えている。やがて対局開始が告げられた。前回，塔矢行洋が負けているので，彼が先番を取る。対局開始とほぼ同時に塔矢行洋は目を開き，鋭い表情で1手目を打ち込んだ。何

日も前から考えていたんだろう。１９路の碁盤に打ち込まれた1個の黒石を見て，佐為はふと笑みを漏らし，それからいつものように表情が冴え渡っていった。何度見ても美しい。佐為のこの顔。そして，扇が1点を指した。

持ち時間3時間に設定されているから，対局はふだんよりゆっくり進む。序盤の布石を終え，中盤の攻防が進んでいる頃，

「打掛けにしてください」

という声がした。

「打掛け?」

ボクは思わず声にした。周りにいる何人かのスタッフが「えっ，打掛けも知らないの?」という顔でボクを見る。そんな顔で見られても，碁については素人なんだから知らなくても仕方ないだろうと思っていると，塔矢行洋が，それまでの厳しい表情から一転した優しい顔で

「打掛けというのは，昼休みのことだよ。朝１０時から始めて，夕方かひょっとしたら夜にも及ぶ長丁場だ。この辺で休憩して食事を取りなさいということだよ」

とていねいに説明してくれた。ボクは

「ありがとうございます」

とお礼を言った。それにしても，対局中の鋭い刃のような表情と，この穏やかな顔の

落差は大きいな。

時計を見ると午後1時。とういことは3時間も経っていたことになる。ふだんのネット碁なら2局くらい打ち終わっている時間。こんなことを考えていると，ヒカルさんが駆け寄ってきて，まず塔矢行洋にあいさつした。

「塔矢先生，お久しぶりです」

「ああ，進藤君，元気かね」

「はい。先生も元気そうで」

「ありがとう」

ヒカルさん，塔矢行洋の前ではずいぶん殊勝だな。と思っていると，ボクに話しかけてきた。

「藤原さん，昼飯食べる場所のあて，ある?」

「ありません。ヒカルさんこそ，ご存じないですか?」

「オレは，こういう高級ホテルってのは苦手なんだ」

「じゃあ，ボクが案内しましょうか?」

という声のした方を振り向くと，塔矢アキラがにこやかに立っている。

「ありがとうございます。ぜひ，案内してください」

というわけで，3人して歩き始めた。

「塔矢行洋さんは？」
　とボクが尋ねると
「若い人たちだけで行ってきなさい」
　と笑みを浮かべて送り出してくれた。塔矢アキラは，このホテルにあるいくつかのレストランのうち，一番カジュアルでくつろげるところに連れて行ってくれた。
　塔矢アキラについて，佐為からはいろいろ聞かされていたけど，実際に会ったのはこの前の対局が初めて。緒方さんとの対局の時を含めても，今日が３回目。佐為の話から，碁一途の求道者のような人をイメージしていたけど，会ってみると優雅で礼儀正しい好感の持てる人だった。髪型がボクに似ているのも親近感が湧く。そんなわけで，ヒカルさんとはもちろん，塔矢アキラともくつろいだ雰囲気の中で昼食を摂り，雑談していた。と言っても，二人が語りあうのをボクが脇で聞いていることが多い。そんな流れの中で，対局で佐為とボクが座る位置が話題になった。
「対局相手が空座，ほんとうは佐為が座っているだけど，ボクたちには見えないから，空座というのは，最初は面食らったけど，３回目になると見慣れてきて，佐為の対局ならこれがいいと思えるようになったよ」
「オレは，最初から，佐為の対局ならぜったいこれだと思ってた」
　ボクは，この打ち解けた雰囲気に油断して

「実は・・・・」
と，打ち明け話を始めてしまった。
「ヒカルさんは知ってると思うけど，佐為は，ふだんから美しいけど，対局の時は，それこそ冬空の月のように冴え渡った表情を見せて，ふだん以上に美しいんだ」
「ああ，分かる，分かる」
とヒカルさんが相づちを打つ。
「その，ふだん以上に美しい佐為の顔を見るには，あの位置が好都合なんです。ボクが対局者の椅子に座って佐為が真横にいるより，あの位置関係の方が見やすいでしょう」
二人は「なるほど」と納得してくれたけど，佐為は
《ロミー，そんな邪（よこしま）なことを考えてたんですか！》
と叱りつけた。ボクは思わず，
「『よこしま』ってことはないでしょう」
と声に出して答えてしまったので，二人がボクを見つめた。
「あっ，済みません・・・佐為はなぜか自分の美貌を話題にされることを嫌うんです。星や花の美しさには，音楽や絵の美しさには，とても繊細な感受性を持ちあわせているのに，棋譜の美しさについてさえ熱心に語るのに，自分の美には無頓着というか，語られるのをいやがるんです。それで，今もボクを叱りつけて・・・なんで，『きれい』と

言われて怒るんでしょうね？」
　二人は笑っている。
「お二人も言われたことあるでしょう。塔矢さんは典型的な美形だし，ヒカルさんだって美形の部類ですよ。これまで『きれい』と言われたことはあるでしょう。そんな時，怒りますか？」
「怒りはしないけど・・・・」
　塔矢アキラが歯切れ悪く答える。ヒカルさんが
「藤原さん，あんたこそ，『きれい』ってしょっちゅう言われるだろう。うれしいかい？」
「もちろん，うれしいですよ」
　二人は驚いたようにボクを見る。
「男が『きれい』って言われてもなあ・・・・」
　とヒカルさんがつぶやいたから
「男とか女とか，どうでもいいでしょう」
　と答えたら，二人はもっと驚いた顔でボクを見た。そしてヒカルさんがふと，
「藤原さんは強いなあ」
　とつぶやいた。
「ボクが，強い？」

「うん。人が何と言おうと，世間が何と思おうと，自分の生き方を貫いてる」

ともあれ，こんなささやかなハプニングを交えながら昼休みは終わった。対局者の椅子に座った佐為は，その美貌を眺めるのに好都合な位置に座ったボクをにらみつける。

《まだ怒ってるの？》

と問いかけたら，ふっと笑みを浮かべてくれた。そして，午後の対局の開始。１９路の碁盤に黒石と白石の模様が徐々に成長していく。それは，ボクには，溶液の中で結晶が少しずつ成長していくさまにも見える。違うのは，結晶はその元となる原子や分子によって出来上がる形がある程度決まっているけど，碁盤の黒石と白石の模様は２つとして同じものはないこと。

終盤に入っても，両者の緊張は緩まない。最後まで勝負が見えないのだろう。そして，残り１５目くらいのところで佐為が，

《どうやら，わたしの半目負けのようです》

とつぶやいた。

《えっ，佐為が負けるの》

《おそらく》

それから，二人は淡々と打ち合って終局した。佐為が負けの碁盤を静かに眺めている時，

「盤面では黒７２目，白６６目，コミを入れて白の半目勝ちです」
　というアナウンスが流れた。
　ボクは思わず「えっ？」と心の中でつぶやいて，佐為を見，そして塔矢行洋を見た。佐為も狐につままれたような顔をしている。
「藤原さん，どうしたのだね？」
「あの・・・・佐為が勝ったんですか？」
「そうだよ。相変わらず佐為は強い。また半目及ばなかった」
　この時，
《そうでした。コミのルールが変わっていました。この前ヒカルから説明してもらったのに，忘れていました。６目半でしたね》
「藤原さん，佐為の負けと思ったのか？」
「あっ，はい。佐為が，『コミのルールが変わったのを忘れていました』と話してます」
「ああ，そういうことか。確かに，わたしも対局しているうちに，この前の対局から間を置かずに打っているような気分になりかけた。この間に流れた時間を飛び越えているような気分だった」
　ボクの周囲では碁盤が片付けられ，次のプログラムの準備が進められている。今回は対局者を交えた検討は行なわれず，代わりに対局者に感想を聞くインタビューが予定さ

れている。準備作業は手早く終わり，塔矢行洋とボクが並んで座り，隣に司会者の机がある。その脇に，日本棋院と中国棋院の関係者の席も用意されている。インタビューはすぐに始まった。

「まず，対局の感想を。塔矢行洋先生から」

「佐為は強い。ただそれだけだね」

　と塔矢行洋は手短に答える。それで，ボクに話が振られた。

《佐為，何か話して》

《わたしも同じです。行洋殿は強い。機会があればこれからも何度でも打ち合いたい》

　ボクはこの言葉をその通り伝えた。

「藤原ヒロミさんは，オープン碁トーナメントの優勝者インタビューで，『佐為が対局を望む相手が2人いる』と話しておられました。そのうちの1人は塔矢行洋先生で間違いないですね？」

「はい」

「もう1人の名前は？」

「それはまだ・・・・」

　とボクが言いかけた時，棋院関係者の席から

「藤原さん，話してもいいよ」

と声がした。まぎれもないヒカルさんの声。ボクは声の方を向いた。ヒカルさんはボクにうなずいている。ボクもうなずいた。

「もう1人は，進藤ヒカルさんです」

会場がどよめいた。司会者は意外な進行にちょっと戸惑っていたけど，すぐに気持ちを切り替えた。

「それはどうしてですか？　塔矢行洋先生の場合は，あのネット碁の伝説的な名勝負がありました。進藤本因坊とはどのような？」

ボクはまたヒカルさんを見る。ヒカルさんはまたしっかりうなずいた。

「それは，ヒカルさんこそ，佐為の2番目の宿主，ボクに宿る前，佐為はヒカルさんに宿っていたからです」

ここで会場から，さっきより大きなどよめきが生じた。その中に「やっぱりそうか」という声がいくつか混じっている。ボクは話を続ける。

「ヒカルさんが12歳の年，小学校6年生だった年の冬から，14歳の年，中学3年になったばかり，言い換えればプロになったばかりの年の5月5日まで，2年半くらい，二人は，佐為とヒカルさんは，毎日何度も何度も碁を打っていたのです。ヒカルさんは佐為が最も深い愛着を寄せる棋士なのです。佐為は，自分の持てるものすべてを注ぎ込んでヒカルさんを育てたんです。ヒカルさんは佐為の弟子，たった一人の愛弟子なので

す」

会場はざわめいている。司会者はその場の状況を読んで，

「予定を変更して，進藤本因坊に藤原佐為との係わりについてインタビューしたいと思います。いかがでしょうか？」

と会場に問いかけると，会場から拍手と「いいよ」，「ぜひ聞きたい」という声が返ってきた。ヒカルさんは立ち上がり，まず司会者に一礼し，それから会場に向かって一礼した。そして，

「何でも訊いてください。この期に及んで隠し立てなんかしません。藤原さんを見習って，事実をその通りに答えます」

さっそく，なぜ隠していたのかという質問が出された。

「怖かったからです。幽霊がいるなんて話しても，信じてもらえないだろう，馬鹿にされるだろう，おかしな奴だと思われるだろう，そんな気持ちでいっぱいで，話せなかったんです」

なぜ，今になって打ち明けるのかという質問には

「藤原さんのおかげです。藤原さんのしていることを見て，分かったんです。嘘つくより，事実をありのままに話す方がずっと楽なんだって。それでも，すぐには決心できなかった。今日，やっと覚悟を決めました」

　それからヒカルさんは，問われるままに，いや問われるまでもなく，語り始めた。お祖父様の蔵の中での出会い，最初はいやいやながら始めた囲碁，塔矢アキラとの出会い，小学生なのに学ランを着て出場した中学囲碁大会，中学1年生の1学期の囲碁大会での塔矢アキラとの再会，ネット碁ざんまいだった中学1年の夏休み，院生になる決意，院生時代の思い出，プロ試験，塔矢行洋との新初段戦，塔矢行洋と佐為のネット碁対局を取り持ったこと，そして何より，自分の碁を打とうと思えば佐為に碁を打たせてやれなくなった葛藤。会場全体がヒカルさんの話に聞き入っているようだった。だけど，鋭い質問は飛んでくる。

「感動的なお話でした。進藤本因坊は真実を語っておられると思います。嘘偽りはないと思います。それでも，1つだけ疑いが消えません。プロ試験，佐為の力を借りず自力だけで戦ったということですね。そう信じたいのですが，確実な証拠がありますか？」

　ヒカルさんは首を振る。

「証拠なんか，ありません。オレを信じてもらうしかありません」

　ここでボクは話に割り込んだ。

「確実な証拠とは言えませんが，状況証拠はあります。ヒカルさんのプロ試験の成績は23勝3敗です。佐為の力を借りたのなら，26戦全勝だったはずです。それに，プロ試験を佐為の力で勝ち抜いたのなら，プロになってすぐ佐為は消えたのですから，ヒカ

ルさんはプロになって連敗したはずです。でも，実際は，ショックで手合を休んだ不戦敗はありましたが，実際に対局して負けたことはなかったはずです。それどころか，その頃のヒカルさんは『最強初段』と言われていたんですよね。この戦績が，プロ試験を自力で勝ち抜いた証拠にならないでしょうか？」

「まあ，そう言えば，言えますが・・・・」

この時，解説者席から，

「ボクがもう1つの証拠をお見せします」

という声が上がった。塔矢アキラだった。彼はその場にいたスタッフに，

「大盤解説用のスクリーンを立ち上げてください。これからボクが2枚の棋譜をご覧に入れます。それを見れば，あの頃の佐為の碁と進藤の碁の違いが分かるはずです」

「塔矢・・・・」

ヒカルさんはそれだけ言って，ほかには何も言えず，塔矢アキラの振る舞いを眺めている。塔矢アキラはパソコンのマウスを操作して，あっという間に1枚の棋譜をスクリーン上に作り上げた。

「これはボクが初めて進藤と，つまり佐為と対局した時の棋譜です。この時，佐為はボクを相手に遙かな高みから指導碁を打ちました。次に・・・・」

と言ったところで，ヒカルさんが

「2枚目はオレが打つ」

と言って塔矢アキラからマウスを取り上げた。塔矢アキラはほほえんでその場を譲った。ヒカルさんもあっという間に棋譜を作った。棋譜が作られている途中から，その脇で塔矢アキラが説明する。

「これはボクと佐為の2回目の対局です。この時，佐為はボクを一刀両断に切り捨てました。碁を打つ人には一目瞭然でしょう。この棋譜にある佐為の手筋と進藤の打ち方は違います。確かに愛弟子ですから似ているところはあります。でも明らかに別です。この頃の進藤の棋譜は残っていません。プロ試験も棋譜に残りません。でも，この頃の進藤と打ち合った人はこの会場にもいるはずです。明らかに違っているでしょう。プロ試験で進藤は，佐為に打たせたのではありません」

会場にいる人たちの視線がヒカルさんと塔矢アキラに集まっている。ボクに視線を向ける人もいる。ボクは発言を求めた。

「状況証拠はあくまで状況証拠です。いくら積み重ねても１００％確実な証拠にはなりません。でも，それなりの説得力はあるはずです。ボクの話と塔矢アキラさんの話を聞いて，ヒカルさん・・・・進藤本因坊の言い分を信じてもいいと思ってくれる人も多いと信じています。もちろん，それでもまだ疑う人もいるでしょう。それは進藤本因坊も覚悟の上だと思います」

その時，

「わたしは，進藤君を信じるよ」

と塔矢行洋が発言した。その瞬間，会場が静まった。ボクの脇で佐為が

《行洋殿，ありがとうございます。心から感謝いたします》

と目を潤ませながら塔矢行洋に話しかけた。

時間も内容も予定から大幅にはみ出した対局後インタビューが終わり，ボクはステージから降りたところで，脇に並んでいる塔矢行洋に

「ヒカルさんのために発言していただいて，ありがとうございます。ボクもですが，佐為が心から感謝しています」

と，佐為の言葉とボクの気持ちを伝えた。

「当たり前のことを言ったまでだよ。碁打ちであれば誰だって，自分の碁を打ちたいと思う。たとえ，佐為に打たせる方が勝てると分かっていても，それでも自分で打ちたいと思う，それが碁打ちというものだ。進藤君は碁打ちだよ。それ以外の何者でもない」

「ありがとうございます」

ボクはもう一度礼を言って歩き出そうとしたけど，塔矢アキラの声に呼び止められた。

「藤原さん，これからお暇ですか？」

「ええ，特に用事はありませんが」
「それなら，我が家にご招待したいのですが・・・いえ，藤原さんに特別な用件があるわけではありません。夕食にお誘いしたいというだけのことです」
「ああ，わたしの口から言うのも何だが，明子の手料理はなかなかのものだよ。ぜひ藤原さんに召し上がってほしい。できれば佐為にも食べてもらいたいのだが，それは無理だな」
　塔矢行洋は，対局中の厳しい表情とも，インタビューの終わりに一言で会場を静かにした時の威厳ある表情とも違う，穏やかな表情で語る。そこに，
「先生，ほんとうにありがとうございます」
　というヒカルさんの声がした。
「それから，藤原さんも塔矢も，ほんとうにありがとう」
　と頭を下げた。
「キミは，ボクの生涯のライバルだ。そして，かけがえのない友だ。あれくらい，当然だよ」
　と塔矢アキラが答えた。ボクがこの上さらに何も付け加えることはないだろう。
「じゃあ，ボクは車を出してきますから，ホテルの出口で待っていてください。あっ，進藤も来るだろう?」

「もちろんだ。久しぶりに明子さんの手料理，楽しみだ。もちろん，その後で打つよな？」

その言葉に，ボクは驚いた。これから塔矢さんの家で夕食をごちそうになれば，かなり遅い時間になる。ボクは帰りの電車の時間を気にしているのに，ヒカルさんはそれからまた碁を打とうというのか。確かに，碁打ち以外の何者でもないな。

塔矢アキラの運転する車は外堀に沿って走り，しばらくして本郷通りに入って北に向かっている。「このまま行くと駒込だけど」と思っているうちに駒込駅が見え始めた。そして車は左に折れていくつかの路地を走り抜けて，立派なお屋敷の前で止まった。

「ここが塔矢さんのうち？」

「はい」

「立派なお屋敷ですね」

「そうなんだよ。オレんちとは桁違いだろう」

というヒカルさんの言葉にみんな笑った。門を開けると庭があり，その先に建物がある。玄関を開けると，明子さんが

「いらっしゃいませ。藤原さんは初めてですね」

と，にこやかにあいさつしてくれた。

「こちらですよ」

とダイニングルームに案内された。
「藤原さん，何か嫌いなものとかありますか?」
「いえ，特には」
「藤原さんは小食だから，張り合いがないかもしれないよ」
ヒカルさんは気軽に話しかけている。まるで自分の家にいるみたい。
「ヒカルさん，なんだか自分の実家にいるよりくつろいでるね」
と話しかけたら，
「そうかなあ」
と苦笑いされた。
ともあれ，こんなくつろいだ雰囲気で塔矢家の晩餐は進む。確かに，ボクはグルメじゃないけど，それでも明子さんの料理が一流なことは分かる。この感想を伝えたら
「男を落とすにはまず胃袋から，と言いますからね」
と，思いがけなく色っぽいことを言われた。
「そんなことわざがあるんですね・・・・でも，食欲を制したら簡単に落とせるなんて，男って単純な生き物ですね」
というボクの反応を明子さんはおもしろがった。
「藤原さん，まるで自分が男じゃないかのような言い方」

「まあ，男と意識してはいませんから」
「じゃあ，女と意識してらっしゃるの？」
「女とも意識してません。男とか女とか，そんなことふだんぜんぜん意識しないんです」
この返事には明子さんだけでなく，ほかのみんなもあきれたような顔をボクに向けた。まあ，この反応は慣れている・・・・。
この日の塔矢家の晩餐でボクが注目を集めたのはこの時だけ。ほかはほとんど碁の話ばかり。佐為は喜んで聞いているけど，ボクはいささか蚊帳の外。別にいやではないけど・・・・。そんなボクに気を遣ってくれたのか，塔矢アキラが来月に予定されている高永夏（ホ・ヨンハ）との対局を話題にした。
「福岡でやるんだよね」
「はい。東京とソウルの中間ということなんです。実際は，福岡は東京よりソウルの方がずっと近いんですけどね」
「そうなんですか？」
「福岡～大阪と福岡～ソウルがほぼ同じ距離です」
「そんなに近いんですか」
「そうなんです。ちなみに，福岡～東京と福岡～上海（シャンハイ）がほぼ同じ距離です」
「あら，それじゃ，わたしたち，福岡に住めば何かと便利かも」

と明子さんが冗談めかしてから，
「それにしても，ずいぶん詳しいんですね」
と感心したように言う。すかさずヒカルさんが，
「藤原さんは何でも知ってるんだ。知らないことがないんじゃないか？」
「そんなこともないけど・・・・福岡に住んでいたんです。１７歳の時まで」
「へえー，そうだったんだ」
「福岡のどのあたり？」
「博多中州です」
実際は，中州から川一つ隔てた所だけど，そこまで詳しく言わなくてもいいだろう。
「で，１７歳の時からは千葉？」
「じゃないんです。１７歳から２０歳までは新宿に住んでました。２０歳で大学に入学して千葉に引っ越したんです」
「そうだったんだ。オレ，考えてみると，藤原さんの昔のこと，ぜんぜん知らないな」
「まあ，特に知らなくても・・・・」
ボクは話題をそらすために引っ越しの話をすることにした。
「もうじき，都内に引っ越そうと思ってるんです」
「都内のどのあたりを考えてらっしゃるの？」

「それが，駒込を考えているんですけど・・・・」
「あら・・・・」
「やっぱり，ここは駒込の近くですよね？」
「はい。駅まで歩いて１０分はかかりません。７～８分くらいでしょう」
　と言って明子さんはまた冗談めかした口調で
「いっそ，うちに寄宿なされば？　空いてる部屋の１つや２つ，ありますよ」
　すると塔矢アキラが
「それはいい。うちに住んでくれれば，ボクは毎日佐為と打てる」
　とまじめに言い出したから，ヒカルさんが
「それはだめだ。オレを差し置いて」
　とまじめに言い返した。ボクはそのやりとりの子供っぽさに笑いそうになって二人を見たけど，どちらも真剣な顔つきなので，びっくりした。
「まあまあ，冗談ですよ。藤原さんだって，うちに住むのは何かと気詰まりでしょう。でも，近くに住まわれるのなら，ちょくちょくいらしてください。進藤さんも一緒にね。アキラが恨まれては困りますから」
　と，明子さんはこの話を丸く収めてくれた。
　こうして夕食を終え，ボクは帰ろうとしたけど，ヒカルさんは予定通り塔矢アキラと

1局打っていくとのこと。
「藤原さん，帰るの？　オレと塔矢の対局，見ていかない？　まあ，藤原さんじゃなくて，佐為に見せたいんだけど。佐為は，オレと塔矢の対局，見たことないんじゃない？」
「そうなの？」
佐為はちょっと考え込んで，
《そういえば，中学1年生の時の囲碁大会での対局だけです》
「中学1年生の時の囲碁大会だけだって」
「そうだよな」
ボクは困った。佐為はきっと見たいはず。でも，ここで二人の対局に付き合うと，きっと終電に乗り遅れる。明日は朝から聴講したい講義があるから，ボクは今夜のうちに千葉に帰っておきたい。
《佐為，ボクは明日の朝の講義を聴講したいからから，帰りたいんだ》
佐為はうなずいた。
《もちろん，ロミーの勉強の邪魔はしたくありません。ヒカルとアキラの対局を見る機会はこれからたくさんあるでしょう。今日でなくても》
そう言いながら，未練がましい表情になっている。それは仕方ない。
《ありがとう》

と，佐為に言って，ヒカルさんに説明する。
「残念だけど，二人の対局を見ていると終電に乗り遅れるんです。明日は朝から聴講したい講義があるので，今日のうちに帰りたいんです」
ヒカルさんは残念そうな顔をしたけど，
「まあ，そういうことなら仕方ないな。藤原さんの勉強の邪魔はできないから」
という言葉で見送ってくれた。
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／
（ここから第三者視点）
佐為と塔矢行洋の対局の前日，相川は北斗通信の社長室に呼ばれていた。
「北斗通信スペシャルは成功だった。視聴率も，二桁などは無理だが，碁番組としては記録的な数字だったたし，コストは対局料と会場費その他もろもろの諸経費を含めてもたいしてかからないから，コストパフォーマンス的にはすばらしい企画だった」
「ありがとうございます。担当者として，うれしいです」
「それにしても，あの藤原ヒロミという人，実に得がたい素材だね。美しいだけなら，ほかにもいるが，ああいう美しさはほかにいない。しかも経歴がすごい。メディア情報だから誇張もあるかもしれないが，１２歳の時に両親を事故で失って，博多中州でバーを

やっていた叔母に引き取られ，中州の花街で育ち，１７歳からは新宿歌舞伎町で暮らした。ショーダンサーをやってたんだね。ふつうに男の子の衣装でも踊ったけど，ドレスを着ても踊っていた」

「それが，ノーメイクなんですよ。『ロミーちゃんは，汗で化粧が流れるのを嫌ってノーメイクで踊るの。すっぴんでドレス着て似合うんだから，もう嫉妬を通り越してただ惚れ惚れ見てたわよ』って談話も載ってました」

「しかも，とびきり頭がよくて，高校にも予備校にも通わずに医学部に入学した。２０歳の時だからふつうに言えば二浪なんだけど，境遇を考えればすごいことだ・・・・テレビドラマの１つや２つ，いや映画だって作れそうじゃないか」

「残念ながら社長，すでにたくさんのテレビ局や映画会社がアタックしてるんですが，すべて拒否されています」

「それは知っている。ただ，ドラマとか映画じゃなくても，たとえば当社のイメージキャラクターとかになってくれないものかね？　碁をからめて頼んでみたら・・・・」

「それは・・・・北斗杯のイメージキャラクターくらいなら引き受けてもらえるかもしれませんが，でも年齢が・・・・確かもうすぐ２９歳になられる・・・・」

「いや，それは名案だ。ぜひお願いしてみよう。へたなジャリタレよりよほど我が社のイメージアップになる。北斗杯は出場する棋士たちこそ十代だが，宣伝のターゲットは

企業関係者であれ一般消費者であれ，基本的に大人たちなんだから。イメージキャラクターだけじゃなくて，北斗杯にあわせて中国，韓国の棋士との対局を設定してもいい。若手の有望な棋士がやって来るんだし，団長としてはそれぞれの国のトップレベルの棋士が来る。その人たちとの対局を北斗杯関連のエグジビジョンとして流せば十分ビジネスになる。向こうだって，佐為，ＦＪＷＲｓａｉとの対局なら望むところだろう。わざわざ日本に来るのは大変かもしれないが，どうせ北斗杯で来日するんだから」

「そうですね。高永夏なんか，佐為と何の縁もゆかりもないのに，対局に名乗り出て，来月福岡で対局するんですからね」

その２日後，つまりｓａｉ　ｖｓ　ｔｏｙａ　ｋｏｙｏ第２ラウンドの翌日，相川は再び社長室に呼ばれた。

「藤原ヒロミさんの感触はどうだった？」

「なかなか良かったです。佐為がトップレベルの棋士と対局できる機会は大歓迎のようです。イメージキャラクターの話はしてませんけど」

「では，すぐに話を進めてくれ」

相川はすぐにロミーに連絡した。ロミーは，北斗杯関連の対局はよろこんで受け入れた。イメージキャラクターについても，北斗通信のサイトの北斗杯関連のページに佐為ではなく自分の顔写真が載るだけならということで了承した。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／

（ここからロミー視点）

２月上旬，高永夏との対局の前日，ボクは１２年ぶりに福岡の街を訪れた。対局会場であり，ボクの宿泊先でもあるホテルは博多駅のそばにある。夕暮れ時，ボクはホテルを出て，１２歳から１７歳まで5年間を過ごした街区にのんびり歩いて出かけた。大きなビルが3棟建っている。そうでしかあり得ない。かつてこの地に立ち並んでいた小さな商家，１階が商店，２階が住まいになっている小さな家屋はほとんど，ボクが博多を去る頃に取り壊され，再開発ビルの建設が始められた。ボクが子供から大人に変わりかける5年を過ごした街区はもう存在しない。それはただ，ボクの記憶の中だけにある，そのことを確かめに来ただけなんだ。ボクはビルの中には入らず，周りをぐるりと歩いただけで引き返した。

　ホテルに戻ってしばらくすると，フロントから電話がかかってきた。面会人が来ているという。その名前に心当たりはない。その旨を伝えて確認しても，間違いなくボク，藤原ヒロミに面会希望なのだという。ちょっと気味が悪いけど，人目の多いホテルのロビーで会うのなら大丈夫だろうと思って，降りていった。

　フロントに，ボクの見知らぬ中年の女性が立っている。向こうはボクを見知っている

ようで，
「ヒロミさんですね」
　と声をかけられた。
「はい。でも，どなた様でしょうか？　ボクには面識がないのですが」
「覚えていなくても仕方ないわ。ほんの2～3回しか会ったことはないから。あなたの叔母よ。と言っても，もちろんあなたを5年間育ててくれたミユキさんではなくて，父方の叔母，あなたのお父さんの妹」
　ああ，それで納得した。ボクの両親は父方の親戚とはほとんどつきあいがなかった。だから，父方の叔母を覚えていなくても不思議じゃない。でも，それならどうして，そんな縁の薄い叔母がボクにわざわざ会いに来たんだろう？　まさか，ボクが有名人になったから？
「お兄さん，あなたにとっては伯父に当たる人のことで話したいことがあるの」
「伯父？」
「そう。あなたのお父さんのお兄さん。あいつを横領罪で告発しようと思うの。それで，告訴状に署名捺印してほしいの」
「横領罪で告訴？　署名捺印？」
　ボクは訳が分からなかった。

「こういうことなのよ」

と，叔母は自分が用意した告訴状を読ませてくれた。そこには，17年前の事故でボクの両親と姉が死んだこと。両親が子供のために契約しておいた生命保険の保険金と，事故を起こしたタンクローリーを保有する会社から支払われた賠償金が唯一の受取人であるボクの銀行口座に振込まれたこと。当時，ボクが12歳の子供であったことをよいことに，親戚の中で一番発言力の大きかった伯父がその通帳と印鑑を預かったこと。そして，そのお金を自分が運営する医療法人に勝手に貸し付けていることが記載されている。

ボクは，思い出した。確かに，両親と姉が死んですぐ，伯父といわれる人に連れられて銀行に行き，通帳を作った。ただそれだけ。その後のことは何も覚えていない。通帳のことさえ忘れていた。伯父のことさえ，あの時は「威張りくさったいやな人」と思ったけど，そう思えばこそ，さっさと忘れようと思い，実際，今の今まで忘れていた。

こんな伯父への気持ちとは別に，ボクは叔母が用意した告訴状を丁寧に読み返した。

「叔母さん，これには『貸し付けた』と書いてあって，『奪った』とは書いてないよね。実際に貸し付けたのなら，横領にはならないよ。ただ，期限が来たら返すように言えばいいだけのことでしょう」

「あいつがそんなに素直に要求に応じたりしないわよ。あいつがどんな人間か，わたし

がよく知ってるんだから」

　それから，彼女は自分の兄の悪口を述べ立てた。

「ほんとうにいやな奴なの。自分が世界で一番偉いと思ってる。田舎の医療法人の理事長くらいで。特にわたしは，一族の中で一人だけ，医者にもならず，医者と結婚もしなかったから，人間のくずみたいに思ってる。自分だってたかが田舎の私立の医学部出ただけなのに。ヒロミさんの方がずっと偉いわよ。国立の医学部出てんだから」

「はあ・・・・」

　ここまで露骨に学歴で人を差別されると，怒る気にもならない。それにしても，この叔母さんも相当な人だな。両親が父方の親戚と付き合いを絶っていた気持ちがよく分かる。どうやら，この叔母さんという人は，ボクへの親切心のためでなく，自分の恨みを晴らすためにボクを利用しようとしているらしい。それならばなおさら，この話にはおいそれと乗れない。伯父がいやな人だというのは，ぼくも同感だけど・・・・。

「刑事告訴というのは，重大なことだから，やるべきことをやってからの方がいいですよ。まず，返還を求めて，それを拒否するとか，そもそも貸し付けの事実そのものを否定するとか，そういうことになってからのことです。まず，手順として伯父に返還を求めるのが筋でしょう」

　叔母さんはいかにも残念そうな顔をした。

「ヒロミさんがそう言うのなら，仕方ないけど・・・ちゃんと文書で請求するのよ。電話とかじゃだめ。手紙よ。ここでの仕事が終わって東京に戻ったら，すぐに手紙を書きなさい」

　と言って，叔母さんは伯父の住所を教えてくれた。

「内容証明，受取証明付きの手紙にするのよ。『そんなもの受け取っていない』なんて言わせないために。なんたって，1億を超えるお金なんだから」

「そんな大金なんですか?」

「当たり前でしょう。あなたのお父さんとお母さん，2人分の生命保険金と，お姉さんも入れた3人分の交通事故の賠償金でしょう，それくらいにはなるわよ。ともかく，なるべく早く手紙を書くのよ」

　叔母さんという人は言うことだけ言うと帰って行った。

　部屋に戻ると佐為が

《ロミー，事情を説明してくれますか?　話したくないなら無理にとは申しませんが》

「話してもいいよ」

　と言って，ボクは話し始めた。家にタンクローリーが突っ込んで一瞬のうちに家が火に包まれたこと。ボクだけ散歩に出かけていたから助かったこと。両親は子供のために生命保険に入っていたから保険金が支払われ，タンクローリーを保有する運送会社か

らも賠償金が支払われ，ただ一人生き残ったボクが受取人だったこと。まだ子供だから伯父が管理することになったこと。

《でも，ロミーはその伯父のところで暮らしたのではないんですよね？》

「うん。ボクは叔母さん，母の妹に当たる人のところで暮らした。今日行ってきたあの辺にあった。1階が飲み屋で2階が住まいになっていた小さな家」

《飲み屋？》

「うん。楽しかったよ。叔母さんもお客さんたちもボクをかわいがってくれた」

《そうですか・・・・》

佐為は複雑な表情をしている。

ここでとりあえず話は終わり。ボクは窓から外の景色を見る。中州にひしめくネオンサイン。その上には，ほとんど星の見えない暗い空。ボクは，伯父のことは頭から追い払って，中州で過ごした5年の日々を思い出す。傍目にはどう見えたか分からないけど，ボクは幸せだった・・・・。それから，また先ほどの話題が意識に戻ってきた。

「ボクが遺産のことを忘れないでいたら，医学部で勉強するのに借金する必要はなかったんだね。その遺産を請求すれば良かったんだから」

《確かに・・・・》

「でも，これで良かったんだよ。借金がなくても，ボクは佐為に出会う運命だったとは思

う。佐為の願いを聞いて碁を打たせてあげたとも思う。でも，賞金目当てにトーナメントに出場させることはなかった。結果として佐為が今のように有名にもならなかった。そして，『3回目，佐為がボクに宿ったのは，ほかの誰でもない藤原佐為の名前を碁の歴史にしっかり刻み込むためなんだ』なんてことを思いつきもしなかったよ。だから，ボクが遺産のことを忘れて借金したのは正解だったんだよ。佐為のために・・・・そして，ボクのためにも」

《ロミー・・・・》

佐為は，両手をボクの肩に置いてボクを見つめる。ボクへの感謝の気持ちと，おそらくは愛着も込められたその眼差しをボクは受け止める。〔ほんとうに，美しい人。いくら見ても見飽きない〕ふとそう思った。

「・・・・それに，もしそのお金を自由に使えたら，ボクはごく普通の子供時代を過ごすことになって，中州で5年，新宿で3年を生きることはなかっただろう。でも，中州と新宿で過ごした歳月はボクにとってかけがえのないものなんだ。その意味でも，お金のことを忘れていた方が良かったんだよ」

佐為は，穏やかな笑みを浮かべる。

《そのように自分の運命を肯定的にとらえるのは，よいことですね》

「ボクもそう思うよ」

ボクたちはしばらく見つめ合った。
「そろそろ寝よう。明日は高永夏（ホ・ヨンハ）との対局だから」
《そうですね。韓国を代表する棋士との対局ですからね》
翌日の朝，対局が設定されているパーティールームに入ると，
「今日はぜったいヨンハの奴をやっつけてくれよ」
と声を掛けられた。ヒカルさんだった。
「あれ，なんでヒカルさんがここにいるの？」
「棋院とテレビ局に頼み込んで解説者にしてもらった。昨日，仕事が終わって最終便で飛んできたんだよ。佐為とヨンハの対局は見逃せないからな。そばで見ていたい。ぜったい勝ってくれよ。コテンパンにしてやってくれ」
ヒカルさん，ふだん以上に気合いが入っている。
「ヒカルさん，どうしたの？　まるで自分が打つみたい」
「うん，あいつとはいろいろ因縁があるんだ」
「まあ，北斗杯のことは聞いてるけど，それはそれとして，解説は公平にやるんだよ」
「なんだか，テレビ局の人みたいなこと言うなあ」
と笑いながらヒカルさんが立ち去るのと入れ替わるように，反対側から写真で見たとおりの美形が歩いてきて，ボクの前で立ち止まった。ボクは会釈して顔を上げる。彼は

かなり背が高いから自然に見上げるようになる。
「ヨンハさんですね」
　とボクは声を掛けた。ついさっき，ヒカルさんが「ヨンハ」と呼んでいたから，ボクもついファーストネームで呼びかけた。ヨンハはボクのあいさつに笑顔で答え，それから指先で軽くボクのまつげに触れて，何か語りかけた。通訳係が戸惑っているけど，ヨンハが「ちゃんと通訳しろ」という仕草をしている。
「わたしもまつげが長いと言われるけど，あなたもかなり長いですね」
　ボクはにっこり笑って
「ありがとう」
　と答えたけど，脇からヒカルさんが飛んできて，
「ヨンハ！　何をしてる？　藤原さんの顔に触るな」
　と怒鳴り込んだ。ボクはヒカルさんをなだめる。
「ヒカルさん，そんなに怒らないで。まつげが長いというのは美人の条件だよ。ボクを美人と褒めてくれたんだ。素直に喜ぼう」
「はあ・・・・」
　ヒカルさんは気の抜けたような声を出した。このやりとりを端で見ていた佐為が笑っている。

《この前の緒方さんの時もそうでしたけど，ロミーにはこの種の盤外戦は通じませんね。それにしても，ヒカル，今日はどうしたんでしょう。そんなに熱くなって・・・》

ヒカルさんとボクのやりとりを通訳係から説明されたヨンハも，ヒカルさんとボクを交互に見ながらおかしそうに笑っている。こんなところが，ヒカルさんの気に障るのかな。ボクは平気だけど。

午前１０時に対局が始まった。塔矢行洋の時と同じく，持ち時間は3時間。途中に打掛けが入る。事前の打ち合わせのとおり，佐為が先番を取る。「たとえネットで不敗無敵であっても無冠の棋士に対して自分が先番を取るわけにはいかない」とヨンハが主張したから。ヒカルさんは「なんて傲慢な奴だ」と言うかもしれないけど，ボクは自国でいくつかのタイトルを保持している者のプライドだと思う。ともあれ，対局開始が告げられると同時に，佐為が盤上の1点を扇で指した。

碁盤がしだいに黒石と白石で覆われていく。佐為はいつものように冴えわたった表情で盤上の戦いを眺めている。

《同じ囲碁でも国ごとに戦い方は違いますね。でも，この打ち筋，見覚えがあります。以前ネット碁で対戦したはずです》

ということは，ＦＪＷＲｓａｉはネット碁で無敗だから，この相手にも勝っているはず。そのせいか，佐為の表情には余裕がうかがえる。ヨンハの方は，先ほどの人を小馬

鹿にしたような表情は影をひそめ，真剣そのものという顔をしている。こっちの顔の方が好感が持てる，などと不謹慎なことをボクはふと思った。
　やがて，打掛け。ヨンハは，フーッと息をつき，それまでの真剣な表情から，にこやかな，でもちょっと人を小馬鹿にしたような表情に戻り，ボクに何か声を掛けた。すぐに通訳係が駆け寄って
「このホテルにはおいしい韓国料理のレストランがあります。よろしければ招待したい」
　と伝えてくれた。
「ボクは，香辛料の効いた料理は苦手なのです」
　と答えたら，
「韓国料理がすべて辛いわけではありません。薄口の，お気に召す料理もありますよ」
　と返答された。そう言われれば，断る理由もない。もともと，食事をする場所のあてはなかったから，素直に招待に応じることにして，彼と一緒に歩きかけたら，ヒカルさんがにらんでいる。
「ヒカルさんも行く?」
　と尋ねたら，ムッとした表情で
「行く」

と答えた。今日のヒカルさんはほんとうに子供っぽい。

途中，ヨンハがなにか話しかける。通訳係がまた困った顔をしている。ヨンハは「通訳しろ」というようなことを言ったのだろう。通訳係が「ヨンハさんの言葉をそのまま伝えます」と前置きして，

「藤原さんの分は招待だからわたしが払うけど，進藤さんの分は進藤さんが自分で払ってください」

と言った。

「そんなの，分かってる！」

と怒ったような声でヒカルさんが答える。ヨンハは笑っている。彼は人をからかうのが趣味なんだな。あまり良い趣味とは言えないけど，そうと分かっていて一々反応するヒカルさんも大人げない。

レストランの席について，日本語とハングルで書かれたメニューを見せながらヨンハは料理を勧めてくれる。

「これが，薄味でお口に合うのでは」

と通訳係が説明する。ボクはそれでいいと返事した。ヨンハがウェイターを呼んで韓国語でオーダーしている。ボクが驚いていると，通訳係が

「このレストランは韓国語が通じるんです」

と説明してくれた。さすが，東京よりソウルに近い都会の一流ホテル・・・・。ほどなく出された料理は確かにボクの好みに合っている。ただ，量が多い。こういう場で，出された料理を残すのは礼儀に反することは分かっているけど，食べきれないものは仕方ない。丁重にお詫びを言った。通訳係から伝えられて，ヨンハは笑みを浮かべて了解のしぐさをし，何か語りかける。

「藤原さんが残したものは，わたしが食べましょう」

と通訳してくれた。それを聞いてヒカルさんが

「オレが食べてあげるよ」

と口を挟んだ。ボクはヒカルさんとヨンハ，両方の顔を見る。〔こんなことで競い合わなくてもいいのに〕と，おかしくなった。

食事を終えて対局会場に引き返す時，ヒカルさんが近寄って耳元でささやいた。

「ヨンハにあまり係わらないでくれよ」

「係わるって，昼食に招かれただけじゃないの」

「まあ，そうだけど・・・・」

ヒカルさんは不服そうな顔をしている。

「それに，ボクが係わるだけで，佐為が係わるわけじゃないんだから」

「まあ，そうだけど・・・・」

ヒカルさんは，今度は不服というより気まずそうな顔をして下を向いた。

打掛けが終わって再開された対局。一度だけ，ヨンハの打ち込みに佐為がハッとした表情になり，長考する場面があった。ボクの手が止まったのを見て，ヨンハはまずボクを見てニヤリと笑い，それから鋭い視線を正面にいるはずの佐為に向けた。佐為は，それまで盤面に向けていた視線を上げ，ヨンハをしっかり見据える。ピリピリした緊張感がただよう。佐為が見えない周りの人たちにもこの緊張感が伝わってるようだ。・・・・やがて，佐為の表情が変わる。厳しい緊張が薄れ，次第にあの笑み，「氷の微笑み」が広がる。そして，扇で盤面の1点を指す。ボクはそこに石を置く。その瞬間，ヨンハが顔をしかめた。

結果は，佐為の3目半勝ち。終局から2～3分，じっと盤面を見つめていたヨンハは，厳しい表情を消して笑顔を作り，立ち上がり，腕を前に差し出し，佐為に握手を求めた。佐為も席から立ち上がり，笑み，「氷の微笑み」ではない，優しさと相手への敬意を込めた笑みを浮かべて，ヨンハの手を握った。この場面はテレビで放映されるだけでなく，新聞や雑誌の紙面を飾った。「受け狙いのパフォーマンス」という批判や，やっかみの声はあったし，ヒカルさんは「まったく，ヨンハはキザな奴だ」と怒っているけど，二人の対局を間近に感じていたボクは，全力を尽くした戦いの後の自然な振る舞いだと思う。

その後のインタビューで感想を求められたヨンハは開口一番
「佐為は間違いなく存在します。あれほどの気迫がわたしの幻覚妄想であるはずがない」
と断言した。ヒカルさんも，この言葉には素直に喜んだ。もっとも，この後にヨンハが
「佐為は，わたしの知る限り，現在の世界で最強の棋士です。世界中の棋士が『打倒佐為』を目指しているでしょう。でも，佐為を最初に盤上で打ち負かすのはわたしです」
と発言した時には，
「何を言ってやがる。佐為を最初に倒すのはオレなんだよ」
と，また怒っていた。
対局，インタビューなど，この日のイベントがすべて終わったのは夜の8時過ぎ。ヨンハたちは「明日も仕事がある」ということで，ソウル行き最終便に乗るため慌ただしくホテルを出て福岡空港に向かった。
「たいへんですね」
と声をかけると
「ソウルまで1時間ちょっとですから」
と通訳係が笑顔で返事した。

恋心

▪Ⅴ　恋心

　ボクたちはホテルに泊まって翌朝，福岡空港に向かった。ボクは，千葉には成田からの方が近いので成田行き，ヒカルさんは羽田行きに乗るけど，出発時間が近いので一緒にホテルを出て，空港のカフェで朝食を摂った。

「ヒカルさん，解説の仕事，ちゃんとこなせました？」

「うん。何とかＮＧは出されなかった」

「よかったね」

「ありがとう」

　ヒカルさんは，ちょっと笑みを見せたけど，すぐに何かを考え込んでいるように，うつむいている。それから，ボクの方に顔を向け，

「藤原さんは正直がモットーだから，オレも正直に話すよ。藤原さん，あんまりほかの人と親しくしないでくれ」

「えっ？・・・・それは，どうして？　というか，ボクは誰ともそんなに親しくしていないよ。ヒカルさんが一番親しい人だよ。・・・・ああ，佐為は別として」

「うん・・・分かっているよ。だから，今のままでいてほしい。藤原さんはルックスもいいし，性格もいいから，その気になればみんなの人気者になる。でも，今のまま，佐為の対局に付き合う以外は，静かに勉強していてほしい」
「まあ，言われなくてもそのつもりだけど・・・どうしたの，急にそんなこと言い出して？」
　ヒカルさんは苦笑いした。
「要するに，焼きもちだよ」
「焼きもち？・・・・」
「ほんと，オレってバカだよな・・・・」
　ヒカルさんはまたうつむいている。佐為はそんなヒカルさんを心配そうな，でも慈しみを込めた表情で見つめている。ボクは率直に自分の気持ちを伝える。
「ボクは，そういうの苦手なんです。焼きもちを焼かれるとか，束縛されるとか・・・・たぶん，今のボクは誰かと恋に落ちることはない。だから，結果としてヒカルさんの願いは叶えてあげられると思う。でも，そのような束縛は嫌いなんです」
「分かるよ。オレだって，自分がそんなこと言われたら，いやだもんな。まして男から言われたら」
「男，女は関係ありません。束縛されるのがいやなんです。束縛するのもいやだし」

「うん。分かってる。藤原さんはそういう人だ。こんなバカバカしい気持ちなんか縁がないよな。何でもスパッと割り切れる」

そう言われると，ボクは何も返す言葉がない。しばらく沈黙が続いたあと，ヒカルさんがおずおずとした口調では話しかけた。

「オレ，こんなバカだけど，これからも今までどおり付き合ってくれるか？　駒込に引っ越したら，ちょくちょく遊びに来てもいいかい？」

「もちろん。いいに決まってるじゃないですか。ヒカルさんはボクの一番親しい人なんだから」

「ありがとう。藤原さん・・・・ほんと，いい人だね」

やがて，ヒカルさんの乗る便の出発時刻が迫った。ヒカルさんは手荷物検査場に歩いて行く。ボクは手を振って見送った。ヒカルさんも手を振っている。そして，手荷物検査場を抜け，搭乗口に向かって歩いて行く。その姿を見送って，ボクは飲み残しのカフェオレのカップを手に取った。ヒカルさんが座っていた椅子に佐為が腰掛けてボクを見ている。

「嫉妬って，どうしてこんなに根深く人の心に埋め込まれているんだろう」

ボクは思わず小さな声で語ってしまった。幸い，周りの誰も聞きとがめはしないけど，佐為には聞かれてしまった。

《どうして，と問われても・・・・》
《別に，答えを期待してるわけではないんだよ。進化心理学では，それなりの説明はされているけど》
　ボクは軽くため息をついた。
《ロミーは・・・・嫉妬などしたことがないとは思いますが，誰かから嫉妬されたこともないのですか?》
《昔はあった・・・・10年くらい前までは，何度かあったよ。だから，嫉妬する人の気持ちが想像できないわけじゃなんだ。そうだけど，それでもやっぱり，ため息が出る》
　佐為はそんなボクをいたわるように見つめる。
《それにしても，なんでヒカルは・・・・》
《ひょっとしたら，ヒカルさんは佐為の身替わりにボクに心を寄せているのかもしれない》
《わたしの身替わりにロミーを?》
《うん・・・・もちろん推測だけどね。人の心を直接見ることはできないから，推測に過ぎないけど・・・・ヒカルさんと佐為の絆はとても深い。ボクと佐為との絆よりずっと深い。ボクだって佐為を好ましく思っているし，佐為もボクに好意を持ってくれているだろう。でもそれは，静かで穏やかな感情だよね。熱い気持ちではない，と思う。でも

ヒカルさんは佐為に熱い思いを抱いているんだよ。今も。そして，たぶん佐為もそうなんだ》

《そんな・・・・ロミーを差し置いて》

《別に，ボクに遠慮しなくていいよ。責めてるわけじゃないから。事実を述べているだけだよ。それに，ボクは今の佐為との関係に満足しているから・・・・ともかく，以前佐為がヒカルさんに宿っていた頃の話を聞いても，今のヒカルさんの佐為に対する態度を見ても，それはよく分かる。今もヒカルさんにとって佐為は特別な人，この世界で唯一の人なんだ。佐為と碁を打つ時，ヒカルさんはとてもいい顔をしてるよ。人生で一番素晴らしい時間を過ごしているような。そして，佐為もそうなんだ。ほかの誰と対局する時よりも，もちろんネット碁を打ってる時よりも，ヒカルさんと対局している時が一番楽しそうだ。そして，ヒカルさんと打ってる時はぜったいにあの氷の微笑みを見せないよ。どんなにうまい手を思いついても，どれほどヒカルさんの手筋を読み切っても，あの凍えるような微笑みは見せないんだ。そんな時でも佐為はヒカルさんに対しては優しい包み込むような笑みを浮かべる》

ボクはちょっと息を継いだ。話してて，ヒカルさんのことが切なくなった。

《でも，それほどお互いに熱い愛着を抱き合っていても，ヒカルさんは佐為が見えない，佐為の声が聞こえない。辛いと思うよ。ヒカルさんは佐為への思いをボクに向けてい

るのかもしれない。ボクに向けようとしている，ボクに向けたつもりでいるのかもしれない。ボクは，見えるし，声も聞こえるから，少しは辛さが減るのかも》
《ヒカルの気持ちは，分からなくもないのですが，それではロミーが困るでしょう》
《まあ，困ると言えば，困るけど・・・・これくらいなら許容範囲だよ。ヒカルさんはボクにとっても大切な人だから，これくらいはがまんしてもいい。それに，駒込に引っ越せば，今よりひんぱんに佐為に会いに来れるから，ヒカルさんの気持ちも変わるかも》
《そうだと，いいですね》
　佐為は，期待と少しばかりの憂いが入り交じったような表情になった。ボクも，同じような表情だったかもしれない。
《そろそろ，ボクたちも出発時刻だよ。行こう》
　手荷物検査を終え，搭乗口で待つ間，佐為がボクに話しかけた。
《ヒカルもアキラも言ってましたが，ロミーはほんとうに優しい》
《いや，ボクは・・・・》
　と言いかけたボクを制止して佐為は話を続ける。
《ロミーは心と頭を切り離して考えますが，それは違っていると思いますよ。良き心には明晰な頭脳が必要なんです。たとえば，いくら優しい善意を持ちあわせていても，相手の事情を理解し，相手が何を求め何を嫌っているかを正確に分からなければ，ほんと

うに相手の役に立つことをして上げられないでしょう。相手が嫌っていることを善意でしてあげたとしても，それは迷惑でしかないのだから。ほかのいろんな場面でも同じですよ。相手の事情，周りの状況を正しく認識する分別があってこそ，優しい振る舞いができるんです。そのような分別に裏付けられて相手のために振る舞うのが「優しい」ということなのです。ロミーはもっと自信を持っていいのですよ》

《ありがとう》

ボクは佐為に微笑みかけた。

2月も後半になると大学の講義は終わる。ボクは2つの雑用を手早く片付けることにした。1つは，遺産に係わること。伯父宛に，ボクの遺産について問い合わせる手紙を，叔母さんのアドバイスに従い内容証明受取証明付きの手紙で通知した。すぐに返事が来た。ボクの遺産は伯父が責任をもって管理してきたこと，低金利時代に預金として寝かせておくよりも有利な運用として伯父が理事長を務める医療法人に貸し付けていること，3年の金銭賃貸借契約の期限が来るたびに借換えを行なっていること，現在の金銭賃貸借契約の期限は来年3月末であることが，丁寧な，だけど自分たちの行為の合法性を強調するような文面で説明されていた。ボクは，金銭賃貸借契約の契約書をボクに送ることと，来年3月には借換えではなく償還を求めることを伝えた。ほどなくして，金銭賃貸借契約書が書留郵便で送られてきた。ちゃんとボクの署名捺印がある。有

印私文書偽造として罪に問える行為だけど，刑事告訴など事を荒立てることはしない。ただ，この点を指摘する手紙を書き送った。これで一件落着，なのだろう。

もう1つの雑用は都内，目安としては駒込近辺での部屋探し，と思っていたら，また別の雑用が舞い込んだ。いや，これを「雑用」と言うのは失礼かも。オープン碁トーナメントの事務局からシード棋士としての参加を打診された。佐為と，ネット碁ではなく直接に対局したいと希望する人はプロ，アマを問わず多いから，ぜひ参加してほしいとの要請。

「できるだけ多くの人に佐為と対局させたいのなら，シードじゃなくて，地区予選から参加する方がいいじゃない？」

とボクが問いかけると，佐為は笑って答えた。

《理屈の上ではそうなりますが，主催者としては，参加を乞うにはシード棋士として遇するのが礼儀だと考えたのでしょう》

「そんな気を遣わなくてもいいのにね。でも，佐為としては，どっちがいい？」

《そうですね・・・どんな弱い相手との対局でも，それなりに得るものはあるのですが，それでもやっぱり，神の一手を目指すには強者と打ち合いたいですね》

「それじゃあ，シードを受けよう・・・それにしても，あれからもう1年経ったんだね」

《そうですねえ・・・》

というわけで，これも一件落着して，いよいよ部屋探し。条件としては，なるべく駅に近いこと，日当たりが良すぎないこと，駅まで日陰を歩いて行けること。インターネットで探して見つけた物件を現地確認するため2月の終わり頃，駒込の不動産屋に出向いた。部屋を見て，特に不満はないから，その場で契約し，3月初めに引っ越すことにした。

持ち物が少ないから引っ越しも簡単に終わる。今までの部屋を引き払うのも，新しい部屋を片付けるのも1時間くらいで終わる。片付けが終わり，のんびりカフェオレを飲んでる頃，ヒカルさんがやってきた。

「なんだ，もう終わってたんだ。手伝おうと思ったのに」

「その気持ちだけで，うれしいよ。忙しいんでしょう？」

「まあ，用事を手早く片付けた。ここは市ケ谷の棋院からも近いから，すぐに来れる」

そう答えるヒカルさんは大きな荷物をぶら下げている。

「それ，何？」

「碁盤と碁石だよ。本ガヤを奮発しようかと思ったけど，実家にあるのと同じくらいのにしておいた。こっちの方が部屋で佐為と打つにはなじんでるんだよなあ」

本ガヤと言われてもボクには分からないけど，きっと高級品なんだろう。そんな高級品より，実家にあるような安物と言っては悪いけど，普及品の方がなじんでいるという

ヒカルさんの気持ち，何となく分かる。
「どこに置こうか？」
「使わない時は，ベッドの下の空いてるところに適当に押し込んでおいて。使う時は，床の適当な所に」
「今から，打てるかい？」
「いいよ。今日はきっとそんな展開になると思ってたから」
　さっそく，対局が始まった。ヒカルさんはいつもの「人生で一番素晴らしい時間を過ごしているような」表情を浮かべている。佐為は，ふだんは盤面を見つめているけど，今日は時々視線を挙げてヒカルさんを見ている。そして時おりうなずいている。
《確かに，ロミーの言うとおり，ヒカルはとてもいい顔をしてますね》
《佐為も，ほかの誰と対局する時よりもいい顔をしてるよ》
　この日も順当に佐為の勝ち。〔ヒカルさん，いつ佐為に勝てるようになるのかなあ。ヨンハより先に勝てるかな？〕なんてことを考えていると，ヒカルさんは碁盤をベッドの下にしまっている。
「もう，いいの？」
「うん。これからはちょくちょく来れるから・・・ずっと対局に付き合わせると，藤原さんの勉強の時間がなくなるだろう」

「ありがとう。気を遣ってくれて」
「うん」
　ヒカルさんは照れたように笑っている。それからちょっとモジモジしていたけど，また話し始めた。
「オレが佐為と打つには，藤原さんの手を借りないといけない。すると，藤原さんが自分の勉強をする時間が減るんだよな。オレはなるべく佐為と一緒にいたいんだけど，藤原さんの邪魔はしたくない。それで思いついたんだけど，この部屋で棋譜の検討をさせてくれないか？」
「棋譜の検討？」
「うん。オレが打った棋譜とか，ほかの誰かの棋譜とかを碁盤に並べて検討するんだ。ここでやれば，そばに佐為を感じられる。佐為にいろんな棋譜を見せることもできる。しかも藤原さんの手間を取らせないだろう」
　ああ，ヒカルさんなりにいろいろ考えてくれてるんだ。それはとてもうれしい，でも・・・・
「ヒカルさん・・・確かにそれなら，ボクの時間が取られることはない。でも，それでも自分の部屋に誰かがいるというのは，気詰まりなんだ。ヒカルさんであっても，毎日ずっとだと息が詰まる。だから，『だめ』とは言わないから，節度を守ってください」

「うん。まあ，そうだよな」
　ヒカルさんはちょっと気を落としたようにうなだれている。
「友達甲斐がないと思うかもしれないね。でも，ボクとしては，これからもずっとヒカルさんと友達でいたいから，こんなことを言うんだよ。ヒカルさんがボクにとってどれほど親しい人であっても，毎日のように入り浸られたら，ボクはきっといやになる。そして『もう来ないでくれ』と言ってしまうかもしれない。そうならないよう・・・・」
「藤原さん，あんたが謝んなくていい。オレがわがまま言ってんだから。約束するよ。あんたの邪魔はしない。気詰まりにさせるようなこともしない。でも，たまになら，いいだろう？」
「もちろんです。『たまに』じゃなくて『ちょくちょく』でいいですよ。・・・・こうしましょう。ヒカルさんが長居して，ボクがいい加減気詰まりになったら『そろそろ帰って』と言います。そうしたら，きりのいいところで切り上げて帰ってください。ボクは変な遠慮はしません。帰ってほしいと思ったら，遠慮なく『帰ってください』と言います。だから，逆に，ボクがそう言わない間は，ヒカルさんは余計な気を遣わずに，ここに居ていいです。こういうルールにしませんか？」
「そうだな。あんたは，はっきりものを言ってくれるから分かりやすくていいよ」
　窓から外を見るとちょうど日が沈んで夕焼けが広がっている頃だった。

「ヒカルさん，一緒に散歩しない？　夕焼け空を眺めてよう」
「夕焼け？・・・・まあ，いいけど」
　ボクたちは部屋を出て2～3分歩いて，線路の上をまたぐ橋にたたずみ，西の空を眺めた。ちょっと先にお隣の巣鴨駅が見え，その向こうに池袋のいくつかの高層ビルが見え，その上に夕焼け空が広がっている。時おり，目の下の線路を電車が行き過ぎる。新月が白い糸の切れ端のように見える。細すぎて，見落としそうなほど。
「ああ，新月が・・・・」
　とボクが指さしたけど，ヒカルさんは
「えっ，どこ？」
　と見つけられないでいる。
「あと10分もしたら空が暗くなって，月が明るく輝くようになるから，そうしたら，はっきり見えるよ」
　そう説明して，ボクはまた夕焼け空を眺める。そして，ヒカルさんに語り始めた。
「ボクは直射日光を浴びてはいけないから，子供の頃から日中は部屋の中にいたけど，今くらいの時間になると外に出てもいいと言われていた。だから，夕焼けの頃に散歩した。いつも姉が付き添ってくれた」
「藤原さん，お姉さんがいるんだ」

ヒカルさんはちょっと驚いている。姉の話はこれまでしたことがなかったから。
「いるんじゃなくて，『いた』んです。ボクが１２歳の時に死んでしまったから」
「そうだったのか・・・・」
「その姉の名前が，ヒカルっていうんです」
「えっ?!」
ヒカルさんはボクをまじまじと見る。ボクはヒカルさんに微笑みかけた。そしてまた正面に顔を向けた。もう新月がオレンジ色に輝いている。
「ヒカルさん，ほら，あそこ。細い月がオレンジ色に輝いているでしょう」
「ほんとうだ。きれいだなあ」
「見ようと思って目を向ければ，美しいものは身の周りにたくさんあるんです。夕焼け空も，月も，星も。空だけじゃなく，地上にも，これからの季節，名も知らない小さな花が道ばたに咲くでしょう。そんな花もよく見ればきれいですよ」
「藤原さんって，不思議な人だね」
「そうですか?」
「すごく理詰めなところがあるのに，そんなふうにロマンチストなんだなあ」
「ロマンチスト?・・・・まあ，ボクは美しいものが好きだというだけです。美しいものが身の周りにあると幸せです。だから，身の周りに美しいものを見つけるようにしてい

る」
「それがロマンチストなんだよ」
「そうですか?・・・・」
まあ，ロマンチストの定義をめぐってここでヒカルさんと議論することもない。
それからちょくちょくヒカルさんは部屋にやってくるようになった。実際に経験すると，ヒカルさんの存在はそれほど気詰まりではない。それでもいい加減長引くと，ボクも一人になりたくなる。それで，「ヒカルさん，もうそろそろ」と声をかけると「ああ，分かった。この棋譜の検討が終わったら帰るよ」と答えてくれる。
引っ越しから半月ほど経った頃，塔矢アキラから「進藤と一緒にうちに遊びに来てくれませんか」とのお誘いがあった。
「ぜひ進藤とボクの対局を佐為に見てほしいんです。そのうち進藤が連れてきてくれるだろうと思って待っていたのですが，ぜんぜんその気配がないので，ボクからお誘いしました」
とのこと。
「何か，夕食を用意しておきます。ボクはこう見えてもけっこう料理はうまいんですよ。藤原さんの好物は何ですか?」
実は，これと言って好物というほどのものはない。

「それを訊かれると困るんです。ボクはぜんぜんグルメじゃないんです。特にこれと言って・・・・トーストとカフェオレがあればそれでいいという人ですから」

塔矢アキラは拍子抜けしたようだ。グルメ趣味の人にとっては，そうだろうなあ・・・・。それはともかく，

「せっかく藤原さん，つまり佐為が来るのなら，ぜひ対局をお願いしたいし，そうなれば，ボクだけ抜け駆けはできないので，進藤も佐為と対局することになる。あわせて3局だと，いくら早打ちでもそれなりの時間が掛かるから，午後のまだ日の高いうちに来ていただかないといけないけど，藤原さんに日差しの中を歩かせては申し訳ないから，車で迎えに来ます」

ということで，塔矢アキラの車に乗って塔矢邸に着いた時，ヒカルさんはまだ来ていなかった。

出された緑茶を飲みながら塔矢アキラと向かい合って座っていると，話しかけられた。

「とても失礼な，というか，立ち入った質問ですが，藤原さんは恋愛経験ありますよね？」

確かに，とても立ち入った質問。よりによって塔矢アキラからそんな質問をされて，ボクは思わず口に含んでいたお茶を吹きそうになった。

「済みません。びっくりさせて」

「いや，まあいいんですけど・・・そりゃあ，恋の1つや2つは経験ありますけど，急にどうしたんですか，そんな質問？」
　彼は，ボクの質問には答えず，自分の話を続ける。
「初めて藤原さんがうちに来た時，母の手料理を食べながら，『男とか女とか，そんなことふだんぜんぜん意識しないんです』と話したことがあったでしょう」
「うん，あったね」
「藤原さんの恋の相手は男だったんですか，それとも女？」
　これもまた，ずいぶんぶしつけな質問。
「ボクが恋した相手は，今までのところ，女の人だけです」
「それはどうして？」
「ボクの美意識からすると，男より女の方が美しいからです。あの柔らかな体の曲線，筋肉の付きすぎていない柔らかい体の感触，滑らかな肌。顔も，男顔より女顔の方がボクの好みだし」
「ふーん」
　塔矢さんは考え込んでいる。塔矢さん，男に恋しているのかな？　その相手はひょっとしてヒカルさん？・・・・
「ただし，もしこれまで出会ったことのないような超絶的に美しい男の人に出会ったら，

その人を好きになるかもしれない」
　そう言ってボクは，真横にいる佐為には分からないように，でも正面にいる塔矢さんには分かるように，目配せした。塔矢さんはちょっと考えて，その目配せの意味に気づいた。佐為は勘づいていないようだ。
「そうですか・・・・藤原さんは，男に恋することに抵抗はないんですよね」
「もちろん。その人がほんとうに美しい人なら，そして性格も良くて，知性・感性もボクと響き合う人なら」
「そうですよね。藤原さんは分かってくれる。ほかの人たちは・・・・」
「ほかの人たちの噂の種になるのが気になりますか？」
「・・・・それは，やはり，気になります」
「塔矢さんが誰か男の人を好きだとして，その人の存在と，ほかの人たちの無責任な噂話と，どっちが重い？」
「そんなこと，決まってるじゃないですか！」
「それなら，何も迷うことはないでしょう。まあ，自分から触れて回る必要はありませんが，知られるのを恐れる必要もありません・・・・塔矢さん，自分の選択に自信を持ってください。〝Ｈｏｎｅｓｔｙ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｅｓｔ　ｐｏｌｉｃｙ．〟ですよ」
　塔矢さんは唇をかみしめた。ちょうどこの時，玄関から「塔矢，いるか？」という声

が聞こえてきて，この話は中断された。

それから，まず塔矢アキラｖｓ佐為，そしてヒカルｖｓ佐為が対局し，順当に佐為が勝った。

そして，ヒカルさんと塔矢アキラの対局が始まった。二人とも顔つきが変わる。でも・・・ボクは驚いた。ヒカルさん，佐為と打つ時と同じような表情になっている。碁を打つのが楽しくてたまらないという表情。これまでインターネットで見たヒカルさんの棋戦の映像でほかの棋士を相手にしている時の表情とはぜんぜん違う。そして，塔矢アキラもそうなんだ。ふだんの棋戦とも，佐為と対局した時とも違う，心から碁を打つのを楽しんでいるような表情。ヒカルさんにとって塔矢アキラと打つのが，塔矢アキラにとってヒカルさんと打つのが，何より楽しいということが伝わってくる。ボクは佐為に話しかけようと横を見て，言葉を飲み込んだ。佐為もまた，二人の対局に夢中になっている。そしてボクは，３人の表情を眺めて時を過ごした。対局が進み，盤面の状況が変化するにつれ，碁を打つのを楽しんでいる二人の表情も微妙に変化する。そして局面の推移を見守る佐為の表情も様々に変化する。

対局も終わりに近づく頃，佐為が

《どうやら，ヒカルの勝ちのようです》

とつぶやいた。

《とは言え，二人の力は互角ですね。お互い，勝ったり負けたりを繰り返しているのでしょう》
《ほんとうに，いいライバルだね。でも，それだけじゃないような・・・・》
《それだけじゃない？》
《うん・・・・後で話すね》
　こんな会話をしているうちに，二人の対局は終わった。佐為の予想どおり，ヒカルさんの勝ち。と言っても1目半という僅差の勝利。それでも勝ちは勝ち，ヒカルさんは喜んでいる。
「やったー！　佐為の前でいいかっこできたぞ」
　塔矢アキラは悔しさを隠さない。
「今日はキミに一歩後れを取ったが，ふだんはボクの方が勝ってるからな」
「何言ってる。五分五分じゃないか」
「いや，ボクの勝率が５５％くらいのはずだ」
「オマエ，いちいち計算してるのか？」
　ボクは思わず笑ってしまった。佐為も笑っている。
「もう，ヒカルさんも塔矢さんも。佐為が笑ってますよ」
　というボクの言葉に，二人はバツの悪そうな顔をした。

「検討は，別の機会にしようか?」
「そうだな・・・・」
　ヒカルさんも素直にうなずいている。
「どうしたの?」
「いや，その・・・・」
　ヒカルさんは口ごもっている。塔矢アキラが説明する。
「ボクたち検討は『子供のけんか』みたいになるんです。さすがに藤原さんや佐為にそれを見せるのは・・・・」
　ボクは，「子供のけんか」のような二人の検討を見たい気もするけど，意地悪なことは言わないことにした。それにしても，対局後の検討が激して「子供のけんか」のようになってしまうのは，それだけ二人が互いを特別な存在と思い，深い愛着を抱きあっているからだろう。対局中の二人の表情を思い浮かべながら，ボクはこんなふうに想像した。つまり，塔矢アキラがヒカルさんを好きなだけでなく，ヒカルさんも塔矢アキラを好きなんだ。
　それから，塔矢アキラの手料理をごちそうになった。確かに，自分で「けっこう料理はうまい」というだけのことはある。お母さんに仕込まれているのかな?
　夕食を終え，二人はまだこれから夜が更けるまで対局をするのだけど，ボクはここで

塔矢邸を辞することにした。この時，一悶着あった。
「塔矢さん，今日は夕食に招いていただき，そしてヒカルさんとの対局も見せていただき，ありがとうございました」
「またいつでも来てください。藤原さんと佐為，それに進藤なら，いつでも大歓迎ですよ」
「ありがとう」
　と言ってボクが外に出ようとすると。塔矢アキラが
「藤原さん，お部屋まで送ります」
　と申し出た。それを聞いてヒカルさんが
「オレが送ってくよ」
　と言い出した。ボクは，
「お気持ちはうれしいけど，一人で帰れますよ。道順は覚えてるし，歩いて１０分くらいだし」
　と答えたけど，
「だめだよ。藤原さんみたいにきれいな人がこの時間に一人で外を歩いちゃダメだよ。オレが送る」
　とヒカルさんは言い張る。そんなヒカルさんを塔矢アキラはにらみつけている。〔あ

あ，これがもうちょっと激しくなると「子供のけんか」になるんだ」と思って，ボクはおかしくなったけど，ボクが理由で「子供のけんか」を始められるのも困る。

「まあまあ，心配していただいてありがとうございます。それなら二人に送っていただきましょうか」

我ながら名案だと思う。二人はうなずいて，ボクを間に挟んで歩き出した。佐為は仕方ないから後ろからついて歩く。振り返ると，苦笑いしている。ボクより背の高い二人に左右を挟まれて歩いて，ボクは，送ってもらっている，というより，護送されているような気分だった。

二人は，ボクを部屋まで送り届けると，塔矢邸に戻っていった。

《ヒカルたちはまた対局を続けるのでしょうね》

「そうだね。ほんとうに仲がいいね」

《お互い，意地っ張りですけどね》

「意地を張りながら，お互い惹かれあっている」

《生涯のライバルどうしですからね》

「それだけかな？」

《・・・・？》

「ボクは，誰かとライバルという関係になったことがないから，確定的なことは言えない

けど，あの二人はただのライバルの関係を越えていると思うよ。佐為，気づいてた？ヒカルさんは塔矢アキラと打つ時，佐為と打つ時と同じ表情になるんだ。ヒカルさんにとって塔矢アキラは佐為と同じくらい大切な人，同じくらい深い愛着を抱いている相手なんだよ。塔矢アキラも，今日の対局では，これまで見たどの対局でも，佐為との対局でも見せなかった表情だったよ。ほんとうに，ヒカルさんとの対局を心から楽しんでいるような。そしてそれだけじゃない。この世で一番大切な人を見るような眼差しだったよ」

《ライバルを越える関係というと》

「親友，いやむしろ恋人かな？」

《恋人!?・・・・男どうしで？》

「そんなに驚かなくてもいいでしょう。平安時代にも江戸時代にも，衆道や男色はありふれていたんじゃない？　井原西鶴の『男色大鑑―本朝若風俗』なんて本が普通に読まれていたくらいだから」

《そうですが・・・・》

「今の時代にも，そんなに珍しいことではないんだよ」

《・・・・ヒカルとアキラが良きライバル，良き友となることはわたしの願いでしたが，恋心を抱くとは・・・・》

「困る?」
《・・・・困りはしませんが・・・・》
「佐為，ボクたちだけでも二人を祝福してあげようよ」
《・・・・そうですね・・・・》
佐為はちょっと考え込んでから答えた。
それからまた2週間ほどして，塔矢アキラがボクを車で迎えに来た。塔矢アキラｖｓ佐為，ヒカルさんｖｓ佐為の対局を塔矢邸で行なうため。思っていたより早い時間にドアホンが鳴り，彼が現れたので，ボクがすぐに出かけようとすると，
「ちょっとだけ，ここでご相談したいことがあるのです。部屋に入ってよろしいでしょうか?」
と問われた。拒否する理由はないけど，彼の車が心配。
「駐車禁止になってませんか?」
「すぐそばのコインパーキングに入れてます」
ということなので，部屋に入ってもらった。食事にも勉強にも読書にも使う長テーブルに並べた2つの椅子のうちの1つに塔矢アキラを座らせ，ボクはその隣に座る。
「ほんとうは，これから話すことを藤原さんに相談するのは筋違いなのかもしれませんが，ボクの身の周りにこういうことを相談できるのは藤原さんしか思いつかないものだ

から」

　と言って，塔矢アキラはうつむいて，しばらく黙り込んでいる。ボクは，彼が話しだすまで待っている。彼が目を上げ，ボクと視線が合った。

「すみません。相談があるといって部屋に上げてもらったのに黙り込んでいて。何をどう話したら良いか分からなくて・・・・」

「思いつくことを，思いつくままに話してくれればいいんです。『まとまりがない』とか，『筋が通っていない』とか，『支離滅裂』とか，そんな余計なこと考えないで，思いつくことを，思いつくままに話せばいいんですよ」

　これは，臨床研修で問診の際に患者に話しかける言葉として習った。この言葉を聞いて，しばらく考え込んで，

「この前，藤原さんは『恋の1つや2つは経験している』と話してくれましたが，仮に，藤原さんが誰かに恋して，でもその誰かが藤原さんとは違う別の人に心を寄せているとしましょう。藤原さんは，こんな状況で何を考えて何をしますか?」

　と尋ねた。ボクは，〔ああ，嫉妬に係わるお話なのか〕と心の中でつぶやいた。

「そういう状況で，ボクはその『別の人』のことは放っておいて，恋しい相手に確認します。『ボクと一緒にいて楽しいか，ボクと過ごす時間は幸せか』って。もし，楽しくもないし，幸せでもないと答えられたら，ボクは身を引きます。相手に辛い思い，いやな思

いをさせてまで付き合いたくはないから」
「楽しい，幸せだって答えてくれたら?」
「それなら，それで十分。ほかに何も望むことはありませんよ。だって，相思相愛ってことでしょう。ボクはその人を愛している。その人もボクと一緒にいて楽しい，幸せと言ってくれる。ほかに何を望むんですか?」
　塔矢さんはボクの返事に驚いている。
「・・・・でも，それじゃあ，『別の人』のことは放っといていいんですか?」
「いいんです。だって，ボクと一緒にいない時に恋人が別の人と幸せな時間を過ごしているからといって，ボクが恋人と過ごす時間の幸せが減るわけではないから。ボクが恋人と過ごす時間の幸せはそれだけで充実，充足しています。ほかの出来事に左右されません。と言うか，ほかの出来事に左右されてしまうとしたら，ボクの恋人への思いは，たかだかその程度のものということでしょう」
　塔矢アキラは考え込んでいる。脇を見ると，そんな彼とボクを佐為が興味深げに見守っている。
「でも，恋人が別の人も愛しているとしたら，ボクに向ける愛がそれだけ減るでしょう」
「塔矢さんは，『愛情量一定の法則』みたいなものを想定してるんですね。人の心の中にある愛情の量は一定で，その一部を別の人に振り向けたら，自分に向けられる分が減る

みたいな発想」
「間違ってますか?」
「間違っていると断定はできないけど，正しいと断定もできません。検証しようがないから。そんな発想もあり得るかもしれない。でも，別の発想もあり得ます」
「どんな発想?」
「人の心の中にある愛情の量はその時々の状況によって増えたり減ったりする。たとえば，誰かを愛するという経験そのものが，その人の恋愛感受性みたいなものを高めて，その人の愛情の量を増やすかもしれない」
「そんな都合のいい話・・・・」
　塔矢アキラは皮肉っぽく笑う。ボクは1つのたとえ話を思いついた。
「たとえば，碁への情熱の量は一定で，それを若いうちに使い果たしたら，年を取ってから碁への情熱が枯れてしまう，と主張されたら，塔矢さんはどう思う?　賛成する?」
「それは・・・・」
　彼は返事に詰まった。
「『碁を打てば打つほど，碁がおもしろくなるんです。碁を打つことで碁への情熱がますます高まるんです』って，反論したくならない?」
「人への愛情も同じだと?」

「違うという証明はありません」
「同じだという証明もないでしょう」
　塔矢アキラは口調がちょっと荒々しい。
「もちろん，どちらの証明もありません。この問題を研究する心理学者なら，証明の方法をいろいろ考えるでしょう。でも，ボクたち素人は，自分を幸せにする発想を信じればいいんじゃないでしょうか」
「ずいぶん，都合がいいですね」
「そうかもしれませんが，ボクから見ると，どちらも確実な証明のない２つの仮説を前にして，わざわざ自分やほかの人たちを不幸にする仮説に固執する態度の方が不思議です。なぜ，もっと素直に幸せになろうとしないのですか？」
　塔矢アキラはムッとしている。確かに，こんなふうに理詰めで迫られると，人は愉快ではない。
「正直に話せば，ボクだってこんなふうに理詰めに考えて，『別の人のことを放っておこう』と決めたんじゃありません。もっと単純で直感的な理由です。つまり，嫉妬はエレガントじゃないからです」
「エレガントじゃない？」
「はい。ボクの美意識に従えば，嫉妬はエレガントじゃない。とてもみっともない振る

舞いです。そんな振る舞いはしたくないから，しないよう努力しました」
　塔矢アキラはムッとした表情から気落ちした表情に変わった。
「それはボクも認めます。嫉妬はみっともないです・・・・藤原さんは，どうしてそんなふうに『嫉妬はエレガントじゃない』とあっさり切り捨てることができたんですか？」
「ボクは・・・・」
　そう問われて，ボクは思い出を探った。初めての恋，いや違う，2度目の恋，ボクが好きになった人には恋人がいた。
「ボクは，自然にそうできてしまった。その人がボクと一緒にいる時，ボクを愛してくれるならそれで十分と思っていた。周りから『嫉妬しないの？』と訊かれて，逆に不思議だった。なぜ，嫉妬しないといけないのか。だってボクは，その人と一緒にいる時にその人がボクだけを見ていてくれるなら，それで幸せだったから」
　塔矢アキラは「信じられない」という顔をしている。
「それから何年かして，逆の立場になった。ある人がボクを好きになり，ボクもその人を好きだけど，でもほかにも好きな人がいる。その時ボクはその人に『あなたと一緒にいる時は，身も心もあなたに捧げます。だから，一緒にいない時は自由にさせてください』とお願いしました」
「それって，相手から見ればずいぶん身勝手な言い分だと思うけど」

「そうかもしれません。でも，ボクは何より束縛されるのがいやだった。自由はボクにとってかけがえのないものだから」
「それで，相手はその願いを・・・・」
「聞き入れてくれました」
「ほんとう?!」
「ほんとうです」
「・・・・それは，きっと・・・・藤原さんが，そんな願いを聞いてでも一緒にいたいと思わせるほど魅力的だったから・・・・」
　そう言って塔矢アキラは黙り込んだ。ボクもこれ以上言葉が続かない。ボクは時計を見る。まだ時間はある。それなら，ボクの方から本題に切り込むか・・・・。
「ボクのことではなくて，塔矢さんのことを話しましょう。塔矢さんは誰かに恋していて，でもその誰かが塔矢さんとは違う別の人に心を寄せている，少なくとも塔矢さんはそう信じている」
　ここで一息置いて，ボクは塔矢アキラを見る。彼もボクを見ている。
「塔矢さんが恋している相手は進藤ヒカルですね?」
「・・・・恋してる，というのは・・・・」
「恋という言い方に抵抗があるのなら，別の言い方にしてもいいですよ。塔矢さんはヒ

カルさんと一緒にいるのが楽しい，その時間が一番幸せだと感じている。そして，ヒカルさんの行動や言葉が気になって仕方ない」

「・・・・まあ，そのとおりです・・・・でも，どうして分かったんですか?」

「この前の対局を見ていて，分かりました。塔矢さんとヒカルさんの対局です。あの時，塔矢さんはほんとうにいい顔してました。人生で一番幸せな時間を過ごしているような，ヒカルさんと対局している時が一番楽しいというような」

「そんなに，見え見えでしたか」

「まあ，ボクはお二人の表情を一番見やすい特等席で眺めていたから」

　ボクは笑みを浮かべ，それからまた真面目な顔に戻った。

「そして，ヒカルさんが心を寄せていると塔矢さんが信じている『別の人』は佐為ですね?」

「それも，顔に出てましたか?」

「いえ，これは推測，状況に基づく推測です。確かに，ヒカルさんは佐為に深い愛着を抱いている。二人の間にはほかの人間が立ち入れない強い絆がありますから」

　塔矢アキラは悔しそうに唇を噛む。

「塔矢さん，二人を引き離したい?　ヒカルさんから佐為を取り上げたい?」

　彼は黙ってうつむく。

「もしそうなったら，ヒカルさんはとても悲しむでしょう」
彼は黙っている。ボクはもう一歩踏み込んだ。
「塔矢さんは先ほど，ボクの経験を聞いて『そんな願いを聞いてでも一緒にいたいと思わせるほど魅力的だったから』と言ったけど，塔矢さんにとってヒカルさんはどれほど魅力的なの？」
彼はなお黙ったまま唇をかみしめている。それで，ボクが話し続ける。
「『好き』という言葉にはいろんな意味があるね。『あなたのために命を捧げます』とか『わたしを差し置いてもあなたに幸せになってほしい』というような意味にもなるし，『オマエを独占したい，オマエを束縛したい，オマエを支配したい，オマエのすべてを奪い尽くしたい』という意味にもなる」
「ずいぶん手厳しいこと言いますね」
「そういう意味で『好き』という言葉を使う人もいるということです。でも，ボクは，自分の幸せより以上に相手の幸せを願う，そんな意味で『好き』という言葉を使ってほしい」
塔矢アキラは，今度はちょっと悲しげな表情でうつむいている。ボクはその肩にそっと手を置いた。
「感情の奴隷となって，感情に溺れ，感情に流されるままでは，不幸に行き着くだけだと

思いませんか？」
　彼は顔を上げ，ボクと目を合わせる。ボクは微笑みかける。
「まあ，ボクが塔矢さんの立場なら，そんな佐為のことよりも何よりもまず，ヒカルさんの気持ちを確かめますけどね。相手が自分をどう思っているか分からないのに，あれこれ思い悩んでも仕方ないから。塔矢さんとしては，今さら確かめるまでもないと信じているかもしれないけど，でもやっぱり，ご自分で確かめ，本人の口から答えてもらう方がうれしいですよ」
　ボクは笑みを浮かべた。彼は唇をかみしめながらも，勝ち気な表情になっている。
〔あっ，それ，いい顔〕
「そろそろ出かける時間でしょう。ひょっとしたら，もうヒカルさんが塔矢さんの家でボクたちを待っているかも」
　そう言ってボクが出かけようとしたら，
「藤原さんは，ここで待っていてください。ボクが車をコインパーキングからマンションの前まで持ってきます。日差しの中をコインパーキングまで歩かせるわけにはいきません」
　と言って，一人で出て行った。
《こんな時にも配慮を忘れないとは，さすがアキラ》

佐為が感心している。それを聞いて，ボクは笑った。
ほどなく，塔矢アキラが迎えに来た。ボクたちはマンションの前に停めてある車に乗った。車ならほんの2～3分の距離。車を発進させると，彼がボクに問うた。
「藤原さんは，『好き，にはいろんな意味がある』と言ったけど，その人と一緒にいるのが楽しい，ほかの誰よりその人と一緒にいるのが楽しいと感じるのは，『好き』の意味に含まれますよね？」
「それこそ，一番基本的な意味じゃないの？　一緒にいて楽しくない人を『好き』とは言わないでしょう」
「そうですよね」
塔矢邸に着き，車を降りようとする時，ボクは塔矢アキラに話しかけた。
「今日の話は塔矢さんの心を乱したかもしれません。でも，動揺を対局に引きずらないでくださいね。白熱した対局を期待していますから」
「もちろんです」
と答えた塔矢アキラの顔はしっかり碁打ちの顔になっていた。
ヒカルさんがやって来るのを待つ間，佐為がボクに語りかけた。
《ロミーがあれほど深くアキラの心に踏み込むとは思ってませんでした》
《外科医がメスで患者の体を切り開く時って，こんな気持ちなのかもしれないね》

佐為がうなずいている。
《でも，外科医は，それが必要だと判断したからメスを持つんだよ。それともう1つ。患者が手術に耐えられると信じているから手術に踏み切るんだよ》
《ロミーはアキラが耐えられると信じていた？》
《信じていたよ》
佐為がまたうなずいた。
ヒカルさんがやって来た。そして，まず塔矢アキラｖｓ佐為の対局が始まった。対局が始まって間もない頃，佐為がボクに話しかけた。
《ロミー，アキラにしっかり発破を掛けてくれましたね。前回に比べて気迫が違います。タイトル戦なみの意気込みですよ》
《悪かった？》
《とんでもない。望むところです》
と言って佐為は微笑んだ。
途中，佐為の余裕の笑みが消えることが何度かあった。それでも結局は佐為が1目半差で勝ち。
「すげえな，アキラ。この4ヶ月で強くなったなあ。佐為を1目半差まで追い詰めるとは」

と，ヒカルさんが感心したように語りかける。塔矢アキラはにっこり笑った。心からうれしそう。

「じゃあ，次はオレの番だ」

ヒカルさんも，塔矢アキラに触発されたのか，ふだん以上に強い。最終的に1目半差。

「お二人，ほんとうに仲がいい。どちらも1目半差とは」

というボクの言葉に，ヒカルさんは照れて笑い，塔矢アキラはちょっと気まずそうに笑った。この日，ボクは夕食を摂らずここで帰った。二人はきっとこれから，夕食をはさんで夜更けまで打ち合うのだろう。

塔矢邸からボクの部屋に戻るには，山手線の線路の上に架かる橋を渡る。日は沈んだけど，まだ暗くなってはない薄暮（はくぼ）の頃，ボクは橋の上で立ち止まり，夕暮れ時の空を眺めた。この空を眺めるために，ボクは塔矢邸での夕食を辞したのだ。ヒカルさんと一緒にここに佇んだのはほぼ1ヶ月前。あの時よりちょっと幅の広い三日月が見える。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

（ここから第三者視点）

ヒカルとアキラは夜更けまで打ち合った。日付が変わってしばらくして，さすがに二

人も疲れた。その日何度目か対局が終わり，
「今日はこれで終わりにしようか？」
「そうだね・・・・進藤，泊まっていくか？」
「ああ，今日は泊めてもらおうかな」
　そう言ってヒカルが立ち上がりかけた時，アキラが問いかけた。
「進藤，キミはボクと一緒にいて楽しいか？」
「えっ？」
　ヒカルは，思ってもいなかった問いかけに驚いた。
「何だよ，急に・・・・」
「いや，まあ・・・・ともかく答えてくれないか？　キミの答えを聞きたいんだ」
「・・・・そりゃあ，楽しいさ。楽しくなきゃ，こんな時間まで一緒にいないだろう」
「ありがとう。それを聞けてうれしいよ」
　アキラは笑みを浮かべた。ヒカルは，かえって気味が悪い。
「オマエ，今日はいったいどうしたんだ？」
「いや，つまり・・・・ボクはキミと碁を打つのがとても楽しい。ほかの何より楽しい。ほかの誰といるより楽しい。だから，キミも同じ気持ちでいてくれるならうれしいと思って・・・・」

「やっぱり，オマエ，今日はちょっと変だな・・・・まあ，いいけど・・・・オレはオマエと打つのが楽しい。それは間違いないから・・・・佐為と打つのと同じくらい楽しい」

佐為の名を聞いて，アキラの表情から笑みが消えた。

「佐為と打つのと，ボクと打つのと，どっちが楽しい？」

「そんなの，比べられないよ。オマエと佐為とは，比べようがないよ・・・・オマエは生涯のライバルだ」

「佐為はキミの師だね」

「・・・・それだけじゃない。ずっと一緒にいたんだ。２年間，いつも朝起きて夜寝るまで，ずっと一緒だったんだ・・・・」

ヒカルの声が涙ぐむ。

「それから突然いなくなって。そしてまた戻ってきた。オレのところにじゃないけど・・・・」

ヒカルは悲しげにうつむいた。そんなヒカルをアキラは見つめる。ヒカルの悲しみに心を打たれながら，それでも，ヒカルがそれほどまで佐為を慕っていることに，心おだやかではいられない。

「オレ，藤原さんに嫉妬したんだ」

「藤原さんに嫉妬？」

「だって，毎日ずっと佐為と一緒にいれるじゃないか・・・・馬鹿だよな。オレにとって恩人みたいな人なのに。そんな人に嫉妬なんかして・・・・」
「それで，藤原さんは?」
「オレを許してくれた。オレのこと，理解してくれた。そんな気持ちになるのも仕方ないって。佐為は今でも，藤原さんよりオレに深い愛着を持ってる，佐為とオレとの絆は藤原さんとの絆よりずっと深いとも言ってくれたよ。藤原さんは，嫉妬なんかしないって。嫉妬はエレガントじゃないから。嫉妬はだれも幸せにしないからって」
「同じ事をボクも言われた」
「オマエが?」
「うん。実は，今日，早めに藤原さんを迎えに行って，いろいろ相談したんだ・・・・そしたら，同じ事を言われたよ。嫉妬はエレガントじゃない。嫉妬は自分も含めてだれも幸せにしないって」
「何だか，オレたちって似てるな」
「そうだね」
　二人は，寂しさと悲しさの混じった笑顔を向けあった。
「それに比べて藤原さんはエレガントだよな」
「・・・・確かに・・・・でも，友にするなら・・・・もし，キミか藤原さん，どちらか

一人だけ選べと言われたら，ボクは迷わずキミを選ぶよ」
「ありがとう・・・なんだか今日はオマエ，ずいぶん素直だな」
そう言われてアキラは苦笑いした。
「藤原さんのおかげかな」
「そうかもしれない」
二人は笑顔を向け合った。
／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／

（ここからロミー視点）
明日から東大の講義が始まる。入学するわけではないから，ドキドキはしないけど，それなりの期待はある。そんな気持ちでいる時，北斗通信社の相川さんからメールが届いた。サイトの北斗杯関連のページに載せるボクの写真を撮りたいから都合の良い日時を知らせてほしいとのこと。相川さんがボクの部屋に来て，携帯電話でさっさと撮影するのかと思ったら，プロのカメラマンが撮るとのこと。場所は北斗通信社の本社の会議室と，外の適当な場所を背景にして撮影の予定。〔ずいぶん本格的だな〕と思いながら，１月で２９歳になったボクにとって今年は２０代最後の年だということに気づいた。その記念にプロのカメラマンに写真を撮ってもらってもいいなと思いながら，ボク

の都合の良い日時をいくつか挙げてメールに返信した。そして，佐為に話しかけた。
「ボクは来年で３０歳になるんだよ。子供の頃，１０代の頃，自分が３０歳になるのを想像できなかった。でも，人は生きていれば年を取るんだね。子供の頃は，３０歳ってすごい大人と思えたけど，実際自分がその年に近づいてみると，そんなに変わるものじゃないね」
《わたしも同じような感慨を持ちましたよ。三十路というのは人生の節目のはずなのですが，実際に自分がそれに近づいてみると・・・・》
「佐為は，いくつなの？」
　佐為はフッと笑った。
《単純に計算すれば，１０００歳くらいのはずですが》
　それを聞いて，ボクも笑った。
「幽霊は年を取らないからね」
　それから，ボクは物思いに沈んだ。
《ロミー，どうしましたか？》
　その問いに答える代わりに，ボクは佐為に問いかけた。
「ボクたち，いつまで一緒にいられるんだろうね？」
《ずっと，一緒ですよ》

「そうだね・・・・」
　そう答えるボクの声が沈んだ調子なので，佐為は気遣った。
《ひょっとして，ロミーはわたしとずっと一緒にいたくないのですか?》
「複雑な心境だよ。もちろん，ずっと一緒にいたいという気持ちもある。深く強く願ってもいる。でも・・・・」
《でも・・・・?》
「でも，ボクは生身の人間として年を取っていく。佐為はいつまでも今のままだ。やがて，ボクの方が佐為の親と言えるくらいの年になるだろう。そしてさらにそれを越えてボクは老いていく。それを考えると，ちょっと悲しい。ボクはいつまでも今のように兄弟のようでいたいよ」
《・・・・》
「ボクはこれまで，誰も羨んだり妬んだりしたことがない。でも今，ボクは佐為が羨ましい，妬ましいのかも」
《ロミー，年を取れば年を取ることの幸せがあります。人には成熟の美しさがあります。ロミーはきっと，美しく年を取り成熟しますよ》
「ありがとう」
《決して，お世辞でも慰めでもなく，本心から言っているんですよ》

「分かってるよ。佐為はいつでも誠心誠意だよね」

こんなしんみりした会話を交わしている時，相川さんから返信があった。撮影は今週の金曜日の午後3時から。まず，北斗通信社の本社で撮影とのこと。それに続けて，北斗杯エグジビジョンの日程についても書かれている。大会前日のレセプションが終わる午後から中国チームの団長と対局，大会終了の翌日の午前に韓国チームの団長との対局。中国チームの団長は陸力という人。韓国チームの団長はなんと高永夏。相川さんのメールによれば，もともと別の人が団長に決まっていたけど，急に変更になった。たぶん，団長は佐為と対局できると知って無理やり自分を団長にさせたのだろうとのこと。

「佐為，ずいぶん好かれてるみたいだよ」

《高永夏なら，何度でも対局したいです》

つい先ほどまでのしんみりした表情から一転して，うれしさいっぱいの顔になっている。その豹変ぶりがおもしろい。「君子は豹変す」，つまり佐為は君子なのかな？

到達

▪Ⅵ　到達

北斗杯までの1ヶ月は平穏に過ぎた。そして，北斗杯のエグジビジョンも，レセプションの後に行なわれた中国チームの陸力との対局は淡々と進み，佐為が3目半の差で勝った。

大会終了の翌日に行なわれた高永夏との対局。前回，彼が負けているので，彼が先番に指定されている。

「わたしが黒を持つのは久しぶりだ」

と語る。ボクは佐為に

《コミがあっても，黒の方が有利なの？》

と尋ねる。

《人それぞれ好みはありますが，わたしはやはり黒の方が有利に打てる気がします》

と，佐為が答えた。それでも，終わってみれば佐為の1目半差の勝ち。高永夏は終局した盤面をじっと見つめている。2～3分ほどそうしていて，顔を上げた。それから前回のように握手をするため手を差し出すのかと思っていたら，そうではなかった。彼は

通訳を介して語る。
「今日は，申し訳ないが握手をする気になれない。同じ相手に連敗した自分がふがいない。まだまだ努力が足りないと思い知らされた。これからしばらく，わたしはあなたと対局しない。あなたを確実に倒せると確信できるまで，あなたと対局はしない。だからそれまで，地上に留まっていてくれ。成仏するなというのは残酷な願いだと分かっているが，敢えて残酷なお願いをする」
　高永夏は頭を下げた。
「アイツが頭を下げるなんて，びっくりしたぜ。プライドの塊みたいな奴なんだぜ」
　翌日ボクの部屋にやって来たヒカルさんは語る。
《あのように願われるのは，まあ幽霊冥利ですね》
「だけど，あのせりふを聞いて，オレ思ったんだ。オレも同じこと考えてるなって。オレも，オレが佐為に勝つまでは消えないでほしいと思ってるんだ」
《わたしも，ヒカルがわたしを越えるまでは消えたくありません》
　この言葉をヒカルさんに伝えると，ニコッと笑った。そして，ベッドの下から碁盤を出してきた。
「さあ，対局」
　この日は結局，ヒカルさんの3目半差負け。

「せっかくこないだ1目半差まで迫ったのになあ」
　と悔しがるヒカルさんを佐為は
《まあ，焦らないで。1目，2目はその時々の状況で動くものです》
　と励ましている。ボクから見ると微笑ましい。それでヒカルさんは機嫌を直したようだけど，またちょっと気落ちしたような顔になった。
「ヒカルさん，どうしたの？」
「うん・・・・」
　ヒカルさんはちょっとためらってから，話し始めた。
「藤原さん，北斗杯のサイトに写真が載ってただろう」
「うん・・・・ヒカルさん，いやだった？」
「まあ・・・・」
「別に，ボクだって好きこのんで露出してるわけじゃないけど，北斗杯のイメージキャラクターを引き受けたから，顔写真くらいは載せないと」
「イメージキャラクター？　そんなの引き受けたの？」
「うん，まあ，ことの成り行きで・・・・相川さんの口ぶりでは，イメージキャラクターを引き受けるのと，北斗杯のエグジビジョンがセットになってるみたいで・・・・」
「じゃあ，佐為を陸力やヨンハと打たせるために，引き受けたのか？」

「まあ，そうだけど・・・なんでそんなにこだわるの？　たかが写真じゃない。碁のイベントのサイトにボクの写真が載るのが，そんなに大ごとなの？」
「大ごとだよ！」
「ふーん・・・・まあ，感じ方は人それぞれだけど」
　ヒカルさんは，大声を出した後，それを恥じるようにうつむいている。
「オレ，藤原さんにあまり有名になってほしくない。まあ，今でも有名だけど，碁以外のことで有名になってほしくないんだ。なんだか，このままタレントになって俺の手の届かないところに行ってしまいそうで」
「それはない。それは断じてあり得ないよ。その手の話は，去年のトーナメントで優勝した直後にたくさん舞い込んだけど，全部拒否したから。そんな心配はしなくていいよ」
「分かってるけど・・・・」
「ひょっとして，昔，佐為が突然消えたことと，ボクのことを重ね合わせてるの？　ボクが突然，ヒカルさんから遠く離れてしまうんじゃないかって」
「そうかもしれない・・・・」
　ヒカルさんは悲しげにうつむく。
「佐為が突然いなくなった時，オレ，すごく悲しかった。辛かった。佐為が戻ってきて，

とてもうれしいんだ。だだから，もう消えたりしないでほしい」

《ヒカル・・・・》

佐為は，ヒカルさんの肩を優しく抱いて慰めている。

「ヒカルさんに佐為が見えないのが残念だけど，今，佐為はヒカルさんを優しくハグして慰めてるよ」

「ありがとう・・・・ほんとうに，優しいよな。佐為も藤原さんも・・・・」

5月，6月は淡々と過ぎた。ほぼ1日おきにヒカルさんがやって来る。さすがに毎日というのは遠慮しているらしい。佐為と対局し，しばらく棋譜を検討して帰って行く。まれに，ヒカルさんの棋譜の検討を端で見ている佐為がどうしても意見を言いたくなることがある。佐為もボクの勉強の邪魔をしないよう遠慮しているけど，どうしてもヒカルに話しかけたい時はボクに頼む。ボクも，例外的なことなので2～3分勉強を中断して付き合う。その回数が増えることはない。佐為も気を遣ってくれている。

2週間に1回くらい，塔矢アキラが車でボクを迎えに来る。その日は昼頃から，まず塔矢アキラと佐為，次にヒカルさんと佐為が対局する。二人とも佐為に対して3目半～4目半くらいの差で負けることが多い。あの日の1目半差は，まぐれと言っては失礼だけど，例外的なことだった。それから，ヒカルさんと塔矢アキラの対局を1局だけ観戦して，彼の手料理をごちそうになって，ボクと佐為は帰る。もちろん，二人はそれから

ずっと夜更けまで打ち合うはず。たまには行洋夫妻が帰国していることもあるはずだけど，塔矢邸で顔を合わせたことはない。尋ねたら，

「父がいると，父と佐為の対局になってしまう。そうすると，それだけで1日終わって，ボクや進藤が佐為と打つ時間がなくなるから，父がいない日にお招きしてるんです」

と，まるでイタズラを見つけられた子供のように恥ずかしげに塔矢アキラは答えた。

7月に入ると，いくつかの出来事が起こった。

まず，ヒカルさんが本因坊を防衛した。7番勝負だけど，2敗しただけなので，6戦目でけりが付いた。挑戦者は倉田という人。

《ああ，倉田6段・・・・いや，もうとっくに9段になっているはずですが》

「知ってる?」

《ええ。なかなかおもしろい人です。ヒカルの才能を早くから認めていた人でもあります。もちろん，強いです。いつか対局の機会があるといいのですが》

「相川さんに話してみようか。北斗通信スペシャルＰａｒｔⅡを企画してくれるよう」

《ああそれは，いい考え・・・・》

と言いかけて，

《でも，またイメージなんとやらみたいな話を持ちかけられたら》

「拒否すべきかな?」

佐為は考え込んでいる。倉田さんや，ほかの棋士たちとも対局したいけど，ボクに変なこともさせたくない。ボクを気遣ってというだけでなく，ヒカルさんを気遣って。
「まあ，今すぐ決めなくていいことだよ」
ヒカルさんの本因坊防衛祝賀パーティーには出席しなかった。ボクもそういう場はあまり好きじゃないし，ヒカルさんも，ボクがそういう場に顔を出すのを嫌うだろうから。それに，パーティーに出なくても，ヒカルさんは絶対やって来る。そして，やって来た。それも，翌日のうちに。さすがに上機嫌だった。
「おめでとう」
《おめでとう》
「ありがとう」
「ご祝儀は何がいい？　やっぱり佐為との対局？」
「うーん。お祝い気分の時に佐為に負かされるのもなあ」
《では，ご祝儀に負けてあげましょうか？》
という佐為の言葉を伝えたら。
「それもいやだ」
と断固拒否された。結局，いつものように3目半差でヒカルさんの負け。
「まあ，鍛えてもらうのも祝儀のうちか」

「そうですよ。なんと言っても，佐為と打ち合う時間は，ヒカルさんにとって人生で一番幸せな時間なんだから」

と言うと，ヒカルさんは照れたような，でも心からうれしそうな表情を見せた。

それから，中国と韓国から立て続けに手紙が届いた。それぞれ，春蘭杯，ＬＧ杯というトーナメント棋戦にシード棋士として招待したという内容。それは，佐為のために何よりありがたい話。日程によっては，講義やゼミを何回か休まないといけないけど，ボクは，授業やゼミを欠席しても，来年受け直すこともできるし，本や論文で内容をフォローすることもできる。佐為は，いつ消えてしまうか分からない。としたら，迷う必要はない。ボクはどちらの手紙にも承諾の返事を書いた。もっとも，どちらも実際の棋戦が始まるのは来年なのだけど。

そして，７月末に伯父の医療法人から債権放棄を求める手紙が届いた。医療法人が経営破綻し，別の医療法人に救済合併される話が進んでいるけど，救済する側の医療法人が伯父の法人に債務の圧縮を求めている。それで，債権の７０％を放棄してほしいという内容。脇で一緒に読んでいた佐為は腹を立てた。

《要するに借金を踏み倒そうということじゃないですか！》

「まあまあ，そんなに怒らないで」

《ロミーは怒らないんですか？　こんな無礼な仕打ちに》

「怒らないわけじゃないけど，こういう時は冷静に考えるべきだよ。ボクは債権放棄をしてもいいし，しなくてもいい。しないと，どうなるか？」
《どうなるんですか？》
「債権者はボク一人じゃないはずだから，ボク一人の意見が通るかどうか分からないけど，ほかの債権者も放棄に応じないとなれば，救済合併の話がなくなる。そうなれば，たぶん伯父の医療法人は倒産する」
《倒産させればいいじゃないですか》
「まあまあ，落ち着いて・・・倒産すれば，資産が競売され，売上金で債務を返済するんだけど，売上金が債務総額に見合うことは，まずもってあり得ない。半分以下，へたしたら３０％とか２０％とか。つまり，お金のことだけ考えると，倒産させるより債権放棄に応じる方が得かもしれない。救済合併する側も，伯父の法人の資産状況を把握した上で，７０％という数字を債権者に出してきたんじゃないのかな。３０％でも受け取る方が，倒産させるより得ですよという意図で」
《何とも腹黒い》
「まあ，ビジネスって，そんなものだよ」
《ロミーは，よくもそんなに冷静でいられますね》
「うーん，実感がないんだよね。今年の２月に突然１億以上のお金があると言われたけ

ど，ボクにとっては金銭貸借契約書の数字，それ以上の実感がないんだ。それに３０％といっても，３５００万くらいにはなるんだよ。もう１つ付け加えれば，医療法人が倒産すれば，職員，従業員だけでなく，入院患者も路頭に迷う。それはかわいそうじゃない。ボクの受け取るものが変わらないのなら，救済合併を認める方がいいんじゃない？」

《ロミーはいつだったか「人や物への執着が薄い」と言ってましたけど，ほんとうにそうですね》

佐為はちょっとあきれたような口調で語った。

「不可能なことに執着するのは，自分を不幸にするだけだよ。今のボクの状況で伯父への貸金を全額取り返すのは不可能なことなんだ。・・・・まあ，伯父の家に強盗に押し入るとか，伯父の子供を誘拐して身代金を要求するとかすれば可能かもしれないけど，それはそれで，ボクの一生を棒に振るようなものじゃない。常識の範囲内というか合法性の範囲内では，不可能なことなんだ。だとしたら，不可能なことに未練がましく執着するより，きっぱり諦める方が幸せじゃない」

《そうであっても，それほどきっぱり諦めきれるとは・・・・》

佐為は，それから先の言葉が続かず，ボクを見つめている。ボクは債権放棄に応じるという返事を書き送った。

こんな7月が終わり，8月になった。翌月から始まるオープン碁トーナメント全国大会のシード棋士16人のうち1人は佐為だから，残り15人。日本棋院が推薦する。例年はそんなに揉めることはない。アマ・プロ混合戦だから，プロといってもあまり強い人，たとえばタイトルホルダーとか，タイトル戦に常時参加している棋士とかは参加しないのが暗黙の了解になっている。だけど今年は，佐為と打ちたがる棋士が多くて選考に困っているという噂をヒカルさんが伝えてくれた。

「まさか，ヒカルさんは名乗り出ていないよね」

「オレはいいよ。アキラもさすがに遠慮している。でも，緒方先生は出たがってるって話だよ。棋聖様がアマ・プロ混合戦に参加するなんて，前代未聞だぜ」

「去年対局してるのに，欲張りだね」

「1度打ったら，また打ちたくなる。それが佐為の碁なんだ」

ヒカルさんはうれしそうに話している。佐為の碁が認められること，それがヒカルさんの念願なんだろう。

まあ，こんな波乱もありながら，9月になれば無事に全国大会が始まった。15人のシード棋士に緒方さんの名前はなかったけど，倉田さんの名前があった。この大会では，対局者の席にボクが座る。佐為はボクの真横に座ろうとしたけど，

《ふだんボクが座っている位置に座ってくれない？　佐為の顔が見やすいように》

と頼んだら，〔困った人だなあ〕というような顔をしながら，ボクの頼みをきいてくれた。

ボクはいつものように3本指で石を置くけど，もう誰もそれを笑いはしない。1回戦の相手はアマチュアの人。かなり盤面に余白のある段階で投了した。2回戦の相手は5段のプロ。やはりかなり早い段階で投了した。

2回戦と準々決勝の中間くらいの日にヒカルさんがやって来た。いつものように佐為と対局し，それから棋譜の検討を始めようとする時，

「男が21歳にもなって彼女がいないって，おかしいのかな?」

と話しかけてきた。

「別におかしくはないですよ。仮に，おかしいとしても，ヒカルさんがそれで困らないのなら，いいでしょう。人間だれしも『なくて七癖』って言うくらい，世間の常識から外れたことの1つや2つどころか7つくらいはあります」

「まあ，藤原さんならそう言うな・・・・昨日，オレの誕生日で・・・・」

「ああ，そうでしたね」

ヒカルさんは，誕生日を和谷（わや）とか伊角（いすみ）とか奈瀬（なせ）といった古くからの友達と一緒に過ごすのが毎年の習慣になっている。今年もそうだったんだろう。

「そこで，みんなから言われたんだ『進藤，オマエまだ彼女の一人もいないのか?』って」
「言わせておけばいいでしょう」
「やっぱり，藤原さんはそう言うな。ほんとうに，ブレないよな」
「ヒカルさんもブレなくていいんです。そもそも恋も恋人も人生の必需品じゃありませんから。そんなものなくても，人は幸せに生きていけます。現に，ヒカルさんは今だって幸せでしょう」
「まあ，そうだな」
「それに，ヒカルさんのそばには，そんじょそこらの恋人よりずっと素晴らしい人がいるんだから」
「佐為だな。それに藤原さんも」
「もう一人」
「もう一人?」
「塔矢さんですよ」
「ああ，アキラ・・・・」
「『ああ』じゃないでしょう。ヒカルさんは塔矢さんと打ち合う時，とても幸せそうな顔をしてますよ。佐為と打ち合う時，人生で一番幸せそうな顔になるけど，塔矢さんと打ち合う時も同じ顔をしてますよ」

「そうなのか？」
「そうですよ」
「そうか・・・・」
　と言って，ヒカルさんはしばらく黙って考え込んだ。そして，
「そういえば，そんなこと思うことがある。塔矢と打ってる時，『オマエと打つのが一番楽しい』と思うことがある」
　とつぶやいた。それを聞いて，ボクも微笑んだけど，佐為も微笑んだ。
　トーナメントの準々決勝。相手は誕生パーティーでヒカルさんをからかった和谷さん。だからといって恨むわけではないけど。
《和谷さん，お久しぶりです。以前，ネット碁で対局しましたね》
　という佐為の言葉を伝えたら，
「よく覚えているよ。今日はあのリベンジのつもりなんだ」
　と勝ち気な口調で返事した。
《そうは問屋が卸しません》
　という言葉はスルーしてたら，
《ロミー，ちゃんと伝えてください！》
　とつっかれた。仕方ないからその通りに伝えたら，和谷さんはムッとした表情にな

り，

「佐為はどこに座ってる?」

と訊いてきた。佐為の座っている所を指さしたら，そちらをにらみつけた。それでも結果は佐為の6目半差の勝ち。和谷さんはすごく悔しがっていた。

準決勝の相手は7段のプロなのだけど，正直なところ和谷さんより印象が薄い。そして決勝の相手は，予想どおり倉田さん。

「倉田さん，参加なさったんですね」

「そうだよ。悪いか?」

「いえ，悪いとは申しませんが・・・・」

『タイトル戦の常連がアマ・プロ混合トーナメントなどに顔を出すな』って，余計なお世話だ。オレの知ったことじゃないよ。オレは佐為と打ちたいんだ」

ボクとは違う意味でマイペースな人だな。佐為が笑っている。佐為の笑みは対局中も途絶えなかった。例の「氷の微笑み」ではない。もっと無心に碁を楽しんでいる笑み。

《この者，おもしろい。勝敗よりも，わたしを相手にいろんな手を試そうとしている。望むところです。わたしも新しい打ち方を試してみましょう。相手にとって不足はありませんから》

結果は佐為の1目半差の勝ち。

「くそーっ。いいところまで行ったのになあ。最後のヨセで振り落とされてしまった・・・・でも，おもしろかったよ。こんなワクワクする碁は久しぶりだった。ありがとう」

倉田さんは笑顔であいさつする。佐為も相手への敬意を込めた笑顔を返した。

優勝者インタビューは，去年のように荒れることはなかった。今年は準優勝者も一緒にインタビューを受ける。倉田さんクラスなら注目度がいつもと違うんだろう。ボクより倉田さんの方がよくしゃべっていた。ボクへの質問にも割り込むくらい。ほんとうにマイペースな人だ。ボクとしては，この場ではありがたいけど。

それから1ヶ月ほどして，塔矢さんが2度目の名人位防衛を果たした。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

（ここから第三者視点）

佐為とロミーを交えた1回目の対局を終えて，この日はロミーは「明日までに読み終えたい本がある」と言って夕食を摂らずに帰ったので，ヒカルとアキラが二人で夕食を摂っている。

「ちょっと遅くなったけど，2回目の名人タイトル防衛おめでとう」

「ありがとう」

と言うアキラの口調はぶっきらぼうにも聞こえた。
「なんだか，あまりうれしくなさそうだな。オレから祝福されてもうれしくないか？」
「率直に言って，キミから祝福されてもあまりうれしくない」
「どうしてだよ!?」
ヒカルは声を荒げた。
「約束，覚えてるか？」
「約束？」
「ああ。1回目の北斗杯が終わって間もない頃に交わした約束。まず，二人とも必ずタイトルを取る。キミは思い入れの深い本因坊。ボクはボクなりに思い入れの深い名人。そして，二人ともタイトルホルダーになったら，お互いに相手の挑戦者になるという約束だよ。キミはいつ，名人戦の挑戦者になってくれる？　今年も，残念ながら挑戦者はキミじゃなかった」
「それを言うなら，オマエだって」
「まあ，そうなんだが・・・・待ってるんだよ。キミが挑戦者としてボクの前に現れるのを。思い入れの深いタイトルの防衛戦は，この世で一番・・・・」
ここでアキラは言葉に詰まった。
「この世で一番？」

ヒカルは問い返す。
「この世で一番深い愛着を寄せる相手と戦いたい」
ヒカルはびっくりしてアキラを見る。一瞬，笑おうと思ったが，アキラの真剣な表情を見ると笑うわけにはいかない。何と言っていいのか分からない気詰まりの中で，ヒカルは黙ってアキラを見る。
「こんな言い方されて，いやかい？」
「いや・・・・じゃない・・・・けど・・・・」
途切れ途切れに答えるヒカルを見て，アキラは笑みを漏らした。
「タイトル防衛を祝ってくれて，ありがとう。ほんとうはキミから祝福されるのが一番うれしいんだ」
そう言われて，ヒカルは照れた。
「・・・オレだって，祝賀パーティーなんかより，オマエから『おめでとう』と言われたのがずっとうれしかった」
「キミは，藤原さんを見習って，佐為が自分に宿っていたことを堂々と認めた。ボクは，藤原さんを見習って，自分の思いに素直のなることにしたよ」
／／／

（ここからロミー視点）

１２月，今年も北斗通信スペシャルが開催される。今年は，佐為が白を持つ。昨年，緒方棋聖と塔矢名人を破り，塔矢行洋にも高永夏にも勝った実績から，相手に先番を持たせるべきという意見が大勢を占めたからしい。佐為はタイトルホルダーよりも強いと公式に認められたようなもので，ボクはうれしかった。相手は，碁聖というタイトルを持つ芹澤という棋士と，社（やしろ）というヒカルさんや塔矢さんと同年配の若手の棋士。まだタイトルは持っていないけど，この世代では二人に次ぐ実力の持ち主で，かつて北斗杯には一緒に参加したらしい。

「佐為，社と対局するんだ。そりゃあ，おもしれえ。ぜひ見に行かないと」

と興奮気味に話すヒカルさんは，北斗杯での彼の棋譜と，最近のいくつかの棋戦の棋譜を見せてくれた。佐為はそれを見て，

《荒削りなところがありますが，おもしろい碁を打ちますね。大器の素質は感じます》

と語る。

そんな社との対局。第１手は碁盤の真ん中，天元に打たれた。それを見て佐為は驚く。

《初手天元ですか！・・・・》

《珍しいの？》

《とても珍しい。わたしは今まで一度も打ったことがありません》

そう言って佐為はゆっくり考えている。佐為にしては異例なほどの長考。そして，おもむろに扇で碁盤の1点を指した。それからはふだんのペースで対局が進む。序盤から中盤にさしかかる頃，

《初手天元は，決して攪乱だけを狙った目くらましの手ではない，きちんとした計算に裏付けられた初手でしたね。こういう展開を作れるとは，なかなかの逸材です。だからと言って，負ける気はしませんが》

と，佐為が語る。その言葉どおり，しだいに社が唇をかみしめて考え込む場面が増えていった。そして，去年は塔矢さんが口にしたせりふ，

「オレの負けは見えてるんだが，最後まで打たせてくれ」

佐為はうなずいた。結果は，6目半の差が付いた。

対局後の検討が始まると，ヒカルさんが駆け寄って，

「社！オマエ，オレの時には初手天元を使わなかったくせに」

と語りかけた。社はニヤリと笑った。それから始まった検討でも，かなりの時間がこの初手天元に充てられた。

《やがて，定石とは言わないまでも，初手の選択肢の一つとして広く知られるようになるかもしれませんね。わたしも使ってみたい》

という佐為の言葉を伝えると，社はとてもうれしそうな顔をした。
芹澤碁聖との対局はこれとは対照的に淡々と進み，淡々と終局した。それでも結果は4目半の差だから，塔矢さんや緒方さんに匹敵する実力者ではある。検討の場で佐為が《まるで打ち方の手本のような棋譜になりましたね》
と語ると，芹澤碁聖は
「世界最強と称される佐為が相手であればこそ，正攻法に徹したんです」
と答えた。ああ，穏やかな表情の下に社への熱い対抗心を秘めていたんだとボクは気がついた。
こうして，前年同様，さまざまな出来事のあったこの年も暮れていきかけた頃，ボクにとってビッグイベントが出来した。クリスマスの翌日，ボクの部屋にやって来たヒカルさんは，碁盤を出すのも忘れて開口一番，
「昨日，塔矢から告白されてしまったよ」
と話しかけた。ボクは〔あっ，ついに〕と思った。不意打ちではないけど，それでもビッグイベントには違いない。
「面と向かって『好きだ』と言われて・・・・」
「それで，ヒカルさんは何と答えたの？」
「答えるも何も，びっくりして，思わず『好きってどういう意味だ？』と聞き返したよ」

まあ，それは悪い対応ではない。
「それで，塔矢さんは何て答えたの？」
「ほかの誰よりオレと一緒にいるのが楽しいんだ，オレと一緒にいる時が一番幸せと感じるんだって返事した」
うん，それはなかなかいい答え。
「それから，こんなことも言った。面倒だからアイツのせりふをそのまま伝えるけど，『ボクは藤原さんみたいに心が広くないから，進藤がほかの人と親しそうにしているのを見るといやな気持ちになる』って。それを聞いて，オレ，ちょっとおかしかったよ。以前，オレが藤原さんに言ったのと同じせりふだもんな」
ボクも，ちょっとおかしくなった。
「アイツ，藤原さんにいろいろ相談してたんだって？」
「まあね」
「なんで，アキラのことオレに話してくれなかったんだ？　別に，怒ってるわけじゃないけど・・・・」
「そういうことは，ボクが伝えるんじゃなくて，本人がきちんと相手に直接伝えるべきなんだよ。ボクは塔矢さんにそう言った。それで，昨日，塔矢さんは実行したんだね」
「そういうことか・・・・」

ここで，ボクはあることがひらめいた。
「ヒカルさん，塔矢さんがボクとそんなふうに親しく相談していたと知って，いやな気分になった？」
「別に，いやな気分なんかならないよ。・・・・てか，一番いい相談相手じゃない，藤原さんは。なんでそんなこと訊くの？」
「ヒカルさんは，ボクがほかの人と親しそうにしているといやな気分になるんでしょう。でも，その『ほかの人』が塔矢さんなら，いやな気分にならないんだね」
ボクにこう言われて，ヒカルさんは考え込んでいる。
「・・・・そりゃあ，塔矢は特別だよ」
その言葉を聞いて，ボクはうれしくなって笑みを漏らした。脇で佐為も穏やかな笑みを浮かべている。
《ヒカルがアキラの告白を拒否せずに受け止め，アキラを特別な存在と認めているのなら，今はそれで十分でないでしょうか。これ以上，わたしたちが余計なお世話をしない方がいいでしょう。急いては事をし損じます。》
ボクはうなずいた。
「ヒカルさん，碁盤を出さないの？　そのために来たんでしょう」
「ああ，もちろんだ」

こうして，いつものようにヒカルさんと佐為の対局が始まった。

新しい年が明けた。この年は，３月の春蘭杯１回戦まで佐為の対局の予定はない。だからネット碁にいそしんでいる。ずっと以前から，佐為＝ＦＪＷＲｓａｉがログインすればすぐに選りすぐりの強者から対局申し込みが入るけど，春蘭杯とＬＧ杯にシード棋士として出場することが公表されてから，特に中国と韓国のプロ棋士からの対局申し込みが増えた。そんな棋士たちを相手に，佐為は不敗の伝説を更新し続けている。

そんな１月の中旬，ボク宛にある医療法人から手紙が届いた。伯父の法人を救済合併した医療法人。封を切ると，債権者の多数から債権放棄への賛同が得られたこと，その結果に基づいて，この法人が伯父の法人を救済合併し，登記関係の手続きも完了したことが記されている。そして，各債権者には，本来の金銭賃貸借契約の期限日に元利合計の３０％を支払うことが確約されている。つまり，ボクの場合，３月末に３千何百万かのお金が振込まれる。それを知って，ボクは具体的な行動を始めた。中古の小さな戸建て物件を探すこと。できれば，中州のそばの叔母の家のように，１階が小さな商店か仕事場，２階が一人で住むのにちょうどいいくらいの住居になっている小さな家がいい。あるいは，個人医院の自宅を兼ねた診療所で，院長が引退を希望し，後継者がいないので売りに出ている物件とか。

勉強のあいまにインターネットで不動産情報を検索しているボクを見て佐為は疑問

に思ったようだ。
《ロミーは家を見るのが趣味だったんですか？　今までそんなことはなかったのに》
「趣味じゃないよ。実用的な目的だよ。1階を小さな診療所，2階をボクの住まいに使えそうな小さな中古の家を探しているんだ。できれば，ここからあまり遠くない所，ヒカルさんのうちや塔矢さんのうちからあまり遠くない所に。3千万円あれば，その辺で小さな中古の戸建ては買えるみたいだから」
《診療所？・・・・ひょっとして，ロミーは迷いを吹っ切って医者の仕事を始めるつもりなのですか？》
　ボクはうなずく。
「迷いを吹っ切れたよ。ボクのような人間が医者の仕事をする意味があると思えるようになったんだ」
《勉強の成果ですね》
「・・・・もちろん，勉強も役に立った。でもそれ以上に，ヒカルさんや塔矢さんとの係わりが役に立ったよ」
《ヒカルやアキラとの係わりが？》
「うん。あの二人の悩みや喜びに付き合って，時には相談も受けて，ボクなりのアドバイスをすることもあった。あの二人の悩みは，広い意味で恋の悩みだね。ボクは恋に悩む

ことはなかったけど，それでも恋の悩みの相談には乗れたし，それなりに役立てたと思う。むしろ，悩まない人間の方が人の悩みに的確な助言を与えられるケースもありそうだと分かったんだ。人は何かに悩んでアドバイスを求める。その時，その『何か』をその人と一緒に深く丹念に検討するのもその人を助ける1つの方法だと思うけど，その『何か』について，『それはほんとうは深く悩むほどのことではないんだよ』と語りかけるのも，もう1つの方法なんだと思えるようになった。もちろん，語りかける時と状況の選択を間違ってはいけないけどね。あるいは，感情に溺れ流されている人に，感情を込めて対応する人がいてもいいけど，自分はその感情に立ち入らず，敢えて理詰めの対応をするのも，意味があると確信できるようになった」

《確かに，ロミーはあの二人にそのように対応していました》

「その対応の中で，ボクは自分が経験しない悩みの相談に応じるコツを学んだし，そういう場面でボクが役に立てるという確信も得たんだよ。臨床研修を終えて，ふつうに精神科クリニックなどで働いていては，経験できなかったことだと思う」

《そうなんですか?》

「ふつうの精神科では，あれほど深く患者に係わることはないから。そのような深い係わりは避けるように指導されるんだ。それは決して間違ってはいない。医者と患者との間には一定の距離が必要だからね。親しくなりすぎてはいけない。でも，ボクには，

この1年あまりヒカルさんや塔矢さんと係わったような深い係わりが必要だったんだ・・・佐為のおかげだよ。佐為に出会わなければ，あの二人と知り合うこともなかったから」

ボクは心からの感謝の言葉を伝えた。佐為は，はにかむような笑みを見せた。

2月に入って，おもしろい物件を見つけた。村野という皮膚科の女医さんが，高齢で引退することになり，診療所と住居を兼ねた2階建ての古い戸建て（築５０年と記載されている）を売りに出している。場所は巣鴨。駅から歩いて１０分くらい。本因坊家の墓のある本妙寺のそば。そこはまた，佐為とボクの出会いの場所でもある。〔これも何かの縁なのか〕と思った。

ボクはさっそく，仲介の不動産業者に伴われて物件を見に行った。外壁にツタが絡まっている。幽霊屋敷のようだと嫌う人もいるけど，ボクは好きだ。ドアホンを押すと，村野さんが出迎えてくれた。ここを引き払って，高齢者住宅に引っ越すらしい。５０年あまり，この家に住み，この家で診療を続けてきた。今も，まだ転医先の決まっていない患者さんを細々と診ている。

1階の診察室を見せてもらった。

「藤原さん，でしたね。何科なのかしら?」

「精神科です」

「そう・・・・皮膚科をサブ・スペシャリティーにする気はない？」
「皮膚科ですか？」
「ダーモスコピーとか顕微鏡とか，顕微鏡用カメラ，普通のカメラ，染色試薬とか，たいしたものじゃないけどいくつか機材がある。中古医療機器を扱う業者に話しても，こんな年代物，へたしたら処分料を取られるかも・・・・使っていただけるなら置いていくけど」
　皮膚科・・・・それなりにおもしろい科目ではあった。
「皮膚と神経系，どちらも外胚葉由来だから，縁があるかも」
　と言って，彼女は笑った。
「まあ，それは冗談半分だけど，残り半分は本気よ。アトピー性皮膚炎がストレスで悪化するのは有名な話だけど，それに限らず，ほかの皮膚科疾患だって精神状態に影響される。逆に，皮膚科疾患は目に見えるから，それ自体が患者の心を悩ませる」
「・・・・確かに・・・・それに，うつ病とかでセルフケアをする意欲がなくなって，1週間も2週間もお風呂に入らないような状況だと，皮膚科疾患ももらいやすいですね」
　ボクは本気になっていた。
「それなら，ボクの方からもお願いがあります。業者さんからお聞きと思いますが，代金を支払えるのは3月末です。正式の購入はその時になります。それまで，診療を続けて

おられるなら，見学に来させてください」

彼女は穏やかに笑った。

「まあ，去年の秋から患者さんはどんどん転医させてますから，開店休業みたいだけどね。患者さんが来れば，そして患者さんが許可してくれれば，見学していただいてかまいませんよ」

それから，2階を見せてもらった。一人で暮らすには十分広くて，広すぎはしない。キッチンもバスもトイレも，古いなりに丁寧に使ってきれいにしてある。所有者の人柄を感じさせる。

購入申込書に必要事項を記載し，翌日のうちに手付金を振込むことを約束して家を出た頃には，短い冬の日が暮れかけていた。

「佐為，せっかくだから本因坊家のお墓参りをしていく?」

「そうしましょう」

ボクたちは寺の中に入り，本因坊家の墓の前に並んで立った。佐為は目を閉じ顔を伏せてなにか真剣に祈っている。秀策の冥福を祈っているのだろうか。やがて，目を開けた。

「じゃあ，帰ろうか?」

と声を掛け，寺を出た。

暮れかかる冬の日。ボクたちは染井霊園を通り抜ける道を歩いている。
「2年と2ヶ月くらい前だね，出会ったのは」
「そうですね。あの時，ロミーも誰かのお墓参りだったのですか？」
「うん。親戚ではないけど，縁のある人の墓があるんだ」
「そうですか」
しばらく，ボクたちは黙って歩いた。それから，ボクはふだん気にかかっていることを佐為に話しかけた。
「佐為は，『神の一手を極めるためにこの世に留まっている』と言うけど，人間が神の一手を極めることは不可能じゃないの？　神の一手を目指して精進することはできるけど，そこに届くことはできないでしょう。神の一手を極められるのは神だけじゃないの？」
「そうかもしれませんが・・・・」
佐為はうつむいて考え込んでいる。
「でも，もしそうであるなら，わたしは何のために，そしていつまで，ここに留まるのでしょう？」
「何のために，というのは，1度目は秀策のため，2度目はヒカルさんのため，そして3度目は佐為自身のため，藤原佐為の名を碁の歴史に刻むためだと，ボクは信じているよ。

いつまで，それは分からない。佐為を立ち去らせるような決定的な出来事が起きるのか，それとも寿命というのも変だけど，時が満ちるように自然に消え去るのか・・・・」

こんな話をしながら部屋に戻った時にはすっかり夜になっていた。

／／／

くなった。
「約束って，何ですか?」
　アキラは一瞬〔シマッタ〕と思ったが，秘密にしないといけないようなことでもないと思い直した。
「1回目の北斗杯が終わって間もない頃に進藤とボクが交わした約束です。まず，二人とも必ずタイトルを取る。そして，二人ともタイトルホルダーになったら，お互いに相手の挑戦者になるという約束です」
　と説明し，それから視線をヒカルに向け，
「ボクの方が先に約束を果たした。キミが約束を果たすのを待ってるよ」
　ヒカルはしっかりうなずいた。
「待ってろよ。オレは今のところ名人リーグで負けなしだからな」
　その言葉のとおり，ヒカルは本因坊リーグと平行して行なわれている名人リーグで今のところ無敗だった。ただし，名人リーグはこれからも続き，そのスケジュールはちょうど本因坊の挑戦手合と重なる。周りからこの点を指摘する声が挙がった。
「進藤本因坊の方が不利ではないですか?」
「そんなことでくじけるようなヤワな棋士ではありません，進藤は」
　というアキラの言葉を聞いて，ヒカルは

「もちろん，オレはそんなヤワじゃないよ」

と相づちを打った。

／／／

ら，ボクは佐為と語り合った。
「ボクの人生の大きな節目だね」
《そうですね》
「本妙寺からの帰り道，『佐為は何のためにこの世に留まっているのか』と語り合ったけど，ボクの立場から振り返れば，佐為はボクを臨床医にするため，臨床医になることへの迷いを振り切らせるために，この世に留まり，ボクと出会ったんだね」
《そう思ってくれるなら，うれしいです》
　それからしばしの沈黙。そして，ボクがまた語り始めた。
「去年の今頃に語り合ったこと，覚えてる？　生身の人間は年を取るけど，幽霊はいつまでも年を取らないという話」
《覚えてますよ。ロミーが生まれて初めて嫉妬を感じたと語ってましたね。わたしに嫉妬なんか，しなくていいのに》
「うん。無駄なことだよね。時の流れは止めようがない。時の流れとともに人は年を取る。それもまたどうしようもない必然。それを嘆いても，悲しんでも，無意味なことなのにね」
　ボクはキッチンの棚に並べたばかりのスプーンを右手に取り，肩の高さに持ち上げ，手を離した。スプーンは自然落下して左手に受け止められた。

「高い所で手を離せば物体は下に落ちる。重力の法則に従う必然だね。それを嘆き悲しむ人はいない。であれば，時の流れも必然なんだから，それを嘆き悲しまなくてもいいんだけど，千年の時を経ても若いままの佐為と一緒にいると，つい嘆きたくなる，嫉妬も感じる。理詰めのボクが，これは理屈で割り切れない」

佐為は，いたわるような視線をボクに向ける。

「でも，最近になって割り切れるようになった。正確に言えば，割り切れないことを割り切れるようになった。なんて，何を言ってるんだと思うだろうね。つまり，ボクの心の中に，割り切ることのできない感情の1つや2つくらいあってもいいと割り切れるようになったんだよ」

ボクは佐為に笑みを向ける。佐為も笑みを浮かべ，手を伸ばし，ボクの肩を軽く叩いた。

「佐為の存在そのものも，そうなんだよ」

《わたしの存在そのものも?》

「うん。佐為の存在は今の科学で説明できない。もちろん，今の科学で説明できない現象はいくらでもある。でもそれらのほとんどは，今の科学の方法に従って，今の科学の延長線上で，解明できると予想されている。でも，佐為という存在は，たぶん，今の科学の延長線上では解明できない。それを解明するには，根本的に新しい発想が必要だろ

うと思う。そんな新しい発想は当面生まれないだろう。たぶん，ボクが生きているうちには，佐為の謎は解明できない。それでいいと割り切ったんだ。佐為の謎は解明できない。佐為は今の科学が解けない謎。それでいいと割り切ったよ」

佐為は優しい笑みを浮かべる。

「いうなれば，秘密の花園だね」

《秘密の花園?》

「そう。ボクは基本的に合理主義者だよ。悲しんでも仕方のないことは悲しまない。嘆いても意味のないことは嘆かない。不可能なことは追い求めない。だれも幸せにしない嫉妬は抱かない。来る者は拒まず，去る者は追わず，人にも物にも執着しない。その方が人は幸せだから。そんなふうに割り切って生きてきた。これからも生きていく。周りからもそう思われている。でも，そんなボクの心にも，割り切ることを諦めた感情があり，合理的な説明を諦めた謎がある。それはボクの心の中に隠した秘密の花園だよ。そして，その秘密の花園の主（あるじ）は，佐為，あなただよ」

そう言ってボクが佐為を見ると，佐為は，はにかむような笑みを浮かべてうつむいた。ああ，このはにかむような笑み，ほかの誰にも見せない。ボクだけに時おり見せる。

その3日後，ボクたちは春蘭杯に参加するため空港に向かった。

それから

▪Ⅶ　それから

　ボクが佐為と出会って１０年が過ぎた。ボクは３７歳。ヒカルさんも，もう２９歳。２０代最後の年。この年，ボクたちにとって記念すべきことが起きた。ついに，ヒカルさんが佐為に勝った。１２月初め頃のこと。１目半差で勝った時のヒカルさんのはしゃぎよう。まるで，佐為に出会った頃の，１２～１３歳頃の子供に戻ったみたい。何より，高永夏よりも先に佐為に勝利したことがうれしいようだ。そんなヒカルさんを佐為は微笑ましげに見ていたけど，

「ついに佐為を越えたぞ」

　というヒカルさんの言葉には，

《何を言いますか。たった１度勝っただけで「わたしを越えた」などと言う資格はありません》

　と本気で怒り出し，

《さあ，もう１度》

　と，ヒカルさんに再戦を促した。こういうところは，佐為も子供っぽい。もう長い間，

ボクの仕事や勉強の邪魔にならないよう，ヒカルさんと佐為の対局は1日1回という暗黙のルールができていたけど，この日だけは，佐為の迫力に押されて，2度目の対局を行なった。

佐為が負けたから，先番を取る。

《ヒカルに対して黒を持つのは初めてですね。わたしは昔から，黒を持っては負けなしですからね》

それは，コミのルールのなかった秀策の時代のことだけど，黒に6目半のハンディが課せられる現代のルールでも，佐為は黒を持って先番を取る方が好みだと語っていた。その言葉どおり，再戦では佐為が3目半差で勝った。佐為の満足げな顔と，ヒカルさんの悔しそうな顔。

その後，年が暮れるまでヒカルさんはさらに2回勝ったけど，いずれも先番を取った時のこと。白を持って佐為に勝つことはまだできない。

大晦日，佐為はしんみり語る。

《この1ヶ月でヒカルはわたしに3度勝ちました。1度だけならまぐれとも言えますが，3度なら実力です。まだ，わたしが黒を持てば負けませんが，わたしにほんの1歩のところまで迫っていますね。やがて，わたしに並び，いつの日かわたしを越えるかもしれません。もちろん，弟子に越えられるのは師の本望です》

佐為は，うれしさをにじませながらも淡々とした口調で語る。
《いつでしたか・・・ああ，北斗杯のイベントでヨンハと対局した時のことですね，ヨンハが「あなたを確実に倒せると確信できるまで，あなたと対局はしない。だからそれまで，地上に留まっていてくれ」とわたしに語った。それを聞いてヒカルも，「オレも同じこと考えてる。オレが佐為に勝つまでは消えないでほしいと思ってる」と語りました。ついに，ヒカルはわたしに勝った。ということは，わたしが消えてもいいということでしょうか・・・・》
ボクはびっくりして佐為に問いかける。
「消えそうな予感がするの？」
佐為は，自分の心の中を探るように思案してから，
《いえ，まだそんな気配は感じませんが》
と答えた。
年が明けて，ヒカルさんの佐為に対する勝率が少しずつ上がっている。初めのうちは1勝4～5敗だったけど，1月，2月を過ぎて3月になると1勝2～3敗くらいになった。そしてついに，白を持って佐為に勝った。この時もヒカルさんはとてもはしゃいだ。ただ，前回で懲りたのか「佐為を超えた」とは言わず，「佐為に並んだ」と言ってる。そんなヒカルさんを佐為は優しく見守る。それから，真顔に戻って，

《まだ勝率が五分とは言えませんが，それでも，ヒカルはわたしに並びましたね。いよいよ，わたしは消えてよいということでしょうか・・・・まだ，そんな気配は感じませんが》

《それ，ヒカルさんに話しておく方がいいんじゃない？》

《えっ？・・・・いえ，それはヒカルにとって残酷でしょう。長年の努力の果てにやっとわたしと並んだ，そのためにわたしが消え去るというのは・・・・》

《でも，話しておかないと，前回のように，突然消えてヒカルさんを悲しませることになるかも》

佐為はため息をつく。

《ロミー，あなたは時として正しすぎます》

その言葉を聞いて，ボクは唇をかみしめてうつむいた。幸い，ヒカルさんには気づかれずに済んだ。

ボクたちの小さな世界でこのビッグイベントがあった数日後，世界の囲碁界全体の注目を集めるだけでなく，社会全体の注目さえ惹いたビッグイベントが出来した。アルファ碁というＡＩ（人工知能）の囲碁ソフトが，世界最強と目される人間の棋士に勝利した。世界中の囲碁ファン，囲碁関係者の注目を集めたこの対局はアルファ碁の４勝１敗で終わった。人間はＡＩに５局で１局勝てただけ。対局の棋譜は，途中経過も含め

て，ネット上に公開された。佐為もヒカルさんも熱心に見ている。
「佐為，勝てるか？」
佐為は盤面を見つめて考え込んでいる。
《打ってみないと分かりませんが・・・・》
いつもの佐為らしくない，自信のない口調。
「打ってみないと分からない，と言ってるけど・・・・」
「けど？」
ボクは，佐為の自信なげな様子を説明すべきかどうか，迷う。
「ヒカルさんは，どう？」
「オレも，打ってみないと分かんないけど・・・・」
ヒカルさんも自信がなさそう。しばしの沈黙の後，佐為がボクに語りかける。
《ロミーは以前，神の一手は人間には極められないのではないかと言いましたね。そうかもしれません。でも仮に人間に極められるとして，それを極めるのはわたしではなくこのアルファ碁かもしれません》
ボクは驚いて佐為を見つめる。
《ロミー，この言葉，ヒカルに伝えてください》
《えっ？》

《伝えてください》
佐為はきっぱりとした命令口調でそう言い切った。ボクは内容をはしょって伝えた。
「ヒカルさん，佐為が『神の一手を極めるのは佐為ではなくてこのアルファ碁かもしない』と言ってる」
それを聞いて，ヒカルさんの顔色が変わった。
「そんな・・・・佐為，それじゃあオマエは何のために・・・・佐為，オマエ，消えるのか?」
この言葉を聞いて，ボクはなぜ佐為が自分の言葉をヒカルさんに伝えさせたか，その理由が分かった。
《ヒカル，そんなにあわてないで。今すぐ消える気配はありません》
ボクはそのまま伝えた。ヒカルさんはちょっと安心したみたい。でも，
「『今すぐ』ってことは，いつかは消えるのか?」
《それはもちろん，幽霊は永遠にこの世に留まれるものではありません》
この言葉も，ボクはそのまま伝えた。
「そりゃあ，そうだけど・・・・」
寂しそうにつぶやくヒカルさんに佐為は敢えて明るい声で語りかけた。
《それにしても，このアルファ碁と対局してみたいですね》

アルファ碁は，グーグルという巨大企業のプロジェクトとして進められているものだから，誰でもおいそれと対局できるわけではない。実際，佐為もヒカルさんも対局の機会は得られなかった。そして，一時の波乱はそれとして，またこれまでどおりの日常が繰り返されることになる。少なくとも，表面上は。変わったことと言えば，時おりヒカルさんが佐為に「まだ消えそうにないか？」と尋ね，佐為が《まだのようです》と答えるくらい。

こうして春が過ぎ，夏も過ぎ，秋も過ぎてその年も暮れようとしていた頃・・・・中国と韓国のネット碁サイトにＭａｇｉｓｔｅｒと名乗る謎の棋士が現われ，並みいる中国，韓国のプロ棋士たちを不眠不休で毎日８～１０人ずつなぎ倒すという事件が起きた。１人あたりの対局時間は２～３時間。

年が明けた元日早々，ヒカルさんが駆け込むようにやって来た。

「どうしたの？」

「すぐ，パソコンを立ち上げてくれ」

ヒカルさんはボクの質問に答えず，焦っている。ボクはとりあえずパソコンを立ち上げた。ヒカルさんは，メモを見ながらどこかのサイトにアクセスしている。ネット碁のサイトらしい。

「佐為，この棋譜をみてくれ」

と言って，ヒカルさんは何枚かの棋譜を佐為に見せている。
《これは・・・・》
「間違いなく，アルファ碁だぜ。去年の暮れからこのサイトで中国や韓国の棋士たちをなぎ倒しているらしい。申し込めばだれでも対局できる」
《それなら！》
すぐに，ヒカルさんと佐為はそのＭａｇｉｓｔｅｒに対局を申し込んだけど，ウェイティングリストに１０人くらい並んでいる。
「これじゃあ，オレたちの対局は明日だな」
そう言ってヒカルさんは佐為と一緒にＭａｇｉｓｔｅｒの棋譜を検討し始めた。こうなると，二人はボクの存在を忘れてしまう。
「圧倒的な強さだな」
《そうですね》
という声が聞こえてくる。
「・・・・このｅｔｅｒｎａｌ　ｓｕｍｍｅｒって，ヨンハのアカウントだよな・・・・アイツも一刀両断されてるじゃないか」
やがて，一通り検討を終え，ヒカルさんは帰って行った。
翌日の朝，ボクはパソコンを立ち上げてヒカルさんを待っていた。待つ間もなくやっ

て来て，すぐにサイトを確認する。ヒカルさんの前の対局者の対局が始まってしばらく経った頃だった。

「あと1時間半くらいかな」

そう言いながら，ヒカルさんはその対局を観戦している。1時間ほどして，その対局もＭａｇｉｓｔｅｒの中押し勝ちで終わった。いよいよ，ヒカルさんの対局。ふだんボクが座る椅子に座って，真剣な眼差しでディスプレイを眺め，マウスをクリックしている。佐為も同じように真剣な眼差しでヒカルさんの対局を見つめている。二人の表情は最初から厳しいまま。そして，2時間ほどしてヒカルさんが投了した。

「フーッ，こんな力の差を見せつけられたのは久しぶりだぜ。佐為に出会った頃，毎日鍛えられてた頃みたいだ」

ヒカルさんはそれまでの緊張から解き放たれたように背中を背もたれにつけ，伸びをするように深呼吸した。意外に悔しそうではない。悔しがる気を起こさせないほどの完敗ということかな。

次は佐為の対局。ヒカルさんはボクと席を交替した。自分の対局が始まってからも，佐為の表情は相変わらず厳しい。序盤から中盤にさしかかる頃，ボクの後ろに立っているヒカルさんが突然，

「藤原さん，席を替わってくれ」

と言い出した。
「えっ？」
「さっきから，佐為の顔がおぼろげに見えているんだ。気のせいか，幻覚かと思ってたんだけど，だんだん顔がはっきりしてきて，袖が見え始め，手が見え，扇が見えるようになった。石を置く位置が分かるんだ。今指してるのは５の十三だよな」
《そうです》
ボクが答える前に佐為が答えた。ボクはヒカルさんを見つめる。佐為もヒカルさんを見つめている。
「対局中だ。ぐずぐずしてると持ち時間が減る。さあ，替わってくれ」
というヒカルさんの声に促されて，ボクは席を立ち，ヒカルさんに譲った。ヒカルさんはすぐにマウスを握りしめ，佐為の扇が指す位置をクリックし始めた。かつて，佐為がヒカルさんに宿っていた頃，二人はこんなふうにネット碁をしてたんだな・・・・。でも，どうして急にヒカルさんに佐為が見えるようになったのだろう？　〔ひょっとして？・・・・〕ボクは１つの可能性に思い至った。
こんなことを考えているうちにも対局は進み，そして，佐為が投了した。一緒にいるようになって１１年。初めてだった，佐為が投了するのを見るのは。佐為は呆然とディスプレイを見ている。ヒカルさんも。しばらく，何の言葉も出ない。それからヒカルさ

んが

「初めてだぜ。佐為がこんなに・・・・まさに一刀両断された・・・・」

佐為は両の掌を開いてじっと見つめ，それからゆっくりと掌を握りしめた。

《間違いなく，神の一手を目指すのはわたしではなく，わたし以外の人でもなく，このアルファ碁という異類のものなのですね。アルファ碁は去年の3月と比べても格段に強くなっている。これからも強くなるでしょう。もはや人の手の届かない境地を拓いていくでしょう》

ヒカルさんとボクはじっと佐為を見ている。

《ヒカルを育てるという任務は果たし終えました。わたしの名を残すという仕事もやり遂げました。神の一手を極めるという目標は消え失せました。・・・・つまり，もうわたしがここに留まる理由はなくなったのですね》

佐為を見つめているヒカルさんが，

「藤原さん，佐為は何て言ってるんだ？」

「えっ？　聞こえてないの？」

「見えるんだけど，聞こえない。唇が動いているのは分かるけど，声は聞こえない」

「そうなんだ・・・・」

ボクはためらった。佐為の言葉を伝えるのは辛い。伝えられる方も辛いだろう。で

も，伝えないわけにはいかない。ボクは佐為の言葉を要約して伝えた。それを聞いてヒカルさんは佐為に向かって

「つまり，消えるのか?」

と問う。佐為は答えない。ただじっとヒカルさんを見ている。ヒカルさんに自分の声が聞こえないと知って，言葉を発するのをやめたように，ただじっと見つめている。ヒカルさんは佐為の肩をつかんで揺する。

「消えるのか?　消えるのか?」

佐為は答えず，ただじっとヒカルさんを見つめている。その眼差しが潤んでいる。ヒカルさんの目にも涙がにじんでいる。二人は見つめ合っている。そんな二人をボクは見ている。

・・・・ボクの視界の中で佐為の姿が少しずつ薄れていく。ヒカルさんにも分かるのだろう。ヒカルさんは佐為の体を激しく揺さぶる。

「佐為，消えるな!消えるな!」

佐為は慈しみと，幾分かの悲しみの混じった眼差しでヒカルさんを見つめている。そうしている間も，佐為の姿は少しずつ薄れていく。

ボクの中の理性がボクの心に語りかける。「これでいいんだよ。今この時，別れには良い時だよ。だって，これ以上ずっと一緒にいたら，老いさらばえていくボクを見せる

ことになるじゃないの。今はまだ，ボクは佐為の兄弟と言える。今この時，別れるには良い時だよ」だけど，ボクの唇は理性に逆らう言葉をつぶやいた。

「佐為，行かないで」

ボクの小さな声は佐為にもヒカルさんにも届かない。二人とも，別れを惜しむのに夢中だから。それでいいんだ。この時，別れの最後の時は，ヒカルさんのためのもの。だからこそ，ヒカルさんは今この時になって佐為が見えるようになった。

やがて佐為の姿が消えていく。その消失のプロセスが終る頃，消える間際に，佐為はボクに視線を向けた。

▪終わり▪ＦＩＮ▪